

広島女学院大学大学院博士論文

# 日英外来語の発音

2005年3月

小林 泰 秀

## 謝 辞

本年3月の定年退職の前に、学位論文を提出することを児玉實英教授に勧められたのは昨年10月であった。大学院の開設から関わってきた者が、身内から学位をいただくことにうしろめたさを感じながらも、児玉先生のお言葉に甘えて、30年間勤めたあかしになればと、これまで書き上げた論文に加筆、修正、削除を行ない、学位論文にまとめた次第である。

須藤淳教授には、ご多忙にもかかわらず博士論文審査委員会主査を努めていただき、感謝の念にたえない。また、同審査委員の児玉教授にも数々の有益なご助言を頂戴し、心より感謝を申し上げる。更に、学外招聘審査委員の河井迪男広島大学名誉教授には、私が本学に奉職して以来、ご教授を受けてきた。今回、私の学位論文の審査委員になられたことに、深く感謝を捧げたい。

最後に、本学位論文をお読みいただいた3人の審査委員の先生方に、衷心より感謝申し上げます。

2005年3月

小林泰秀

# 目 次

はじめに.....	1
-----------	---

## 第1章 外来語の促音

1.1 はじめに .....	3
1.2 促音とは .....	4
1.3 閉鎖音の促音 .....	10
1.4 摩擦音の促音 .....	20
1.5 おわりに .....	27

## 第2章 外来語の音体系

2.1 はじめに .....	28
2.2 外来語の子音 .....	28
2.3 母音挿入 .....	30
2.3.1 「イ」の挿入 .....	32
2.3.2 「オ」の挿入 .....	33
2.3.3 「ウ」の挿入 .....	34
2.4 音声への対応 .....	39
2.5 スペリングへの対応 .....	44
2.6 外来語のアクセント .....	47
2.6.1 長母音と二重母音 .....	48
2.6.2 撥音 .....	52
2.6.3 促音 .....	55
2.6.4 母音の無声化とアクセント .....	56
2.6.5 複合語のアクセント .....	66
2.6.6 英語と同一のアクセント .....	69
2.6.7 短縮語のアクセント .....	72
2.7 おわりに .....	74

### 第3章 『研究社新英和大辞典』にある日本語の発音

3.1 はじめに .....	75
3.2 音節区分 .....	76
3.2.1 第5版の音節区分 .....	76
3.2.2 第5版と第6版の音節区分 .....	79
3.3 アクセント付与 .....	81
3.3.1 第5版のアクセント付与 .....	82
3.3.2 第5版と第6版のアクセント付与 .....	92
3.4 発音 .....	97
3.4.1 アクセントと発音 .....	97
3.4.2 米音と英音 .....	101
3.4.3 アクセントのある母音の発音 .....	109
3.4.4 アクセントのない母音の発音 .....	114
3.5 おわりに .....	120
発音記号一覧表 .....	122

### 第4章 *The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English* にある日本語の発音

4.1 はじめに .....	134
4.2 ODPの発音記号 .....	135
4.3 アクセント付与 .....	140
4.4 発音 .....	148
4.4.1 嵌入の r .....	148
4.4.2 米音と英音の強勢母音 .....	151
4.4.3 米音と英音の非強勢母音 .....	155
4.4.4 <Vr> の発音 .....	158
4.5 おわりに .....	162
発音記号一覧表 .....	164



おわりに .....172

使用辞典 .....174

参考文献 .....175

## はじめに

外来語は外国語からの借用語であり、日本語の中に溶け込み、言語の一部として使用されているものである。情報化、国際化時代とともに、外来語は私たちの生活に大量に取り入れられている。外来語には、主に中国から入った漢語と西洋から入ったヨーロッパ語があるのであるが、私たちが現在外来語と呼んでいるものはヨーロッパからの借用語であり、その中でも英語が圧倒的に多い。

英語が取り入れられる動機として、一つには語感の新鮮さがある。レストランでは「ご飯」と言わずに「ライス」と言うのがそうである。「ご飯」と言うと、茶わん一杯のご飯が連想される。二つには、従来日本になかった新しいものを取り入れる時に用いる語で、「カーテン」‘curtain’や「ハイウェイ」‘highway’などであり、この種の語彙が一番多い。また、「タレント」は英語では「才能のある人」を指すが、外来語では「テレビやラジオで活躍する職業的出演者」を指している。このように日英語で意味の違う語も多い。

原語と外来語の意味の違いを調べるのも興味ある点ではあるが、本稿は音韻論の立場から外来語の発音について述べていく。私たちの周りにある外来語は英語が主流であるので、本論文では英語からの借用語を主に扱い、他の言語からの借用語は、特に必要な場合以外は引用しない。

本論文のタイトルは『日英外来語の発音』である。私たちが言う外来語は日本語に取り入れられた外国の言葉であるが、英語圏に取り入れられた日本語も彼らにとっては外来語である。本稿は一方通行の借用語研究ではなく、日英両言語の間での言語交流によって現れる言語現象を捉えようとするものである。いわば、外来語と外行語の発音研究論文である。

本論文は第1章と第2章では、外来語辞典に載っている英語からの借用語の発音について述べる。第3章では、逆に、英和辞典に載っている日本語の発音表記について述べる。第3章では、更に20年以上も前に発行の辞典と最近発行の辞典の発音表記の違いについても言及する。第3章で扱う英和辞典は日本で発行されている辞典なので、第4章では、英語圏で発行の辞典に取り入れられている日本語からの借用語の発音について調べ、両辞典の記述の違いについて述べる。

第1章と第2章は英語から日本語へ入った借用語の音体系を調べるものであり、第3章と第4章は日本語から英語へ入った借用語、つまり外行語の音体系を調べるものである。日英両言語間での借用語に見られる特徴を記述するのが本稿の目的である。本論文では、特に、二つの言語が入り混じって新しい借用語を形成する際に現れる言語現象が、両言語をどの程度反映するものであるのか、更には、そこにはどのような言語の普遍性、あるいは一般性が見られるのかに着目したい。外来語の発音が二つの言語の特徴を兼ね備えた中間言語的要素を持っているならば、そこには自ずから両言語の特徴とともに、言語に一般的に見られる現象が現れるはずである。

## 第1章 外来語の促音

### 1.1 はじめに

本章と第2章は、英語が日本語に外来語として取り入れられる際に、どのような原則が働いているかを述べるものである。英語の特質が外来語にどのように反映されているのか、日本語の特質がそのまま外来語に表れているのか、あるいは両言語の接触によって新たな言語規則が現れているのかをみてゆく。

本章は、外来語への子音挿入、つまり促音化が起りやすい環境とはどのようなものか、挿入し易い子音と、挿入し難い子音とはどのようなものかを述べている。促音化で興味ある問題の一つに、日本語の音体系に適應するために、音素を挿入するが、その際子音挿入と母音挿入はどちらが先かがある。例えば net は外来語として netto と発音されるが、net → nett → netto と子音挿入が先か、net → neto → netto と母音挿入が先かである。二つに、英語の母音と子音が日本語の母音と子音に置きかえられる際に、英語のスペリング重視なのか、英語の発音主体なのかがある。例えば net は「ネット」と発音されるのであるが、それはスペリングによる発音なのか、/net/ という音声によるものなのかである。

### 1.2 促音とは

促音は『広辞苑 第4版』(1991)によると、「語中において次の音節の初めの子音と同じ調音の構えで中止的破裂または摩擦をなし、1音節をなすもの。「もっぱら」「さっき」のように「っ」で表わす」である。「語中にある」というのは、日本語は撥音の「ん」以外は語末に母音が来るからである。「次の音節の初めの子音と同じ調音の構えで」というのは、例えば「さっき」であれば、ヘボン式ローマ字では sak・ki のように二つの音節に分けられ、前部の音節の最後の k と後部の音節の初めの k

が同じ子音であるということである。仮名では「っ」と書くが、次の子音と同じ調音をなすので、実際の発音は多様である。促音の後ろの [・] は音節境界を表わす。

更に、『広辞苑』に「中止的破裂または摩擦をなし」とあるのは、促音の「っ」は ip・pon「いっぽん」、kat・te「かって」、sek・kai「せっかい」のように破裂音である場合には、その呼気の流れが一時的に閉鎖される。これを「中止的破裂」と言っている。「っ」は、更に kis・sa「きっさ」、his・su「ひっす」と摩擦音に発音される。「っ」には他に ic・chi「いっち」[it・tɕi]、mit・tsu「みっつ」[mit・tsu] の発音がある。[ts] は歯茎破裂音であり、[tɕ] は歯茎硬口蓋破裂音である。破裂音の調音の際も呼気の流れが一時的に閉鎖される。破裂音は破裂音ではないので、『広辞苑』の定義の「中止的破裂」が正確な表現かどうかであるが、「中止的破裂」とは破裂しない閉鎖の状態と解釈することにする。

『広辞苑』の定義の終わりに、「1 音節をなすもの」とあるが、本書では一つのモーラ（拍）とする。従って、「さっき」の「さっ」は2モーラ1音節である。

ここで日本語の歯茎硬口蓋音(alveo-palatal)について、英語との違いについて触れておく。日本語の「ち」は [tɕi] であり、「し」は [ɕi] なのであるが、英語の発音記号になじんでいる者は、[tʃi], [ʃi] と書いてしまう。一方、我々は、英語の church [tʃɜ:rtʃ], bush [buʃ] を発音する際に、[tɕɜ:rtɕ], [buɕ] と日本語の [tɕ], [ɕ] に発音してしまうことがある。[tʃ] と [ɕ] は調音の位置が近いので、同一の発音と見なしてしまうのである。[tʃ], [ʃ] は歯茎のすぐ後ろで調音される硬口蓋歯茎音(palato-alveolar)であり、[tɕ], [ɕi] は硬口蓋のすぐ前で調音される歯茎硬口蓋音である。両音の違いはこのような調音の位置に加えて、唇の形がある。[tʃ], [ʃ] は円唇性が伴っているが、[tɕ], [ɕi] は平唇性である。唇を丸めると英語らしく聞こえる。更に [tʃ], [ʃ] は舌尖または舌端が硬口蓋歯茎に接近するのに対し、[tɕ], [ɕi] は舌端が口蓋に向かって持ち上げられる。英語では舌の先を動かすが、日本語では舌の前舌面を動かしている。例

例えば [da] の発音にしても、英語話者は舌の先を歯茎に触れるが、日本語話者は舌の前部を歯と歯茎に当てている。

子音が連結しているのは、日本語も英語と同じである。まず日本語の促音形成について述べよう。外来語の促音は子音の挿入による子音重複 (gemination) であるが、日本語の促音の派生は外来語とは違い、母音の削除によるものである。次の単子音と重子音、つまり促音との対語を試みよう。

### (1) 単子音と重子音

いたい (遺体) — いったい (一体)  
かしゃ (貨車) — かっしゃ (滑車)  
こき (古稀) — こっき (国旗)  
こちょう (誇張) — こっちょう (骨頂)  
せかい (世界) — せっかい (石灰)  
せしゅう (世襲) — せっしゅう (接收)  
にほん (二本) — にっぽん (日本)

日本語の促音は、二つの形態素が結合した際に、前の形態素の高母音 (i, u) が削除されたものである。促音の派生過程は日本式ローマ字で書くと次のようになる。[+]は形態素境界である。

### (2) 促音の派生

iti+tai → ittai 「一体」、katu+sya → katsya → kassya 「滑車」、  
koku+ki → kokki 「国旗」、kotu+tyoo → kottyoo 「骨張」、  
niti+pon → nitpon → nippon 「日本」

(2) の前部要素の最後の子音は、後部要素の最初の子音に同化して同音になるので、「滑車」、「骨張」は [kaɕɕa], [kottɕoo] と発音される。

英語の cup, net, kick を kappu 「カップ」、netto 「ネット」、kikku 「キ

ック」と子音を挿入して促音に発音するのは、英語の CVC 音節を保持して英語らしく聞かせるためであろう。

日本語の音節は基本的には CV であり、英語の音節は CVC である。英語は二つの CVC 音節が連なる場合には子音連結(consonant cluster)が起る。次の(3a)は日本語の促音のように同じ子音の重複であり、(3b)は二つの異なる子音の連結である。

### (3) 子音連結

a. brag gangster, gulf fish, red dog, shameless student, white tie

b. announcement, doctor, exchange, mister, picnic, subtract

(3a)は二つの語からなる句であるが、ゆっくり話す場合には、前の語の語末と後ろの語の語頭の子音が重なり、重複音に聞こえる。ところが普通のスピードあるいは早口で話すと、通常単子音に発音される。一方、(3b)の語はゆっくり話そうが、早口で話そうが単子音には聞こえない。表層のレベルでも CVC 音節を保っているのである。

英語の CVC の 1 音節語は、日本人には促音に聞こえる。例えば net は [nett] のように促音があるように感じられる。net は外来語として [netto]「ネット」と発音されるが、/net/ に母音を挿入して [neto] と CV-CV 音節で発音したのでは英語らしく聞こえない。/net/ に子音を挿入して /nett/ とし、日本語の音体系に合うように語末に母音を挿入して [netto]、つまり CVC-CV の英語の音節を形成したのである。結果的には CVC 音節に CV 音節を加えたことになる。

Hughes and Trudgill(1979)は、イギリスの R P では batch [bæʔtʃ], six [sɪʔks]のように閉鎖音の前に声門閉鎖音を挿入すると述べている。英語の声門閉鎖音の発音が、外来語を促音に発音する一因であるように思われようが、/CVʔC/が外来語への入力となっているとは考えられない。促音には閉鎖音以外に「プッシュ」‘push’、「スタッフ」‘staff’のような摩擦音もあり、R P には摩擦音の前に声門閉鎖音を挿入する [pʊʔʃ],

[stæʔf] という発音がないからである。

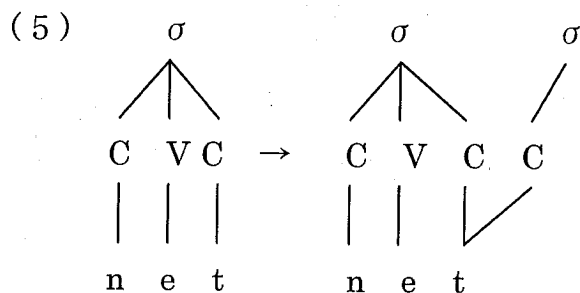
英語の CVC 音節が外来語では CVC.CV になるのは、英語らしい発音にするためだと述べた。しかし、これは英語の音節形態に合わせただけであって、英語話者にとっては CVCCV と CVCV は同じに聞こえる。happy の発音が [hæppi] でも [hæpi] でも英語話者には大差なく聞こえるのと同様に、外来語の「ジャッジ」と「ジャジ」、「チェック」と「チエク」も同じ語として認識される。そうすると、英語の CVC 音節を CVC・CV 音節に変えるのは、英語の発音に近づけるというよりは、英語の音韻体系、つまり音節体系に合わせるためと言えよう。従って、CVC 音節を CVC・CV 音節に発音する過程は、子音挿入が優先か、母音挿入が優先かという問題は決定的ではない。しかし、本著では、規則の順序として、子音挿入を優先させることにする。それは、例えば net に近い発音は、母音挿入の neto よりも子音挿入の nett だからである。

促音化規則は、一般的には阻害音を重複するものであり、次のように書ける。Q は促音を表し、 $\check{V}$  は短母音を表わす。[sonorant] は共鳴性であり、[-sonorant] は阻害性のある音を表わす。

#### (4) 子音挿入

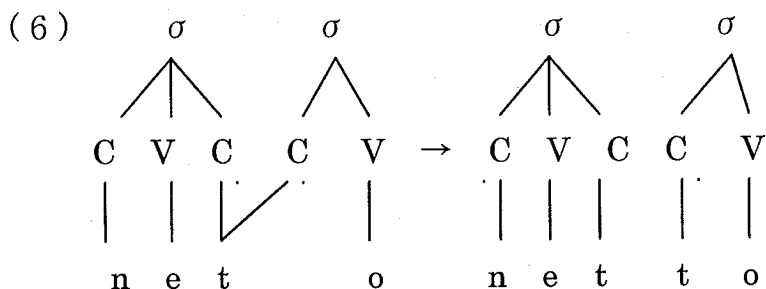
$\phi \rightarrow Q / \check{V} [-\text{sonorant}] \_\_\_\_\_\_$

(4) の規則は、短母音+阻害音の音節では子音を挿入するというものである。これは子音を自律分節的に次の音節に広めるというものであり、次のように書ける。 $\sigma$  は音節を表す。





(5)の頭子音を持つ音節には更に母音が挿入される。



日本語の促音は無声子音である。従って、bed, bag を betto 「ベット」、bakku 「バック」と発音する人もいる。しかし、最近では beddo 「ベッド」、baggu 「バッグ」が多くなり、ほとんどの辞書では「ベッド」、「バッグ」の有声音しか載せていない。この有声音重複は外来語に特有の発音であって、日本語にはその影響は及んでいない。

日本語の動詞として「飛ぶ」が現在形であり、「飛んだ」が過去形である。その派生は次のようになる。

#### (7) 動詞の活用変化

a. tob-ru → tobu 「飛ぶ」

b. tob-ta → tob-da → tod-da → ton-da 「飛んだ」

(7b)の「飛んだ」は、日本語に有聲促音があるならば「飛っだ」と発音されるべきである。日本語に有聲促音がないために、tod が撥音の ton に変化している。これは日本語の音節体系に従ったものである。一方、bed は外来語の音節体系に従い beddo と発音され bendo にはならない。

促音を形成する子音挿入規則は、英語の CVC 音節に適用されるものであり、常に尾子音は阻害音でその前の母音は短母音である。従って、次の(8)の英語には子音の挿入はなされない。

(8) 非子音挿入

a. 子音重複

camp「キャンプ」、change「チェンジ」、ink「インク」、jump「ジャンプ」、pink「ピンク」、sense「センス」、tent「テント」

b. 長母音、二重母音

beach「ビーチ」、bike「バイク」、boat「ボート」、chalk「チョーク」、maid「メイド」、night「ナイト」、out「アウト」、pork「ポーク」、sausage「ソーセージ」、speak「スピーク」

c. V・CV

mo・cha [mou・kə]「モカ」、pho・to [fou・tou]「フォト」

(8c)の「モカ」と「フォト」は、母音が二重母音であることと、破裂音が頭子音であることから子音挿入がなされない。しかし、二重母音を短母音にした外来語の発音からは、「モッカ」、「フォット」という発音があっても不思議ではない。(8)の語に子音が挿入されないのは、日本語では撥音、長母音、二重母音の後では促音は起らないという原則に従ったものである。「ピューッと矢が飛んできた」とか「ボーッと立っていた」のような擬声語や擬態語には長母音の後でも促音があるが、特殊な現象である。

外来語の導入によって、日本語に新しく促音規則が適用されるようになったが、それは従来の日本語の音節体系に従ったものであって、決して新しいものではない。CVC・CVは日本語にも his・si「必死」、rok・ko「6個」、sip・pu「湿布」のように存在している。英語の CVC を外来語として CVC・CV に変えることに新しさがあるのである。

(4)に挙げた促音化規則は、阻害音の後ろに同じ阻害音を付加するというものである。同一の子音が連続するのは、(5)の自律分節の図にも表れている。阻害音は、呼気が口腔内において何らかの阻害を受ける音声であり、破裂音、破擦音、摩擦音の三つがある。破裂音と破擦音は、呼気の流れが口腔内で一時的に閉鎖されるものであり、閉鎖のない摩擦音と

は[閉鎖性]、[継続性]の弁別的特徴で区別される。本著では、閉鎖音を[−continuant]（非継続性）、摩擦音を[+continuant]（継続性）で表わす。

### 1.3 閉鎖音の促音

英語の語末子音が破裂音と破擦音である場合には、次の規則により子音が挿入される。[+]は形態素境界を表わす。

#### (9) 閉鎖音挿入規則 (1)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} [-continuant] \_\_\_\_\_\_ +$$

規則(9)は破裂音と破擦音に適用されるのであるが、破裂音の促音化の例を第1にあげよう。ローマ字は日本式を用いている。( )内のローマ字は母音を挿入した発音であるが、母音挿入については後で詳しく述べる。本章の外来語は、主として『コンサイス カタカナ語辞典 第2版』(2002) (以下『カタカナ語辞典』) からのものである。

#### (10) 語末が無声破裂音の場合

##### a. 語末が /p/

cap: kyap → kyapp (→ kyappu) 「キャップ」

leadership 「リーダーシップ」、ketchup 「ケチャップ」、map 「マップ」、mop 「モップ」、scrap 「スクラップ」、tip 「チップ」

##### b. 語末が /t/

rocket: roket → rokett (→ roketto) 「ロケット」

bucket 「バケット」、jacket 「ジャケット」、market 「マーケット」、pilot 「パイロット」、racket 「ラケット」、spirit 「スピリット」、trumpet 「トランペット」、violet 「バイオレット」

##### c. 語末が /k/

picnic: piknik → piknikk (→ pikunikku) 「ピクニック」

attack「アタック」, back「バック」, black「ブラック」, hammock  
「ハンモック」, hysteric「ヒステリック」, technic「テクニク」

/t/で終わる語には bucket「バケツ」、jacket「ジャケツ」、spirit「スピリツ」のように、促音化せずに「ツ」に発音されるものもあるが、古い発音であり、「バケツ」と「バケット」のように意味の違うものもある。

有声子音の重複は、英語では hot dog, Arab buyer, big garage のような二つの語の子音連続に聞かれるが、前にも述べたが、日本語には元来存在しなかった。従って、古くは pyramid, god は「ピラミット」、「ゴット」と発音されていたと思われる。非常に古い辞典である『大言海』（1932）でも有声音で記載されているが、当時、多くの人は実際には無声音に発音していたであろう。

英語の語尾が有声破裂音の外来語を見てみよう。

#### (11) 語末が有声破裂音の場合

##### a. 語末が /b/

cab: kyab (→ kyabu, \*kyabbu) 「キャブ」

Arab「アラブ」, club「クラブ」, jab「ジャブ」, knob「ノブ」, mob  
「モップ」, prefab「プレハブ」, pub「パブ」, rib「リブ」, snob  
「スノップ」

##### b. 語末が /d/

pyramid: piramid → piramidd (→ miramiddo) 「ピラミッド」  
bed「ベッド」, god「ゴッド」, head「ヘッド」, kid「キッド」, liquid  
「リキッド」, red「レッド」, spread「スプレッド」, vivid「ビビ  
ッド」, wood「ウッド」

##### c. 語末が /g/

drug: drag → dragg (→ doraggu) 「ドラッグ」

bulldog「ブルドッグ」, egg「エッグ」, flag「フラッグ」, handbag  
「ハンドバッグ」, smog「スモッグ」, tea bag「ティーバッグ」

(11a)に見られるように、/b/の促音の例は少ない。これから新しく導入される外来語にも、/b/の促音はないであろう。一方、語末が /d/ と /g/ の場合は、通常促音になる。最近の辞書には、bed「ベット」、bag「バック」といった無声子音の促音は載っていない。

語末が破擦音の場合も、破裂音と同様に子音重複が起る。

## (12) 語末が破擦音の場合

### a. 語末が /tʃ/

catch : kyach → kyacch (→ kyacchi)「キャッチ」

crutch「クラッチ」, match「マッチ」, rich「リッチ」, sandwich「サンドイッチ」, scratch「スクラッチ」, touch「タッチ」, watch「ウォッチ」

### b. 語末が /dʒ/

judge : jaj → jajj (→ jajji)「ジャッジ」

bridge「ブリッジ」, cartridge「カートリッジ」, college「カレッジ」, lodge「ロッジ」, village「ビレッジ」

語末の /tʃ/ と /dʒ/ は、次に母音がないのでヘボン式の ch と j で表記することにする。母音の挿入した外来語は、日本式に kyatti, zyazi と表記できるが、英語が破擦音であるのを表わすには、ヘボン式の ch と j のほうが便利である。

語末の閉鎖音の促音をみてきたが、/ps/, /ts/, /ks/ が語末である英語にも促音化が起る。次の閉鎖音挿入規則(2) に s を加えた規則と適用される外来語は次のものである。(9)の規則では語末の境界が形態素であったが、次の規則では語境界[#]である。このことについては後で述べる。

## (13) 閉鎖音挿入規則 (2)

$\phi \rightarrow Q \quad / \quad \check{V} \quad [-\text{continuant}] \quad \_\_\_\_\_\_ \quad s \#$

(14) 語末が /Cs/

box: boks → bokks (→ bokkusu) 「ボックス」

cats 「キャッツ」, electronics 「エレクトロニックス」, let's 「レッツ」, paradox 「パラドックス」, potato chips 「ポテト・チップス」, slacks 「スラックス」

(13)の規則は語末の子音に適用されるものであり、次の語のように /ks/ の後ろに他の形態素がある場合には子音の挿入はない。

(15) /ks/+形態素

box+ing: boks+ing (→ bokusingu) 「ボクシング」

↘ \*bokks+ing (→ bokkusingu) 「ボックシング」

box+er 「ボクサー」, ex+change 「エクスチェンジ」, ex+cite 「エキサイト」, mix+er 「ミキサー」, mix+ing 「ミキシング」, mix+ture 「ミクスチュア」, sex+y 「セクシー」

(13)の規則は、語末の子音に適用されるものであり、二つの語が結合する複合語も次のように適用される。

(16) /Cs/#語

box#office: boks#ofis → bokks#ofis (→ bokkusu ofisu)

「ボックス・オフィス」

box camera 「ボックス・カメラ」, cat's eye 「キャッツ・アイ」, mixed yarn 「ミックス・ヤーン」, taxpayer 「タックスペイヤー」, wax cloth 「ワックス・クロス」

mixed yarn の -ed は、外来語として日本語に導入された際に削除されている。Maxwell は1語にもかかわらず「マックスウェル」と促音に発

音されるので、Max と well の複合語と見なしているのであろう。

/ks/ が重子音になるのは、語末か後続する形態素が自由形態素、つまり語でなければならない。

閉鎖音に拘束形態素が付加しても、次のように重子音になる。

(17) 閉鎖音+拘束形態素

a. -ing の付加

bat+ting: bat+ing → batting (→ battingu) 「バッティング」  
cooking 「クッキング」, docking 「ドッキング」, developing 「デベロップング」, heading 「ヘッディング」(「ヘディング」もあり),  
knitting 「ニッティング」, pitching 「ピッチング」, shocking 「ショッキング」, shopping 「ショッピング」

b. -er の付加

clipper: krip+aa → krippaa (→ kurippaa) 「クリッパー」  
baby sitter 「ベビー・シッター」, batter 「バッター」, catcher 「キャッチャー」, cutter 「カッター」, developer 「デベロッパー」,  
flapper 「フラッパー」, shutter 「シャッター」, slugger 「スラッガー」, stopper 「ストッパー」, upper 「アッパー」, zipper 「ジッパー」

c. その他の接尾辞の付加

attachment 「アタッチメント」, capless 「キャップレス」, fitness 「フィットネス」, development 「デベロップメント」

d. jogger 「ジョガー」, jogging 「ジョギング」

(17a)の heading には促音の「ヘッディング」と非促音の「ヘディング」の両方があるが、最近の辞書では有声子音の促音は消えつつある。(17d)の Jogging と jogger を有声重子音で発音するのは、今ではまれである。(17a)の例外に market+ing 「マーケティング」がある。marketing を一つの語として見ているのであろう。その場合、閉鎖音 /t/ は尾子音では

なく、mar•ke•ting のように音節頭子音とみなされる。

閉鎖音の次に自由形態素が続く複合語では、閉鎖音は重子音になる。  
自由形態素は語でもあるので、語境界を付して次のように表わされる。

(18) 閉鎖音#自由形態素

touchdown: tach#daun → tacch#daun (→ tacchidaun) 「タッチ・ダウン」

blacklist 「ブラック・リスト」, bloodstone 「ブラッド・ストーン」,  
football 「フット・ボール」, judge paper 「ジャッジ・ペーパー」,  
knockout 「ノック・アウト」, midnight 「ミッド・ナイト」, nickname  
「ニック・ネーム」, patchwork 「パッチ・ワーク」, picnic lunch 「ピ  
クニック・ランチ」, platform 「プラット・ホーム」, tag match  
「タッグ・マッチ」

次の規則は、閉鎖音の次に語末の子音共鳴音が続く場合に促音化が起  
るものである。

(19) 閉鎖音挿入規則 (3)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} \quad [-\text{continuant}] \quad \longrightarrow \quad \left[ \begin{array}{c} +\text{consonantal} \\ +\text{sonorant} \end{array} \right] +$$

外来語への入力は、原則的に英語の音声表示である。規則(19)は英語  
の音素への適用ではなく音声へのものである。例えば, apple, happen の  
外来語としての基底表示は, /æpl/, /hæpn/ であって, /æpəl/, /hæpən/で  
はない。規則(19)への適用語を見て見よう。

(20) 閉鎖音-子音共鳴音

a. 閉鎖音-/l/

apple: ap-l → app-l (→ appuru) 「アップル」



couple「カップル」, juggle「ジャッグル」, knuckle「ナックル」, tackle「タックル」

b. 閉鎖音-/n/

happen: hap-n → happ-n (→ happun) 「ハップン」

cotton 「コットン」, kitchen 「キッチン」

c. 閉鎖音-/r/

litre: rit-r → ritt-r (→ rittoru) 「リットル」

(19)の規則が適用されないものに /tl, dl/ がある。

(21) battle 「バトル」, bottle 「ボトル」, huddle 「ハドル」, little 「リトル」, middle 「ミドル」, paddle 「パドル」

/tl/ や /dl/ で始まる語はない。/tl/ と /dl/ に子音重複が起らないのは、それを一つのかたまりとして見なすためである。従って battle[bæt], middle[mɪd]の外来語としての音節区分は ba・tl, mi・dl となる。/tl/ と /dl/は母音が挿入され、toru「トル」、doru「ドル」と発音される。

(19)は閉鎖音+共鳴子音が語末にある規則であり、語中にある場合には patron「パトロン」、patrol「パトロール」、pickles「ピクルス」のように促音にならない。「ピクルス」は英語の発音からは /pik-l-z/ が外来語への入力となるべきであるが、通常複数形で用いられるため /pikls/ が入力となっている。

happen は閉鎖音-鼻音の連続音であるため、閉鎖音重複が起っているが、同じ語でありながら閉鎖音-VN# の語には規則(19)が適用されない。閉鎖音が次の VN の頭子音になる。

(22) 閉鎖音-VN

baton: ba・ton → baton 「バトン」

atom 「アトム」, bottom 「ボトム」, chicken 「チキン」,

Japan 「ジャパン」, mutton 「マトン」

cotton 「コットン」が重子音であり、mutton 「マトン」が単子音であるのは、外来語への入力の違いにある。もちろん「コットン」は古い発音であり、「マトン」は新しい発音であるのだが、「コットン」は/kot-n/が入力であり、「マトン」は /ma・ton/ である。(22)の「チキン」も入力は /ti・kin/ であり、/tik・in/ ではない。/tik・in/ であれば「チッキン」と発音される。促音は尾子音と頭子音の連続音であるので、促音化は/CVC/ の入力にしか起らない。尾子音は日本語では一つのモーラと見なされている。

(22)の語のように閉鎖音の次に母音がある場合には、閉鎖音と母音の間に形態素境界がないかぎり促音にはならない。次の例も語中の母音間の閉鎖音が促音化しないものである。

### (23) 母音間の閉鎖音

#### a. 閉鎖音-er

butter: ba・taa → bataa 「バター」

better 「ベター」, letter 「レター」, pattern 「パターン」, return 「リターン」, supper 「サパー」

#### b. 閉鎖音-y

body: bo・dii → bodii 「ボディー」

charity 「チャリティー」, city 「シティー」, copy 「コピー」, kitty 「キティー」, puppy 「パピー」

#### c. 閉鎖音-V...

appeal: a・piir → apiiru 「アピール」(「アッピール」もあり)

appetizer 「アペタイザー」, appoint 「アポイント」, attest 「アテスト」, chapel 「チャペル」, hotel 「ホテル」,

(23a)への例外として pepper 「ペッパー」がある。これは古い発音であ

る。新しい語の peppermint 「ペパーミント」には促音化が起っていない。古い辞典である『大言海』(1932)には、supper 「サッパ―」というのがある。もし support が載っていたら「サッポ―ト」と書かれているだろう。(23b)の例外として happy 「ハッピー」がある。これも古い発音であり、<VCCV> のスペリングの促音化である。letter を「レツテル」と発音するのは、オランダ語からの借用である。

(23c)の appeal に二つの発音があるが、促音の方が古いのは言うまでもない。NHK編『日本語発音アクセント辞典』(1995) (以下『アクセント辞典』)には「アピール」しか載っていない。(23c)の chapel 「チャペル」の入力が tyap.el なのは外来語の発音から分る。tyap.l であれば「チャップル」と発音されることになる。英語のスペリング <pel>が「ペル」と発音されている。ところが、nickel 「ニッケル」、baccal 「バッカル」のように母音間の閉鎖音が促音化している。/k/ は他の閉鎖音に比べて促音に発音されることが多い。次にその例を見ていこう。/k/ の促音化規則は次のようになる。

#### (24) 閉鎖音挿入規則 (4)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V}k \text{ \_\_\_\_\_\_ } V$$

/k/ が語末であれば当然促音になるのであるが、(24)の規則は語中の /k/ が促音化するというものである。(24)の適用される語を見て見よう。

#### (25) /k/ の促音化

##### a. /k/-V

Dacca 「ダッカ」, Decca 「デッカ」, hockey 「ホッケー」, Mickey 「ミッキー」

##### b. /k/-er

lacquer 「ラッカー」, soccer 「サッカー」

##### c. /k/-Vl

buccal「バツカル」, nickel「ニッケル」

d. /k/-V...

bacchant「バツカント」, hickory「ヒッコリー」, McKinley「マッキンリー」, saccharin「サッカリン」

/k/ を促音で発音するか単音で発音するかは、英語のスペリングが多いに関係している。(25)の /kk/ はそのスペリングが <cc>, <ck>, <cq>, <cch> である。英語の /k/ が促音化しない語も次に見てみよう。<> はスペリングを表わす書記素(grapheme)、あるいは文字素であり、/ / は英語の音素を表わしている。

(26) /k/ の非促音化

a. <c>, <ch>, <q>

document「ドキュメント」, echo「エコー」, equal「イコール」, record「レコード」

b. /ks/

accent「アクセント」, access「アクセス」

c. /kC/

action「アクション」, bacteria「バクテリア」, cocktail「カクテル」, pickles「ピクルス」, secretary「セクレタリー」, technician「テクニシャン」

(26a)は /k/ のスペリングが <cc>, <ck>, <cq>, <cch> 以外のものである。(26b)は <cc> が /ks/ に発音されるものである。(26c)は /k/ の次にC V音節の続いているものである。(26b)と(26c)は /k/ の次にC V音節が続いているという点で、同じ環境のものである。

固有名詞は、英語の音節が/CV・CV/であっても、例外的に子音重複が起っている。しかし、次の(27b)のように、後ろの音節の頭子音が有声音の場合には子音重複は起らない。

(27) 固有名詞

- a. Chaplin「チャップリン」, Rockfeller「ロックフェラー」, Thatcher「サッチャー」
- b. Macbeth「マクベス」, MacDonald「マクドナルド」

母音間の閉鎖音が促音になる例として /k/ を挙げ、例外として happy と pepper があると述べたが、これらは古い形であり、英語の <pp> のスペリングをそのまま促音に発音したものである。一方、<tt> のスペリングの語には、促音に発音されるものが次のようにある。これらは必ずしも古い外来語ではない。

(28) <tt> の促音化

battery「バッテリー」, mitten「ミッテン」, motto「モットー」, otter「オッター」, ottoman「オットマン」

外来語への入力は、基本的には英語の音声であるのだが、/kk/ にしても /tt/ にしても、正書法が大いに関与しているのである。

#### 1.4 摩擦音の促音

促音は阻害音にのみ起こる現象であり、破裂音、破擦音、摩擦音がその対象となる。破裂音と破擦音の促音には無声音と有声音の両方が見られたが、摩擦音の促音は無声音のみである。摩擦音には歯茎摩擦音と硬口蓋摩擦音があるが、まず歯茎摩擦音の促音を見てみよう。

(29) 摩擦音挿入規則 (1)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} s \text{ \_\_\_\_\_\_ } [+sonorant]_1^2 (C) \#$$

(29)の規則の[sonorant]は、母音もしくは子音の共鳴音である。小文

字の [i] は, /s/ の次に共鳴音が最低一つ、最高二つあることを意味する。従って、共鳴音が二つ続く場合には、母音の次に /l/ か /n/ のいずれかがある。( ) 内の語末の阻害子音は任意である。再三述べるが、促音形成の子音挿入規則は、基本的には英語の音声に対して適用されるものである。

(29)の規則は、/s/ の次には共鳴音がなければならないので、次のように/s/ が語末に来る語には適用されない。

(30) /s/ が語末

address「アドレス」, bass「(ブラック)バス」, dress「ドレス」, kiss「キス」(「キッス」もあり), pass「パス」, process「プロセス」

kiss を「キッス」と発音するのは古い発音のなごりである。kiss curl「キス・カール」, kiss candy「キス・キャンディー」が「キッス」と発音されることはない。『大言海』では、address は「アドレックス」である。

/s/ の次に母音が来る場合には子音重複が起る。英語の /st/, /si/ は外来語には /si/ と入力され、「シ」と硬口蓋音に発音される。

(31) /s/-V

a. compressor「コンプレッサー」, dresser「ドレッサー」, essay「エッセイ」, professor「プロフェッサー」, Russell「ラッセル」

b. /s/-V-共鳴音-(子音)

dress<sup>ing</sup>: dress<sup>ing</sup> → dress<sup>ing</sup> (→ doresshingu)「ドレッシング」

cross<sup>ing</sup>「クロッシング」, essence「エッセンス」, message「メッセージ」, pass<sup>ing</sup>「パッシング」, pass<sup>ive</sup>「パッシブ」

croissant<仏語>「クロワッサン」, dessin<仏語>「デッサン」

(29)の規則は語に適用されるので、dress-er のように拘束形態素が付加した語にも適用できる。/si/ の直後に共鳴子音が来る語にも、(29)の

規則は適用される。

(32) /s/-共鳴子音

hustle has-l → hass-l (→ hassuru) 「ハッスル」

castle「キャッスル」, lesson「レッスン」, listen「リッスン」, whistle  
「ホイッスル」

(29)の摩擦音挿入規則が適用されない語は次のようである。

(33) 歯茎摩擦音の非促音化

- a. assignment「アサイメント」, assistant「アシスタント」,  
association「アソシエーション」, fascism「ファシズム」, fascist  
「ファシスト」, pessimism「ペシミズム」, pessimist「ペシミス  
ト」
- b. aspirin「アスピリン」, crossfire「クロスファイア」, escape「エ  
スケイプ」, pastel「パステル」, passport「パスポート」, question  
「クエスチョン」, suggestion「サゼスチョン」
- c. aside「アサイド」, glycerin「グリセリン」, jealousy「ジェラシ  
ー」 officer「オフィサー」, reception「レセプション」
- d. buzzer「バザー」, jazz「ジャズ」, puzzle「パズル」

(33a)は /s/ の後ろの分節素が(29)の規則に適っておらず、(33b)は /s/ の  
後ろが阻害音であり、(33d)は有声摩擦音である。(33a)の fascism と  
fascist は、英語の発音は [fæʒɪzm], [fæʃɪst] であって [s] ではない。し  
かし、外来語への基底表示は /fæʒɪzm/, /fæʃɪst/ であるとする。理由は  
その基底形が /ʃ/ であれば、促音に発音されるはずだからである。

イタリア語であるが、fascio は「ファッショ」と促音に発音される。  
これは原語が促音に発音されるからであろうが、<VscV> のスペリング  
は促音になりやすい。『カタカナ語辞典』には「ファシネーション」の代

替発音として「ファッシネーション」も載っている。我々は何気なく fascist, fascism を「ファッシスト」、「ファッシスト」と発音してしまう。同じように、古くは <VstV> の question, suggestion を「クエッション」、「サゼッション」とも発音していたが、今では英語の /stʃ/ に近い「クエスチョン」、「サゼスチョン」である。『外来語語源』(1990)には後者の発音も載っている。

(33c)の語が促音に発せられないのは、英語のスペリングが <s>, <c> だからである。促音に発音されるのは <ss>, <st> のように二つの文字でなければならない。破裂音は、hat, dog の尾子音が1文字でも「ハット」、「ドッグ」と促音になれるのとは異なるところである。

次に硬口蓋摩擦音の促音を見てみよう。英語の /j/ が外来語への入力となっている。第1章でも詳しく述べたが、英語の /j/ が硬口蓋歯茎摩擦音であるのに対して、日本語は歯茎硬口蓋摩擦音 /ç/ である。硬口蓋摩擦音の促音規則は次のようになる。

#### (34) 摩擦音挿入規則 (2)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} \_$$

(34)の規則は、/j/ の前の母音が短母音であれば、促音化するという非常に単純なものである。/s/ と /j/ は似たような摩擦音であるが、促音化という面では /j/ の方が適用範囲が広くなる。(34)の規則は次の語に適用される。

#### (35) 硬口蓋摩擦音の促音化

##### a. /j/ が語末

British 「ブリティッシュ」, cash 「キャッシュ」, crash 「クラッシュ」, dash 「ダッシュ」, dish 「ディッシュ」, finish 「フィニッシュ」, flash 「フラッシュ」, publish 「パブリッシュ」, rush 「ラッシュ」, wash 「ウォッシュ」



b. /ʃ/-V

crusher 「クラッシャー」, cushion 「クッション」, discussion 「ディスカッション」, fashion 「ファッション」, fashionable 「ファッショナブル」, mission 「ミッション」, passion 「パッション」, permission 「パーミッション」, professional 「プロフェッショナル」, smashing 「スマッシング」, tissue 「ティッシュ」, washer 「ワッシャー」

c. /ʃ/-C

cashless 「キャッシュレス」, mashed potato 「マッシュト・ポテト」, mushroom 「マッシュルーム」, punishment 「パニッシュメント」, refreshment 「レフレッシュメント」, washteria 「ウオッシュテリア」

(35a)は /ʃ/ が語尾であり、(35b)は /ʃ/ が母音の前にあり、(35c)は /ʃ/ が子音の前にある。marshmallow は、外来語では「マシュマロ」と「マ」が短母音に発音されるが、英語では [mɑ:ʃmelou] であるので促音にはならない。「マーシュマロー」が英語に近い発音なのだが、モーラ数が多くなるので短くしたのであろう。

他の促音と同じく、/ʃ/ も英語のスペリングが大いに関与している。次の語は硬口蓋摩擦音に発音されているが、決して促音にはなれない。

(36) 硬口蓋摩擦音の非促音化

a. measure 「メジャー」, vision 「ビジョン」

b. mansion 「マンション」, tension 「テンション」

c. edition 「エディション」, machine 「マシーン」, musician 「ミュージシャン」, official 「オフィシャル」, politician 「ポリティシャン」, position 「ポジション」, technician 「テクニシャン」

(36a)は硬口蓋摩擦音が有声音であり、(36b)は硬口蓋摩擦音の前が子音

であるので、非促音化の説明がつく。一方、(36c)は(34)の摩擦音挿入規則に抵触していない。スペリングを見てみよう。促音になる硬口蓋摩擦音は、英語のスペリングが<sh>と<ss>であって、(36)の<s>, <c>, <ch>, <t> のスペリングは促音には発音されていない。しかし、我々は常に英語のスペリングを頭に描いて外来語を発音しているだろうか。(36c)の語を促音に発音する人に出会うことがあってもおかしくはない。

最後に唇歯摩擦音/f/の促音を見てみよう。促音に発音されるのは <ff> とギリシャ語⇒ラテン語にその語源を持つ <pph> である。唇歯摩擦音の挿入規則は次のようになる。

(37) 摩擦音挿入規則 (3)

$$\phi \rightarrow Q / \check{V} f \text{ \_\_\_\_\_\_ } [+sonorant]_0^2 \#$$

/f/の促音化規則は、これまでの促音に比べて例外が多いのであるが、一般的な規則としては(37)の子音挿入規則ということになるだろう。(37)の規則は、/f/ の後ろに共鳴音がゼロから二つまでである場合には、/f/ を挿入するというものである。次の語は /f/ が語末にあるので、(37)の規則が適用されるのであるが、(38a)のように適用されない語も多い。

(38) /f/ が語末

a. buff 「バフ」, off 「オフ」, puff 「パフ」, sheriff 「シェリフ」

b. baff 「バッフ」, staff 「スタッフ」, stuff 「スタッフ」

(38)の例をみると、これから将来、語末の位置での促音化が消えていくように思われる。(37)の /f/ 挿入規則が適用される語を見てみよう。

(39) 唇歯摩擦音の促音化

a. /f/-[sonorant]

baffle 「バッフル」, duffel 「ダッフル」, shuffle 「シャッフル」, waffle

「ワッフル」

b. /f/-V-[sonorant]

buffer「バッファー」, baffy「バッフィー」, buffing「バッフィング」,  
offer「オファー」(「オッファー」もあり), Sappho「サッフォー」,  
sniffer「スニッファー」, stuffer「スタッパー」, taffy「タッフィー」,  
Eiffel(仏語)「エッフェル」

『カタカナ語辞典』では「オファー」を主な発音としている。これだけがなぜ促音にならないのか説明が付かない。同辞典に「バッフィング」‘buffing’がある。外来語への入力が英語の発音の /bʌfɪŋ/ であれば(37)の規則が適用される。しかし、外来語の発音からは /bʌfɪŋ/ と考えられる。そうすると規則(37)は適用されない。英語の <ng> は発音入力が /ŋ/ であり、そのスペリングが「ング」ということになる。

(37)の /f/ 挿入規則が適用されない語を見てみよう。

(40) 唇歯摩擦音の非促音化

- a. cuffs「カフス」, offside「オフサイド」
- b. ruffler「ラフラー」, sapphire「サファイアー」
- c. effect「エフェクト」, offense「オフエンス」, office「オフィス」,  
official「オフィシャル」, sapphism「サフィズム」
- d. graph「グラフ」, photography「フォトグラフィ」, photographer  
「フォトグラファー」, rough「ラフ」, refine「リファイン」, reform  
「リフォーム」, tough「タフ」, tuft「タフト」

(40a)は /f/ の後ろに阻害音があり、(40b)の ruffler /rʌflər/, sapphire /sæfaɪər/ は /f/ の後ろに三つの共鳴音があり、(40c)は /f/ の後ろに /VC/ が続いている。(40a)の例外として、puffed rice「パフット・ライス」, staffage「スタッフージュ」, stuffed「スタフド」がある。これは <ff> のスペリングを重子音に発音したものである。(49d)の語は、

英語のスペリングが <f>, <gh>, <ph> であり、挿入規則に適っていても促音には発音されない。

以上、促音化について述べてきたが、阻害音の中でも促音になる優先順位は、破裂音－破擦音－摩擦音（歯擦音）－摩擦音（非歯擦音）となろう。元来、日本語の促音は無声音であるが、破裂音と破擦音には有声促音も見られる。これは呼気の流れの閉鎖によって重子音が作りやすいことにある。本章で見てきたように、促音化されやすい子音があり、同時に促音化されやすい音韻的環境があるのである。

### 1.5 おわりに

外来語の促音挿入規則を英語の音声表記を入力として考えるのが本論文の主旨である。しかし、英語の発音では推し量れない面もあり、古い時代からの正書法という視覚的な要素が促音を発音する要因にもなっている。現在ではどちらかというところ、促音は少なくなる傾向にあり、英語の単音に近くなりつつある。しかし、一方では外来語らしさを表わすために促音は重要であり、一向になくなる気配はない。外来語を聞いても英語話者が理解できないのは、促音があるからではなく、母音挿入とか、アクセントの違いとか、音の置き換えなど、他の音韻的要因が関与しているからである。これらの外来語の特徴については第2章で述べる。

## 第2章 外来語の音体系

### 2.1 はじめに

本章では、まず第1に、外来語の発音と日本語の発音の違いについて述べよう。building と fight を和語のカナ文字で発音すると「ビルディング」、「ファイト」になるが、外来語の発音は「ビルディング」、「ファイト」である。第2に、外来語への母音挿入の自然性について述べよう。garage, belt には gareeji [ガレージ], beruto 「ベルト」と三種類の母音が加えられている。第3に、外来語の発音は、英語の発音が入力なのか、英語のスペリングが入力なのかについて述べよう。

本章の最後に、外来語のアクセントと英語のアクセントの違いを、日本語のアクセントと比較しながら述べよう。外来語のアクセント規則はどのような音韻構造に適用されるのか、英語のアクセントが外来語にどの程度影響を与えているのかという問題がある。本章では、日英両言語間の相違点、共通点も注目しながら議論を進めて行く。

### 2.2 外来語の子音

外来語の導入によって、日本語の音体系がくずれている。タ行音は日本式ローマ字では ta ti tu te to と書くが、ヘボン式ローマ字では ta chi tsu te to とより実際の発音に近い表記になっている。t が次に i が来ると ch に発音され、次に u が来ると ts に発音されるのが日本語の規則である。しかし、より原語に近い発音にするために、外来語には上記の日本語の音韻規則が適用されない場合がある。次の(1)は外来語にのみ見られる発音である。なおカナ文字は、『コンサイスカタカナ語辞典 第2版』(以下、『カタカナ語辞典』)(2002)からのものである。

(1) 外来語の発音

- a. ta 行音 ティー・パーティー ‘tea party’、トウモロー ‘tomorrow’
- b. da 行音 ディーゼル ‘diesel’、デューティー ‘duty’、ドウ・ワップ ‘doo-wop’
- c. fa 行音 ファミリー ‘family’、フィールド ‘field’、フェリーボート ‘ferryboat’、フォト ‘photo’
- d. sya 行音 シェーカー ‘shaker’
- e. zya 行音 ジェット ‘jet’
- f. tyā 行音 チェックアウト ‘checkout’
- g. ya 行音 イェスペルセン ‘Jespersen’、イェーツ ‘Yeats’
- h. wa 行音 ウィッチ ‘witch’、ウェア ‘wear’、ウォーター ‘water’

(1c)の fa 行音は両唇摩擦音の[Φa]である。[Φ]は日本語では[Φw]（「フ」）にしか聞かれないが、外来語ではすべての母音の前で発音される。ha 行音とせずに fa 行音としたのはそのためである。da 行音に「デュ」があるのだから、ta 行音にも「テュ」があり、tube, tulip が「チューブ」「チューリップ」と表記されても良いのだが、「チューブ」、「チューリップ」である。「チューイン・ガム」‘chewing gum’や「チューズ」‘choose’の「チュ」とは英語の音素が異なるのであるが、元来「テュ」のない日本語では、以前から日本語にある「チュ」（「中央」、「昼食」など）に代替している。将来は「チュ」と「テュ」が区別して使われることを望むが、「チューリップ」のように固定した発音を変えるのには時間がかかる。将来「チューリップ」という語が出現する際には、現存の「チューリップ」とは別の特別の意味を持った tulip を指す場合であろう。そして「テュ」の発音が定着すると、やがて「チューリップ」が「テューリップ」に淘汰され、「テュ」の発音だけが残ることになるだろう。しかし、これは筆者の希望的憶測にすぎない。ちなみに、『カタカナ語辞典』

には tuba 「チューバ」と tulle 「テュール」が載っているが、一般的な発音は「チューバ」、「テュール」であり、「テュ」はあくまでもスペリング <tu> に対応する可能な発音として載っているにすぎない。

『カタカナ語辞典』で英語の /je/ が「イエ」と表記されるのは「イエスペルセン」のような固有名詞であり、yesterday, yellow は「イエスタデー」、「イエロー」である。Jerusalem には「イエエルサレム」と「エルサレム」が載っているが、後者が一般的である。英語の /wi/, /we/ は「ウィ」、「ウェ」と表記される語が多いが、中には sandwich は「サンドイッチ」と /w/ が発音されなかったり、window は「ウインドー」、west は「ウエスト」のように /wi/ が2モーラに発音されるものもある。英語の /wo/ は「ウォ」と表記されるが、例外として「ウオブル」‘wobble’がある。

『カタカナ語辞典』には英語の /kw/ に対応する発音として「クアルテット」(→「カルテット」) ‘quartetto’ と「クォーター」‘quarter’ の「クァ」と「クォ」が載っている。当辞典では Guatemala が「グアテマラ」と記載されているが、「クァ」があるのだから「グァテマラ」があっても良い。辞典にはまだ統一性が見られない。

## 2.3 母音挿入

日本語の音節は、基本的には -CV- で成り立っているので、英語の1音節語の next /nɛkst/ は ne・ku・su・to と4音節になり、script /skript/ は su・ku・ri・pu・to と5音節になる。日本語の音体系にするためには母音を挿入しなければならない。日本語には「ア、イ、ウ、エ、オ」の五つの母音があるのだが、どの母音が一番英語に近く聞こえるのだろうか。cup, net, kick, cab, head, dog の語尾に母音を挿入するとしたら、「ウ」が最も妥当であるように思われる。/kɒpu/, /nɛtu/, /kɪku/, /kæbu/, /dɒgu/の方が、非高母音の「エ、オ、ア」を挿入する /kɒpe/, /kɒpo/, /kɒpa/ よりも英語に近く響く。日本語の「ウ」は英語よりも中舌の位置

に近い母音 /ɯ/ であり、日本語の話者にとっては同じ高母音の「イ」よりも舌を移動せずに発音できる母音であるので、挿入しやすいと言える。

城生(1998:67-68)によると、「ウ」は舌の位置は中舌寄りの後舌であり、開口度は狭と半狭の中間にある。そして開口部は縦方向の開きと横方向の開きの最も少ない母音である。城生(66)は更に、「ウ」はしまりのない中途半端な口の形をしているので、人物写真を撮る際には「チーズ」と言うのは良くないと進言している。このことから、日本語の「ウ」は舌の移動、唇の変化が少なく、五つの母音の中では最も中立的であると言える。

話が少しそれるが、中立的な母音を挿入する現象を他の言語に見てみよう。レナケル語(Lenakel)は、子音の連続をさけるために母音を挿入している。次の(2)と(3)は Kager(1999:126)から引用したものであるが、(3)は元は John D. Lynch の *Lenekel Phonology*(1974) からのものである。

(2) Epenthetic [i] appears after coronals

- |                  |                        |                        |
|------------------|------------------------|------------------------|
| a. /t-n-ak-ol/   | tɪ.na.gol              | 'you (sg.) will do it' |
| b. /ark-ark/     | ar.ga.rɪk <sup>h</sup> | 'to growl'             |
| c. /kam-n-man-n/ | kam.nɪ.ma.nɪn          | 'for her brother'      |
| d. /r-n-ol/      | rɪ.nol                 | 'he has done it'       |

(3) Epenthetic [ə] appears after non-coronals (from Lynch 1974)

- |                |            |                 |
|----------------|------------|-----------------|
| a. /to-rm-n/   | tɔr.mən    | 'to his gather' |
| b. /apn-apn/   | ab.na.bən  | 'free'          |
| c. /k-ar-pkom/ | kar.bə.gom | 'they're heavy' |

(2) は舌頂音（歯茎音など）の次には [i] を挿入し、(3) は非舌頂音（両唇音や軟口蓋音など）の次には [ə] を挿入するというものである。



[ɨ] は日本語の [ɯ] と同じ [+high], [+back], [-round] の素性を持ち、両音は非常に似ている。[ɨ] は中舌音であり、[ɯ] は少し後舌寄りである点だけが違っている。[ɨ] と [ə] は舌の高さが異なるのであるが、両音共舌の移動や唇の変化の最も少ない音である。この点、日本語では [ɯ] 挿入が最も自然に行なわれやすい現象と同じである。

外来語に挿入される母音には、「ウ」の他に「イ」と「オ」がある。なぜこれらの母音が選択されるのか見てみよう。

### 2.3.1 「イ」の挿入

「イ」は church /tʃɜrtʃ/ 「チャーチ」、judge /dʒʌdʒ/ 「ジャッジ」のように硬口蓋破擦音の /tʃ/, /dʒ/ の後に挿入される。「ウ」を挿入せずに「イ」を挿入するのは、/tʃ/, /dʒ/ と同じ調音点の硬口蓋母音の「イ」を挿入する方が、軟口蓋寄りの「ウ」よりも調音上自然なためである。それではなぜ bush /bʊʃ/ 「ブッシュ」、mirage /mərəʒ/ 「ミラージュ」が「ブッシ」、「ミラージュ」と発音されないのかが問題となる。筆者には「チャーチ」、「ジャッジ」と同様に、「ブッシ」、「ミラージュ」の発音の方が自然であるように思われるが、「ウ」を挿入する理由は次のようになろう。

英語の発音ではあるが、/tʃ/, /dʒ/ と /ʃ/, /ʒ/ は共に硬口蓋音で摩擦を伴うが、前者は非継続音であり、後者は継続音である。/tʃ/, /dʒ/ では前舌面が硬口蓋に接触するので、「ウ」よりも「イ」が発音しやすい。一方、/ʃ/, /ʒ/ の方は前舌面が硬口蓋に触れないので、調音しやすい中舌寄り母音の「ウ」に舌の位置が移動したと考えられる。日本語では「ジャッジ」の「ジ」も「ミラージュ」の「ジ」も共に破擦音であるが、「ジ」と「ジュ」の区別は英語の発音の違いによるものと考ええる。

「イ」の挿入規則は次のように書けるであろう。

(4) 「イ」挿入規則

$$\phi \rightarrow i / \left[ \begin{array}{l} +\text{palatal} \\ -\text{continuant} \\ +\text{strident} \end{array} \right] \text{ \_\_\_\_\_\_ }$$

第1章で述べた促音化規則を適用した後で「イ」を挿入する過程は次のようになる。

(5) catch → kyacch → kyacchi 「キャッチ」

match → macch → macchi 「マッチ」

college → karejj → karejji 「カレッジ」

village → birejj → birejji 「ビレッジ」

lodge → rojj → rojji 「ロッジ」

2.3.2 「オ」の挿入

「ウ」が最も挿入しやすい母音であるが、硬口蓋破擦音の次には調音点の同じ「イ」が挿入されることを述べた。次の問題は、なぜ hit, bed のように歯茎破裂音 /t, d/ の次に非高母音の「オ」が選択されるかである。理由は母音の付加によって /t, d/ の音質を変えないためであろう。hit に「ウ」や「イ」を加えると、hittsu, hicchi と発音され /t/ が /ts/, /tɕ/ に変化してしまう。英語の /t/ の発音を維持するため「オ」を選択したと思われる。「エ」や「ア」ではなく「オ」が選択されたのは、これらの音の中で「オ」が最も舌や唇の変化を伴わずに調音できるからである。(城生, 1998:67 参照)

挿入母音の選択としては「ウ」が第一候補であるため、/t/ に「ウ」を付加し、/tsu/ 「ツ」と発音する外来語も次のようにいくつかある。

(6) 「ツ」の発音

a. sport 「スポーツ」、shirt 「シャツ」、sheet 「シーツ」、

bucket「バケツ」、jacket「ジャケツ」、tree「ツリー」

b. twin「ツイン」、twist「ツイスト」、two「ツー」

(6a)のように「ツ」と発音する語は比較的古い時期に借用されたものである。bucket「バケツ」、jacket「ジャケツ」と発音する語も後にできたが、意味が異なっている。tree「ツリー」では /t/ が /r/ の前で「ツ」に発音されているが、これは例外的であり、trick「トリック」、triple「トリプル」、street「ストリート」のように「ト」に発音されるのが一般的である。(6b)の「ツ」の発音は、/tw/ が「ツ」と発音されたものである。/w/ と /u/ が共に〔後舌性、高性〕の素性を持つことから、/tw/ が「ツ」と発音される。twinに母音挿入があれば、twilight が「トワイライト」と発音されるように、「トウィン」と発音されるはずである。「オ」挿入規則は次のようになる。

(7) 「オ」挿入規則

$$\phi \rightarrow o / \left[ \begin{array}{l} +\text{alveolar} \\ +\text{plosive} \end{array} \right] \text{ ——— }$$

(8) rocket → rokett → roketto「ロケット」

trumpet → tranpett → toranpetto「トランペット」

try → torai「トライ」

pyramid → piramidd → piramiddo「ピラミッド」

dry → dorai「ドライ」

### 2.3.3 「ウ」の挿入

硬口蓋破擦音 /tʃ, dʒ/ と歯茎破裂音 /t, d/ 以外の子音の後には、一般的に「ウ」が挿入される。

(9) 「ウ」挿入

mix → miks → mikkusu「ミックス」  
picnic → piknikk → pikunikku「ピクニック」  
staff → sutaffu「スタッフ」  
socks → sokks → sokkusu「ソックス」  
cap → kyapp → kyappu「キャップ」  
ham → hamu「ハム」  
cocktail → kakuteru「カクテル」  
song → songu「ソング」  
taxi → takushii「タクシー」  
rib → ribu「リブ」

(9)の例では /k/ の次に /u/ が挿入されて「ク」に発音されているが、  
/k/ の次には /i/ が付加されて「キ」に発音される語がある。これは古  
い発音であるが、/k/ の前の母音が前舌母音 /i, e/ なので母音調和が  
起こっているであろう。

(10) 「キ」の発音

deck → dekk → dekki「デッキ」  
exite → ekisaito「エキサイト」  
text → tekisuto「テキスト」  
Texas → tekisasu「テキサス」  
mixer → mikisaa「ミキサー」  
ink → inki「インキ (インク)」  
next → nekisuto「ネクスト (ネクスト)」

英語の pen, hanger は「ペン」、「ハンガー」と発音され、/n/ の後ろ  
には母音が挿入されない。所が ham, teammate は「ハム」、「チームメイ  
ト」のように /m/ の後ろに /u/ が付加されて「ム」に発音される。/u/

が挿入されるのはどのような場合か見てみよう。

<n> に綴られる鼻子音の後には母音が付加されない。<n> は、英語では次の子音に同化して /n/, /m/, /ŋ/, /ŋ/ に発音されるのであるが、外来語のカナ文字は常に「ン」である。

(11) sun /sʌn/ → san 「サン」

penfriend /pɛmfrend/ → penfurendo 「ペンフレンド」

sunburn /sʌmbɜ:n/ → sanbaan 「サンバーン」

sunset /sʌnsɛt/ → sansetto 「サンセット」

Sunday /sʌndeɪ/ → sandee 「サンデー」

manpower /mæmpaʊər/ → manpawaa 「マンパワー」

English /ɪŋɡlɪʃ/ → ingurisshu 「イングリッシュ」

drink /drɪŋk/ → dorinku 「ドリンク」

king /kɪŋ/ → kingu 「キング」

song /sɔŋ/ → songu 「ソング」

king-size /kɪŋsaɪz/ → kingusaizu 「キングサイズ」

英語の /kɪŋ/, /sɔŋ/ が外来語への入力であれば、「キグ」、「ソグ」となることから、kingu 「キング」、songu 「ソング」は英語の抽象的な基底表示である /kɪŋɡ/, /sɔŋɡ/ に /u/ が加えられたとも考えられよう。しかし、そこまで入力を抽象的なレベルまで掘り下げるならば、英語のスペリングに /u/ が加えられたと見る方が理解しやすい。本著では、母音挿入は音声よりもスペリングのレベルでなされていると考える。

英語のスペリングが <n> ではなく <m> であるにもかかわらず、<m> の次に両唇音がある場合には、次のように尾子音の /m/ には /u/ が挿入されずに「ン」である。

(12) camp /kæmp/ → kyanpu 「キャンプ」

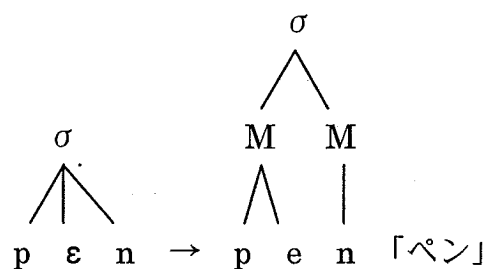
hamburger /hæmbɜ:rgər/ → hanbaagu 「ハンバーグ」

symbol /sɪmbəl/ → shinboru 「シンボル」

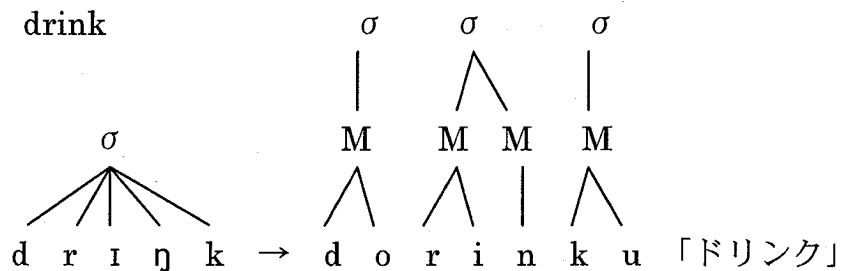
umpire /ʌmpaɪər/ → anpaia 「アンパイア」

(11)と(12)の外来語の鼻子音「ン」は、それ自体で一つのモーラを形成している。M はモーラを表す。

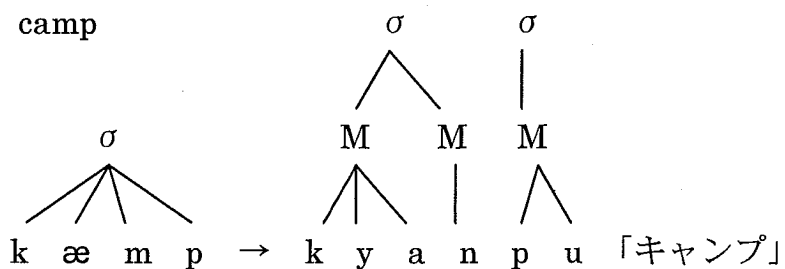
(13) a. pen



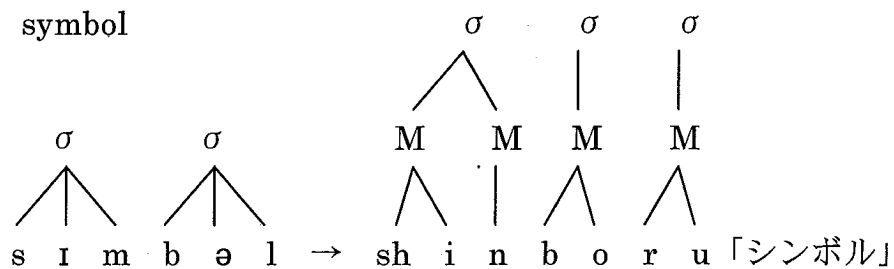
b. drink



c. camp



d. symbol

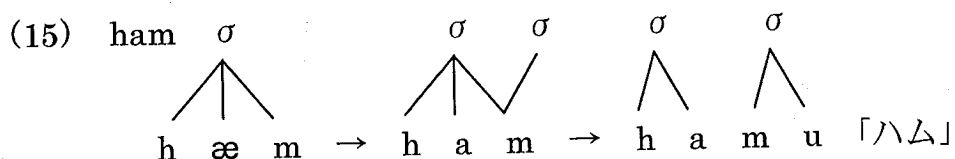


/m/ の後ろに子音があるにもかかわらず、次の(14b)のように /u/ の挿入される場合がある。/u/ の挿入される外来語を見てみよう。

- (14) a. cream /kri:m/ → kuriimu 「クリーム」  
 room /ru:m/ → rumu 「ルーム」  
 column /kɔləm/ → koramu 「コラム」  
 b. roommate /ru:mmert/ → ruumumeito 「ルームメイト」  
 columnist /kɔləmnɪst/ → koramunisuto 「コラムニスト」  
 teamwork /ti:mwɜrk/ → chiimuwaaku 「チームワーク」

(12)と(14b)の英語は、共に /m/ が音節の尾子音にある。両者の違いは、(12)の語は複数の音節であっても一つの形態素であるが、(14b)の語は二つの形態素から成り立っていることにある。従って (14a, b) のように語末あるいは形態素末の /m/ は外来語の撥音にはならない。一方、(11)と(12)の鼻子音を撥音と見なすのは、その基底表示が日本語のように /n/ であると考えられるからである。日本語では、/kempoo/「憲法」、/kambun/「漢文」の発音では /n/ が次の子音への同化によって /m/ になるが、外来語の camp, symbol の /m/ の発音も同様の現象と見なしているのである。ham や team のような語末の /m/ は、その基底の音素が /n/ であるとは考えられないので、/u/ を付加して別のモーラを形成することになる。

ham の /m/ は hamu 「ハム」では音節の頭子音になる。次の樹状図のように /m/ は促音にはならないので、前の音節から切り離される。



(15)の例から、母音挿入は子音挿入の後に適用されると言える。とい

うのは、頭子音があるから母音が必然的に挿入されるのであり、その逆はありえない。また、CVC を CVC・CV の音節にするのは外国語の音節形態を維持するものであり、母音を挿入した後の CVC・V に頭子音を付加するのは不自然である。母音を挿入した後の CVC・V は「ハム」のように CV・CV の音節になるべきである。

## 2.4 音声への対応

外来語の母音の発音は、英語の発音に準じるものとスペリングに準じるものとがある。まず英語の発音との関係を見てみよう。本稿で用いている英語の母音の発音記号は14である。それに対応する日本語の母音は五つである。英語の母音の発音に対する外来語の発音を図で示すと次のようになる。なお、英語の二重母音は前の音の調音位置に書いている。

(16) 母音の対応

	前舌	中舌	後舌
高	i: イー ɪ イ		u: ウー ʊ ウ
中	eɪ エー ɛ エ	ɜr/ər アー ʌ ア	oʊ/o: オー ɔɪ オイ ɔ オ
低	æ ア	aɪ アイ aʊ アウ	ɑ: アー ɑ ア

(16)の表により、前舌高母音は「イ」、前舌中母音は「エ」、後舌高母音は「ウ」、後舌中母音は「オ」であり、他の中母音と低母音は「ア」と発音される。(16)の表に示されている英語の発音と外来語の発音の関係は、次のようである。下線部はそれぞれの対応する発音を示している。



- (17) a. /i:/ 「イー」: key /ki:/ → キー、entry /entri:/ → エントリー  
 b. /ɪ/ 「イ」: picnic /pɪknɪk/ → ピクニック、  
 liquid /lɪkwɪd/ → リキッド  
 c. /eɪ/ 「エー」: date /deɪt/ → デート、  
 May Day /meɪ deɪ/ → メーデー  
 d. /ɛ/ 「エ」: net /nɛt/ → ネット、pen /pɛn/ → ペン  
 e. /u:/ 「ウー」: room /ru:m/ → ルーム、  
 cool /ku:l/ → クール  
 f. /ʊ/ 「ウ」: book /bʊk/ → ブック、look /lʊk/ → ルック  
 g. /oʊ/ 「オー」: echo /ɛkoʊ/ → エコー、  
 boat /boʊt/ → ボート  
 h. /ɔɪ/ 「オイ」: oil /ɔɪl/ → オイル、troy /trɔɪ/ → トロイ  
 i. /ɔ:/ 「オー」: water /wɔ:tər/ → ウォーター、  
 automatic /ɔ:təmætɪk/ → オートマチック  
 j. /æ/ 「ア」: ham /hæm/ → ハム、  
 sandbag /sændbæg/ → サンドバッグ  
 k. /ɜr/ 「アー」: bird /bɜrd/ → バード、  
 curtain /kɜrtən/ → カーテン  
 l. /ər/ 「アー」: hour /aʊər/ → アワー、  
 doctor /dɒktər/ → ドクター  
 m. /ʌ/ 「ア」: number /nʌmbər/ → ナンバー、  
 Sunday /sʌndəɪ/ → サンデー  
 n. /aɪ/ 「アイ」: ice /aɪs/ → アイス、smile /smaɪl/ → スマイル  
 o. /aʊ/ 「アウ」: powder /paʊdər/ → パウダー、  
 house /haʊs/ → ハウス  
 p. /ɑ:/ 「アー」: half /hɑ:f/ → ハーフ、  
 scarf /skɑ:(r)f/ → スカーフ

英語の発音に自由変異があるために、外来語の発音が英語の発音によってではなく、スペリングによって決められると思われるものがある。次の <e> と <o> の発音を見てみよう。

(18) <e> と <o> の発音

- a. <e> 「エ」: economy /ɪkənəmi:/, /ɛkənəmi:/ → エコノミー  
enjoy /ɪndʒɔɪ/, /ɛndʒɔɪ/ → エンジョイ
- b. <o> 「オ」: cockney /kəkni:/, /kɔkni:/ → コックニー  
spot /spɒt/, /spɔt/ → スポット
- c. <o> /ʌ/ 「オ」: onion /ʌnjən/ → オニオン  
sponge /spʌndʒ/ → スポンジ
- d. <o> /ɑ/ 「ア」: cocktail /kɑkteɪl/ → カクテル

(18a)は <e> が /ɪ/ と /ɛ/ の自由変異をなしているが「エ」と発音され、(18b)は <o> が /ɑ/ と /ɔ/ の自由変異をなしているが「オ」と発音されている。これは一見スペリング発音によるとと思われる。確かに <e> と <o> はローマ字読みでは「エ」と「オ」に対応するが、本論文は、英語の発音との対応を第1に考える。それで説明の付かない外来語の発音に関しては、次のステップとしてスペリングとの対応を考えることにする。(18a)の外来語が「エ」と発音されるのは、英語の /ɛ/ に対応しているのであり、同じように(18b)の外来語の「オ」は、英語の /ɔ/ に対応しているのである。他の自由変異の発音は、外来語の対象になっていないと考える。cup /kʌp/ 「カップ」、young /jʌŋ/ 「ヤング」では /ʌ/ が「ア」と発音されるが、(18c)の語では /ʌ/ がスペリング読みの「オ」に発音されている。これはスペリングに対応した発音である。一方では、(18d)の「カクテル」のように、英語の発音 /ɑ/ に対応した発音になっているものもある。このように <o> は必ずしも「オ」に対応しないことから、基本的には英語のスペリングではなく発音によって外来語の発音が決められていると言える。

英語の音韻体系には flower /flaʊər/, player /pleɪər/ のように母音が三つ連続する語がある。一方、日本語は基本的には CV 言語であるため、flower 「フラワー」、hour /aʊər/ 「アワー」のように /ʊər/ を「ワー」と発音し、player 「プレーヤー」、dryer /draɪər/ 「ドライヤー」のようにスペリングに <y> がある語は「ヤー」と発音している。/ʊ/ を /w/ に替えることと、スペリング <y> を /j/ と発音することで母音の連続を避けている。player /pleɪər/ を「プレーヤー」と発音するのは /j/ 挿入のように思われるが、次の(21)の例のように、英語のスペリングに <y> のない語は「イア」と発音されている。

外来語で母音が二つ連続するのは許されることから、次の母音 <ia> の連続する英語は、外来語でも「イア」と発音され、「イヤ」とは発音されない。

(19) <ia> 「イア」

Arabia 「アラビア」、nostalgia 「ノスタルジア」、mania 「マニア」、  
ammonia 「アンモニア」、Asia 「アジア」

/ər/ を「アー」と発音する場合と「ア」と発音する場合があるが、これも母音の連続に関連がある。次の(20)は英語の /ər/ を「アー」と長母音に発音する語であるが、(21)は /ər/ を「ア」と短母音に発音する語である。両者の違いは /ər/ の前に子音があるか母音があるかによる。

(20) /Cər/ 「C アー」

announcer 「アナウンサー」、illustrator 「イラストレーター」、  
escalator 「エスカレーター」、calendar 「カレンダー」、character  
「キャラクター」、goalkeeper 「ゴールキーパー」、synthesizer 「シ  
ンセサイザー」、popular 「ポピュラー」、manager 「マネジャー」、  
regular 「レギュラー」

(21) /Vər/ 「V ア」

amateur /æmətʃuər/ → アマチュア

barrier free /bəriə̃r fri:/ → バリア フリー

career /kəriə̃r/ → キャリア

engineer /ɛndʒəniə̃r/ → エンジニア

interior /Intiəriə̃r/ → インテリア

junior /dʒu:niə̃r/ → ジュニア

umpire /ʌmpaɪə̃r/ → アンパイア

fire /faɪə̃r/ → ファイア

sapphire /sæfaɪə̃r/ → サファイア

(21)の career 「キャリア」は短母音「ア」に発音されるが、同じような発音の carrier /kəriə̃r/ は「キャリアー」と長母音「アー」に発音される。これは carrier が carry 「運ぶ」と -er 「人」の二つの形態素から成り立っており、「キャッチャー」、「オフィサー」、「スキヤー」のように、「アー」が「人」の意味を表しているためである。ちなみに「スキヤー」は「スキアー」では母音が続くため、/j/ を挿入して「ヤー」と発音したものである。これは「プレーヤー」、「バイヤー」、「デストロイヤー」などへの類推である。<yer> への類推がなければ、skier /ski: ər/ は「スキーア」と発音されるはずである。

(21)の「アンパイア」、「ファイア」、「サファイア」は「アイア」と三つの母音が連続している。この母音連続を避けるため、次のように子音を挿入する語もある。

(22) /ɪər/

a. 「イヤ」: tire /taɪə̃r/ → (タイヤ) → タイヤ

wire /waɪə̃r/ → (ワイア) → ワイヤ

diamond /daɪəmə̃nd/ → (ダイヤモンド) → ダイヤ  
モンド

b. 「イヤー」: hired /haɪərd/ car → ハイヤー

(22)の例では「アイア」の「イ」の次にわたり音の /j/ が挿入されている。外来語ではその例が少なく例外的であるが、/j/ 挿入は言語の一般的な現象である。我々も何気なく career, fire, junior を「キャリア」、「ファイヤ」、「ジュニヤ」と発音してしまうことがあるであろう。

## 2.5 スペリングへの対応

外来語の発音には、英語の音声には対応せずにスペリングに対応するものが多い。その最も顕著なものが強勢のないあいまい母音 /ə/ に対する母音である。(16)の表にあるように /ər/ は「アー」に発音されるが、それは /ə/ が /r/ の前にある場合であり、他の場合にはスペリングによって決められる。次の下線部はスペリングと外来語の発音との関係を示している。

### (23) あいまい母音の発音

a. <i> 「イ」: animal /ænəmə/ → アニマル

alibi /æləbaɪ/ → アリバイ

b. <e> 「エ」: toilet /tɔɪlət/ → トイレット

siren /saɪrən/ → サイレン

c. <u> 「ウ」: hurray /həreɪ/ → フレー

uranium /juərəɪniəm/ → ウラニウム

d. <u> 「ア」: support /səpɔ:(r)t/ → サポート

focus /foukəs/ → フォーカス

e. <o> 「オ」: hammock /hæmək/ → ハンモック

police /pəli:s/ → ポリス

f. <a> 「ア」: drama /drəmə/ → ドラマ

alarm /ələ:(r)m/ → アラーム

(23c)の <u> が「ウ」に発音されるのは、ローマ字発音を考えれば当然のことである。しかし、(23d)の <u> は同じくあいまい母音に発音されながら「ア」に発音されている。これは *supper* /sʌpər/ 「サパー」、*custom* /kʌstəm/ 「カスタム」のような語では <u> が「ア」と発音されるので、*support*, *focus* の <u> もそれと同じ発音とみなしているからである。確かに /ʌ/ と /ə/ は調音が似ており、日本語話者には区別し難い。

外来語の発音が英語の発音に準じているのか、スペリングに準じているのかを述べてきたが、どちらにも対応する語も多くある。例えば *coin* /kɔɪn/ 「コイン」、*mat* /mæt/ 「マット」、*pick* /pɪk/ 「ピック」の外来語の発音は、スペリングと音声の両方に対応している。本論文では英語の音声への対応を第一に考察し、(16)の表からはずれる外来語の発音に関しては、スペリングあるいはその他の要因を考えることにする。

外来語の発音が、英語のスペリングに対応する他の例を見てみよう。英語は、<VCe> のスペリングでは母音が二重母音に発音される。例えば、*stove* /stouv/, *cake* /keɪk/ の /ou/, /eɪ/ の発音は、語のスペリングから予測できるものである。外来語では(16)の表にならって「ストーブ」、「ケーキ」のように長母音に発音されている。所が、<VCe> が英語では短母音であるにもかかわらず、外来語で長母音になるものがある。

#### (24) <VCe> → 「∇C」

- a. <oCe> 「オーC」: *oven* /ʌvən/ → 「オーブン」、  
*glove* /glʌv/ → 「グローブ」
- b. <aCe> 「エーC」: *image* /ɪmɪdʒ/ → 「イメージ」、  
*sausage* /sɔ:sɪdʒ/ → 「ソーセージ」

(24)の外来語の発音は、英語の二重母音発音規則を外来語に適用したものである。

<age> が「エージ」と長母音に発音されるのとは反対に、<ange> は「エンジ」と短母音に発音される。これは /eɪ/ の次に子音群 /ndʒ/ が続くためであり、二つ以上の子音の前は短母音であるという言語の一般性を反映したものである。

(25) <ange> 「エンジ」

- a. arrange /əreɪndʒ/ → アレンジ
- change /tʃeɪndʒ/ → チェンジ
- ranger /reɪndʒər/ → レンジャー
- b. orange /ɔrɪndʒ/ → オレンジ

(25b)の orange は、英語の発音は /ɪndʒ/ と短母音であるが、(25a)と同じく「エンジ」と発音されている。英語の発音はどうであれ <ange> は「エンジ」と発音される。

英語のスペリングは同じでありながら、アクセントがない母音を短母音にする場合がある。英語の <ai> は máil, táilor のように強勢がある場合は /eɪ/ と二重母音に発音され、cúrtain, móuntain のように強勢のない場合は /ə/ に発音される。<ai> の発音は次のようになる。

(26) <ai> の発音

- a. /eɪ/ 「エー」: máil /meɪl/ → メール
- táilor /teɪlər/ → テーラー
- b. /ə/ 「エ」: cúrtain /kɜrtən/ → カーテン
- móuntain /maʊntən/ → マウンテン
- c. /eɪ/ 「エ」: cócktail /kɒkteɪl/ → カクテル
- d. /eɪ/ 「エイ」: èntertáiner /entərteɪnər/ → エンターテイナー

(26b)の外来語の発音は、長母音「エー」の短縮形である。英語では /eɪ/ と /ə/ は全く異質の母音であるが、外来語では共に「エ」であり、長母

音か短母音かはアクセントがあるかどうかによって決められる。この場合のアクセントを外来語のアクセントとする。そのように考えると、(26c)の cocktail が /ei/ に発音されているにもかかわらず、「カクテル」と「カ」にアクセントがあるので、「カクテール」と発音されないのが説明つく。しかし、アクセントのない母音が短母音になるのは英語の規則である。外来語には元の言語の規則が入り込んで影響を及ぼすことがある。

## 2.6 外来語のアクセント

外来語のアクセントが、英語のアクセントの位置と同じになる場合が多い。これは偶然ではなく、英語の強勢規則が外来語のアクセント規則に反映されているからである。例えば、長母音、二重母音に強勢が付与される、後ろから2番目の音節が軽音節であれば、その前の音節にアクセントが付く、英語の接尾辞の付加した語のアクセントが、そのまま外来語のアクセントになる、などである。一方、日本語のアクセント規則が外来語に反映されるものもある。例えば、複合語のアクセント付与、無声母音のアクセント移動などである。

### 2.6.1 長母音と二重母音

外来語のアクセント核は、基本的には後ろから2番目の音節が二重母音や長母音の重音節であればそこに付与され、語末から2番目の音節が短母音の軽音節であればその前の音節に付与される。これは、語末の音節を韻律外とし、それから前2番目のモーラにアクセント核が付与されるというものである。語末の音節が韻律外だということは、語末の音節をアクセント付与の際に無視するということである。つまり、語末の音節が重音節、軽音節かに関係なく、語末から2番目の重音節と語末から3番目の軽音節にアクセント核が付与されることになる。

ここでアクセント核がモーラに付与されるという場合と、音節に付与



される場合の違いについて説明する必要がある。アクセント核が語に付与されるのは音節にである。しかし、標準日本語の実際の発音では、重音節のアクセントは前のモーラは高ピッチ、後ろのモーラは低ピッチの高低パターンになる。つまり、基底のレベルではアクセント核は音節に付与されるが、実際の発音ではモーラに付与されることになる。日本の多くの方言では、アクセント核を音節に付与すると同時に、発音上でも音節を一つの単位として高ピッチに発音している。まず、語末から2番目の音節が、長母音と二重母音の例をみてみよう。

次のカタカナの上の横線 ― は高いピッチを表し、<sup>..</sup> はその次の音が低いピッチで発音されることを表している。更に、アクセント核の付与される音節は、太い文字で表している。[#] は語境界を表す記号である。アクセントのデータは、『アクセント辞典』からのものである。次の(27)の語は、後ろから2番目の音節が長母音であるため、太字の音節にアクセント核が付与されるのであるが、実際に高ピッチに発音されるのは前の母音である。

(27) **V**-音節#

イコール、イルミネーション、インフォメーション、  
 ウラニューム、エスカレーター、オペレーター、コーディネーター、  
コンクリート、ダメージ、マッシュルーム、パスポート、  
パラシュート

次の(28)の語は、後ろから2番目の音節が二重母音である。(27)の長母音同様、前のモーラに高ピッチのアクセントが移動している。

(28) **VV**-音節#

オールマイティー、シンセサイザー、スカウト、スポットライト、  
タイプライター、ダイナマイト、ハイライト、パラダイス  
 (パラダイスもあり)、ハワイアン

(28)の「<sup>1</sup>パラダイス」の発音は、英語のアクセントに従ったものであるう。

本論文でのアクセント規則は、語末からの音節数を見てアクセント核を付与するものであるが、語末からのモーラを数えて、アクセント核を付与するやり方もある。窪蘭(1995: 20)は、外来語のアクセント規則について、「語末から三つ目のモーラを含む音節にアクセント核を付与する」と述べている。窪蘭のアクセント規則は、いちいち音節構造を説明する必要のない非常に簡潔なものである。それに対して本著は、外来語の音節構造とアクセントの関係を、英語の音節構造と強勢規則との関係と照らし合わせて考えようとするために、音節構造を記述している。英語の強勢規則も語末からのモーラ数によって決めるのであれば、軽音節や重音節の記述は不必要になるが、英語のアクセント付与には重音節が大いに係わっていることから、外来語のアクセント付与も同様に扱うことにする。一方、本著では窪蘭のアクセント規則が適用されることにも言及していく。(27), (28)のように語末から2番目の音節にアクセント核の付与される語は、語末から三つ目、あるいは四つ目のモーラが高ピッチで発音されるのであるから、窪蘭の規則が適用されていることになる。

語末から2番目の音節が軽音節の場合には、その前の音節、つまり後ろから3番目の音節にアクセント核が付く。次の(29)の例にもみられるように、アクセント核の付与された音節が二つのモーラから成り立つ重音節であれば、前のモーラのみ高いピッチで発音される。「アクセント」という用語は、音節に付与される抽象的なアクセント核であり、実際に発音される「ピッチ」と区別して用いられているべきであろうが、特に言及する必要のない場合は、総称的に「アクセント」の用語を用いることにする。次の太字の「音節」は、アクセント核が付与されている音節を意味する。(29a)は後ろの3音節がすべて軽音節であるため、後ろから3番目のモーラにアクセントが付き、(29b)は語末の音節が撥音の「ン」を含む重音節であるために、後ろから4番目のモーラにアクセントが付

き、(29c)は語末の音節と後ろから3番目の音節が重音節であるために、後ろから5番目のモーラにアクセントが付いている。

(29) 音節-軽音節-音節#

- a. エン<sup>1</sup>ジニア、ジャーナ<sup>1</sup>リスト、ポイン<sup>1</sup>セチア、ホ<sup>1</sup>テル、ミ<sup>1</sup>ルク
- b. ア<sup>1</sup>ダプター、イレ<sup>1</sup>ギュラー、イン<sup>1</sup>デックス、ウエ<sup>1</sup>スタン、  
オーソ<sup>1</sup>ドックス、オリエン<sup>1</sup>タル、カ<sup>1</sup>ップル、キャ<sup>1</sup>プテン、  
キャ<sup>1</sup>ラクター、キャ<sup>1</sup>ラバン、クライ<sup>1</sup>マックス、コメ<sup>1</sup>ディアン、  
ス<sup>1</sup>リラー、トライ<sup>1</sup>アングル、ヒュー<sup>1</sup>マニティー、ヘリ<sup>1</sup>コプター、  
ホ<sup>1</sup>リデー、ボ<sup>1</sup>ランティア、マ<sup>1</sup>ガジン
- c. イン<sup>1</sup>タビュー、イン<sup>1</sup>ディアン、エン<sup>1</sup>ドレス、シン<sup>1</sup>フォニー、  
ダン<sup>1</sup>バリン

(29b)の「ウエスタン」、「キャプテン」や(29c)の「インタビュー」、「インディアン」などのアクセントは、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセント核を付与しても派生されない。これらの語は英語の強勢と同じ位置に高いピッチが来ているので、英語のアクセントをそのまま付与しているとも考えられるであろう。しかし、本著では英語のアクセントに従ったと考える前に、外来語のアクセント規則の適用を優先的に考えることにする。にもかかわらず、アクセント規則が適用されない外来語も多くある。それらの語は英語のアクセントと同じモーラに高ピッチがあることから、英語のアクセントが影響していると考えことにする。

英語の子音連続語が日本語に借用される際には、日本語の音節体系に合わせて母音を挿入するのであるが、その挿入された母音がアクセント核の付与される位置にありながら、アクセントの付かない場合がある。

3モーラ語を見てみよう。tree /tri:/ は /tr/ の子音連続があるので「ツ<sup>1</sup>リー」とは発音されずに、「ツ<sup>1</sup>リー」と長母音にアクセント核が付与されている。一方、merry /meri:/ は、2音節語であるので、語末から2番目の音節にアクセント核が付与され「メ<sup>1</sup>リー」と発音される。こ

のように外来語では「ツリー」も「メリー」も共に2音節、3モーラ語であるが、英語が1音節である語では、語末の長母音、二重母音にアクセント核が付与されている。次の(30a)は語末の長母音、二重母音にアクセントがあり、(30b)は語末から3モーラ目にアクセントがあるという一般的なアクセント付与規則によるものである。

### (30) 3モーラ語のアクセント(1)

#### a. 挿入母音の低ピッチ

クルー 'crew' /kru:/、スキー 'ski' /ski:/、  
 スター 'star' /star/、スロー 'slow' /slou/、トライ 'try' /traɪ/、  
 ドライ 'dry' /draɪ/、フリー 'free' /fri:/、プレー 'play' /pleɪ/、  
 グレー 'gray' /greɪ/、フロア 'floor' /flɔə/

#### b. 2音節語のアクセント

エコー 'echo' /ekou/、カラー 'collar' /kælə/、'color' /kʌlə/、  
 ギター 'guitar' /ɡɪtə/、フェリー 'ferry' /feri:/

(30a)のアクセントは、長母音、二重母音にアクセント核が付与される3モーラ語であり、語末の音節が軽音節、あるいは撥音である語にはアクセント核が付与されない。このことは、長母音、二重母音の重音節にアクセント核が最も付与されやすいことを示している。次の(31)も、英語の /CCVC/ の1音節語が外来語では3モーラ語に発音されるものである。(31a)は後ろから3モーラ目にアクセントがある語であり、(31b)は前の音節と後ろの音節の両方にアクセント核の付与されている語である。

### (31) 3モーラ語のアクセント(2)

#### a. 挿入母音の高ピッチ

クラス 'class'、グラス 'glass'、グラフ 'graph'、クラブ 'club'、  
 グラブ 'glove'、スラム 'slum'、スリム 'slim'、スリル 'thrill'、  
 ドラマ 'drama'、ドリル 'drill'、ドラム 'drum'、プラム 'plum'、

プラン ‘plan’

b. グリル、グリル grill’、プリン、プリン ‘pudding’

一般的とは言えないが、(31b)のように「グリル」、「プリン」の発音があるということは、子音間に母音を挿入した語頭の音節にアクセントが付与され難いということを意味している。その顕著な例として、「トリル」‘trill’ がある。

## 2.6.2 撥音

撥音を尾子音に持つ VN（母音＋鼻音）の音節は、二つのモーラから成り立っている重音節である。撥音の音節が、アクセント付与に関して、長母音や二重母音と同じ重みを持っているのかを、後ろから2番目の音節に来る場合と、語末に来る場合で見てみよう。

撥音の音節にアクセント核が付与されるのは、次のように語末の音節が重音節の場合である。これは、後ろから3番目のモーラを含む音節にアクセント核が付与されるという外来語の一般的な規則が適用されているのである。実際の発音では、撥音の前の母音が高ピッチに発音される。

### (32) VN-重音節#

アナウンサー、オープンカー、カレンダー、スポンサー、  
バトミントン、ヘルスセンター

(32)のアクセント付与は、一見、撥音の音節が、長母音や二重母音の音節と同じ重みを持っているように思われる。しかし、VN 音節の次に軽音節が来る場合には、次の(33)のようにアクセント核は VN の前の音節、つまり後ろから4番目のモーラに付与される。(27)と(28)では、長母音や二重母音の音節には、語末の音節に関係なくアクセント核が付与されているが、VN 音節にはアクセント核が付与されていない。VN

音節は長母音や二重母音の音節ほどアクセントを引きつける力がないと言える。(33a)は後ろから4番目のモーラに高ピッチがあり、(33b)はVN音節の前が重音節であるがために、後ろから5番目のモーラに高ピッチがある。

(33) 音節-VN-軽音節#

a. セカンド、パテント、プレゼント、マーケティング

b. クッキング、ダンピング、ペパーミント、ペンダント

(29c)や(33c)のように、高ピッチのが後ろから5番目にある語は、英語の強勢の位置と同じである。英語、外来語共、重音節にアクセントが付与されているものである。

(33)の語では、VN音節が軽音節のようにみなされ、アクセント核が付与されていない。しかし、VN音節の中には、長母音や二重母音と同じく、アクセント核の付与される重音節とみなされるものもある。

(34) VN-軽音節#

インスタント (インスタントもあり)、ガスレンジ、ジレンマ、  
ダイヤモンド、トーナメント (トーナメントもあり)、  
パーマメント、プロパガンダ、ブロンズ (ブロンズもあり)、  
マリンバ

軽音節よりも重音節にアクセント核が付与されるのはモーラ数が多いからであるが、三つのモーラから成る音節がある。撥音を含む長母音、二重母音の音節の超重音節 /VVN/ である。超重音節には、語のどの位置にあってもアクセント核が付与される。これまで見てきた例では、語末の音節にアクセントが付く語はなかったが、超重音節は語末の音節であってもアクセントが付与される。次のように、高ピッチになるのは音

節の最初の母音のみである。

(35)  $\nabla N / VVN \#$

スペイン、ハリケーン、ブレイン、リターン

超重音節であるから、語末の音節であってもアクセント核が付与されると述べた。しかし、例は少ないが、「エンジョイ」、「マシン」、「パタン」、「ワンパタン」など、語末の重音節にアクセントの付与されるものもある。「エンジョイ」と「マシン」は英語の /endʒɔɪ/, /məʃɪn/ とアクセントの位置が同じであるが、「パタン」は英語では /pætən/ であり、アクセントの位置が異なっている。「パタン」と「タ」が高ピッチに発音されるのは、「パターン」という超重音節の発音もあるからである。

(34), (35)の高ピッチの位置は後ろから三つ目のモーラであるが、次の拗音と撥音を含む重音節を語末に取る語も、語末から三つ目のモーラが高く発音され、窪蘭のアクセント規則が適用されている。拗音とは、子音+半母音 /j/ の次に /a/, /u/, /o/ の母音が伴って形成される音節である。次の (C) は随意的に促音や撥音があることを意味している。

(36)  $V(C) \cdot CjVN \#$

アドミッション、エクステンション、テクニシャン、  
ミュージシャン、パーカッション

筆者は、拗音の前の音節にアクセント核が付与されるのを次のように考える。拗音の kya, kyu, kyo は、その基底形が kia, kiu, kio であり、2音節の単音節化したものとする。仮に「ム・キ・アン」という3音節の外来語があったとしよう。後ろから2音節の「キ」が軽音節なので、「ム」にアクセントが付き、「ムキアン」と発音されるであろう。「キア」が拗音に発音されて「ムキャン」になってもアクセントの位置は変わらない。このように考えると、英語のアクセントと関連づけることができる。次

の英語の強勢の位置は、後ろから 2 番目の音節にあり、(36)と同じである。

- (37) *expression* /ɪksprɛʃən/, *musician* /mjuːzɪʃən/,  
*petition* /pəˈtɪʃən/, *question* /kwɛstʃən/, *religion* /rɪlɪdʒən/

英語の名詞の強勢規則は、語末から 2 番目の音節が軽音節であれば、その前の音節、つまり語末から 3 番目の音節に強勢が付くはずであるが、(37)の英語は語末から 2 番目の音節に強勢が付いている。しかし、その綴り字を見ると、*prés-si-on*、*musí-ci-an*、*petí-ti-on* と語末から 3 番目の母音に強勢が付いている。英語の /Ci/ が口蓋子音 [j, tʃ, dʒ] になる現象は、日本語の拗音と同じである。

### 2.6.3 促音

撥音を尾子音とする音節は、モーラ数によって軽音節とも重音節とも扱われることを見てきたが、同じように尾子音である促音の音節はどうであろうか。促音を尾子音とする音節を VQ で表わすことにする。Q は geminate (重複子音) の頭文字を取ったものである。VQ 音節は、次のように長母音、二重母音と同じような重音節とみなされ、アクセント核が付与されている。

#### (38) VQ-音節#

アタッカー、ウオッチ、オートマチック、オミット、  
ガイドブック、カッター、クラッカー、コルネット、  
サーモスタット、シュレッダー、シルクハット、ステップ、  
スナック、スピリッット、ハンディキャップ、ヒステリック、  
ピラミッド、ボイコッット、ポケッット、マスコッット

(38)の語は、結果的には窪蘭のアクセント規則と同じく、語末から三つ



目のモーラを含む音節にアクセント核が付与されているが、重音節にアクセント核が付与され、促音の前のモーラが高ピッチに発音されるという解釈は両者で異なっている。

重音節の中でも、アクセントを引き付ける度合いに差があるようである。長母音・二重母音に最もアクセント核が付与されやすく、次に促音、撥音の順序と思われる。促音の音節よりは長母音の音節にアクセント核が付きやすいということは、V音節と VQ 音節が並んだ場合、次の例にみられるように、促音音節のアクセント核がその前の長母音に移動していることから分る。

(39) V-VQ

カーペット、サーキット、チューリップ (チューリップもあり)、  
フォーマット、マーケット (マーケットもあり)、ミュージック

tulip には(39)にあるように二通りのアクセントがあるが、makeup は「メーキャップ」の発音のみである。これは例外的である。make と up の複合語として捉え、後項要素の音節にアクセント核を付与しているのかもしれない。複合語のアクセントについては後で触れる。percussion は「パーカッション」と発音され、「パーカッション」とは発音されない。これは拗音の「ション」が続いているからであるが、何よりも英語の強勢の位置を前の音節へずらしてしまうため、長母音へのアクセント移動は行なわれない。(39)の語は後ろから四つ目のモーラにアクセント核が付与され、その音節が重音節なので前のモーラ、つまり語末から五つ目のモーラが高ピッチに発音されている。

#### 2.6.4 母音の無声化とアクセント

日本語のアクセントのない「イ」と「ウ」は、一般的に無声子音間では無声音に発音される。例えば「きつつき」は /kitsutswuki/ と発音され、「地下室」は /tɕikáɕitsuw/ と発音される。高母音 /i/ と /u/ が無声

母音である。更にまた、「三菱」は /mitsubici/ と発音されるが、「三越」が /mitsukóji/ と高ピッチの位置が右の母音にずれるのは、無声母音を高ピッチで発音しても良く響かないためである。

日本語の高母音 /i, u/ が無声子音間で無声化するように、外来語も同様に無声化する。外来語の無声母音を見るまえに、日本語の無声母音化を見てみよう。無声化には一定の法則があるが、方言や個人によって差があるのが実情である。その意味では真面目に取り上げる研究課題ではないかもしれないが、一つの言語現象を知るうえでは、十分価値のある問題であると思う。

母音の無声化には次の3つの条件が考えられる。

#### (40) 無声化の条件

- a. 無声化する母音は高母音 /i, u/ であり、無声子音の間に位置する。
- b. 2音節連続して無声化が行なわれることはない。
- c. アクセント核が付与される母音は無声化しない。

(40a)の条件は声帯振動のない子音の間に声帯の振動のある母音が置かれる場合に、声帯の振動がなされないという無声同化現象である。問題はなぜ高母音が無声化されやすいかである。/i/と/u/は舌と口蓋面が接近し、空気が狭い声道を通して発音される狭母音である。母音の中では最も共鳴性が低いので、共鳴性の非常に低い障害子音の間に置かれたときに、無声同化されやすいためであろう。一方、低あるいは広母音の /a/ は、最も大きく口を開く母音であり、共鳴性が最も高く、無声化が起り難い。

(40a)の条件によって無声化する母音を見てみよう。次のデータは『アクセント辞典』からのものであり、○内の文字は母音の無声化したモーラを表わす。閉鎖音は破裂音と破擦音であり、[+]は二つの音素結合を表わし、[-]は音節境界である。

(41) 閉鎖音＋高母音-閉鎖音

アカ㊦キ「曉」、ア㊦カン「熱かん」、オカッ㊦キ「おかつ引き」、  
㊦キコミ「聞き込み」、ソーサ㊦カ「作家」

(42) 閉鎖音＋高母音-摩擦音

アイド㊦シャ「愛読者」、ア㊦サメ「秋雨」、ア㊦サイ「悪妻」、  
㊦ソチシキ「基礎知識」、㊦ハク「気迫」、㊦ヒン「気品」、  
ショーソ㊦フメイ「消息不明」、ショ㊦セイカツ「食生活」、  
㊦フー「工夫」、オー㊦サ「大きさ」

(43) 摩擦音＋高母音-閉鎖音

ア㊦カケ「足かけ」、カ㊦ツ「加筆」、㊦チイレ「質入れ」、シ㊦ク「私  
服」、シンシ㊦ク「紳士服」、㊦ユクハイ「祝杯」、ヒ㊦カ「皮膚科」、  
㊦タイ「額」

(44) 摩擦音＋高母音-摩擦音

ア㊦サキ「足先」、オ㊦ソワケ「おすそ分け」、  
ショー㊦スイジュン「消費水準」、ショーヒブツカ㊦スー「消費物  
値指数」、タダ㊦サ「正しさ」、タヤ㊦サ「たやすさ」、㊦サイチ「被  
災地」、㊦シガタ「ひし形」、㊦ショチ「避暑地」

『アクセント辞典』には指摘されていないが、無声子音＋高母音のモーラが語末に来る場合には、一般的に無声化が起る。これは語末の位置で声帯の振動が終わるので、高母音の後に無声子音があるのと同じ現象だからである。次の(45a)の語末母音に無声化が起っているにもかかわらず、(45b)の語末音が無声音にならないのは、その前の母音が無声化しているからである。このように通常、無声音節の連続は起らない。(45c)の語末高母音が無声音にならないのは、高ピッチだからである。(41)～(44)にはピッチが高いのに無声化している語もあるが、語末では無声化しない。語末音は後に音声が続かないので無声子音の前にあるようなものと言っても、存在する無声子音ほどの影響を与えていないことになる。次の[...]は無声化が起らなかった母音を表わす。

(45) 語末母音の無声化

- a. ハ㊦「箸」、ハコビダ㊦「運び出す」、ヒバ㊦「火鉢」  
b. ㊦ソチ㊦キ「基礎知識」、ミ㊦キ「見聞き」、㊦カ㊦ツ「地下室」  
c. ア㊦サキ「足先」、カカシ「かかし」、㊦シカツ「串かつ」、  
ダイガク「大学」

オヤ㊦キ「お屋敷」やト㊦テン「特典」では「ク」と「シ」が高ピッチであるにもかかわらず無声音になるが、(45c)の語末の高母音は無声化していない。(45a)の語末母音の無声化は、声帯振動が後続していないからだと述べたが、無声子音の間の母音の無声化の方が、語末よりも強いことになる。語末の高ピッチの母音は、無声子音間にないので、本来の有声音に発音される。これは高ピッチ音では共鳴性が高くなるためである。

(41)～(44)は無声子音間の高母音が無声化するものであるが、次の(46)と(47)のように無声化しない語も多い。『アクセント辞典』(p. 8)によると、(47)の「ダシシブル」のように2種類のアクセントを示している語は、標準アクセントとして、よりふさわしいものを先にしている。また、「スシ」のようなかつこ内のアクセントは、二義的なものとして認められているものである。

(46) 摩擦音+高母音- /h/

- シハイニン「支配人」、シヒョー「指標」、シフー「土風」、シヘイ「紙幣」、シホン「資本」、シュハンカク「主犯格」、ヒハン「批判」、ヒヒョー「批評」、ヒフエン「皮膚炎」、ヒホー「秘法」、フハイ「腐敗」、フハツ「不発」、フヒョー「不評」、フホンイ「不本意」

(47) 摩擦音+高母音-摩擦音

- a. シシマイ「獅子舞」、スス「煤」、ススム「進む」、ダシシブル、ダシシブル「出し洩る」  
b. シサツ「視察」、シサン「資産」、シシュンキ「思春期」、シスー「指数」、シセイ「姿勢」、シソーカイ「思想界」、

スサム「すさむ」、スシ、(スシ)「鮓」、スシマイ「すし米」、  
スソハライ「すそ払い」、シサ「示唆」

(46)は高母音の後に /h/ が続く場合は、無声化しないというものである。これはモーラ境界を明確にするためであり、無声化すると /h/ の脱落により、二つのモーラが融合してしまうことがある。これは早口で言う場合に顕著に現れる。

- (48) /ɕihainin/ → /ɕainin/ 「シハイニン」 → 「シャイニン」  
 /ɕiçoo/ → /ɕoo/ 「シヒョー」 → 「ショー」  
 /ɕihan/ → /ɕian/ 「ヒハン」 → 「ヒアン」  
 /Φwhei/ → /Φwei/ 「フヘイ」 → 「フエイ」

(47)の非無声化もモーラ境界を明確にするためであり、「シシ」、「スス」など同じモーラが連続する場合には、無声化すると単一の音節のように聞こえる。(47)は摩擦音間の母音無声化であって、イ⑤キ「行き来」、⑥クル「くる」、⑦チウエ「父上」、⑧ツク「突く」など閉鎖音間の母音は無声化する。これは閉鎖音は呼気の流れの一時閉鎖により、モーラ境界が認識できるためであろう。/h/ が削除されやすいのも摩擦音が前にある場合であり、(42)の「気迫」や「気品」では /h/ が発音されている。

(44)の語には無声化が行なわれているのに、同じ摩擦音間の母音であるにもかかわらず、(47)では無声音に発音されない。(47)の非無声化には次の二つの条件が考えられる。

(49) 摩擦音間の非無声化の条件

- a. 高母音をはさむ二つの子音は同じ音素である。(47a)
- b. 高母音が語頭の音節にあり、二つの摩擦音に挟まれている。(47b)

「シサ」の連続音を見ても、(44)の<sup>シ</sup>ア<sup>サ</sup>キ「足先」、<sup>タ</sup>ダ<sup>サ</sup>「正しさ」の「シ」は無声音であり、(47)の<sup>シ</sup>サ「示唆」、<sup>シ</sup>サツ「視察」、<sup>シ</sup>サン「資産」の「シ」は有声音である。無声化しないのは、ピッチの高さの違う「シ」と「サ」の境界を有声音で明確にするためであろう。

2音節連続の無声化はないと前に述べたが、更に詳しく見て見よう。二つの無声子音を調音法別に分けてみる。次の語は、高母音の無声化が連続して起る環境にあるのであるが、a は前の音節が無声化し、b は後の音節が無声化しているものである。

(50) 閉鎖音+高母音-閉鎖音+高母音-無声子音

- a. <sup>チ</sup>コミ「口こみ」、<sup>ツ</sup>ヒモ、<sup>ツ</sup>ヒモ「靴ひも」、<sup>ッ</sup>ブク「屈服」、<sup>ク</sup>ショー「畜生」、<sup>チ</sup>ハハ「父母」、<sup>キ</sup>カエス「突きかえす」、<sup>キ</sup>キリ「突ききり」、<sup>ク</sup>ス「尽くす」、<sup>ツ</sup>ク、<sup>ッ</sup>ツク「突く」
- b. <sup>ク</sup>シュギ「属地主義」、<sup>キ</sup>ケル「焚きつける」、<sup>ナ</sup>ツ<sup>サ</sup>「夏草」、<sup>バ</sup>ク<sup>ク</sup>「爆竹」
- c. <sup>カツ</sup>チ「カツ吉」、<sup>ク</sup>キ「格式」(城生、1998: 81)

(51) 閉鎖音+高母音-摩擦音+高母音-無声子音

- a. <sup>シ</sup>ツ「気質」、<sup>シ</sup>ユク「寄宿」、<sup>フ</sup>キン「寄付金」、<sup>シ</sup>カツ「串かつ」
- b. <sup>キ</sup>キン「寄付金」、<sup>キ</sup>コーイ「寄付行為」、<sup>ク</sup>クモ「奇しくも」、<sup>チ</sup>ツ「地質」、<sup>チ</sup>キ「知識」、<sup>チ</sup>キカイキュー「知識階級」、<sup>ト</sup>ク<sup>カ</sup>「篤志家」

(52) 摩擦音+高母音-摩擦音+高母音-無声子音

- a. <sup>シ</sup>クレ「節くれ」、<sup>シ</sup>チョー「不死鳥」
- b. <sup>シ</sup>ツ、<sup>シ</sup>ツ「資質」、<sup>シ</sup>ユツ<sup>キン</sup>「出資金」、<sup>シ</sup>ユツ「支出」、<sup>シ</sup>ク「私服」、<sup>ス</sup>キ「すすき[植物]」、<sup>ス</sup>スゲル、<sup>ス</sup>ケル「煤ける」、<sup>フ</sup>テ「伏して」、<sup>ヒ</sup>ツ、<sup>ヒ</sup>ツ「皮質」、

ヒ<sup>○</sup>カ「皮膚科」、フ<sup>○</sup>ク「不服」

c. スス<sup>#</sup>ハキ「すす掃き」、スス<sup>#</sup>ハライ「すす払い」([#]は語境界)

(53) 摩擦音＋高母音－閉鎖音＋高母音－無声子音

a. ㊦<sup>○</sup>キカン「指揮官」、㊦<sup>○</sup>ツチタイ「湿地帯」、㊦<sup>○</sup>ツケ「しつけ」、  
㊦<sup>○</sup>キギワ「引き際」、㊦<sup>○</sup>クツ「卑屈」、㊦<sup>○</sup>チカガリ「縁かがり」、  
㊦<sup>○</sup>キツ「不吉」、㊦<sup>○</sup>クシュー「復習」

b. カシ<sup>○</sup>ケ「貸し付け」、ブシ<sup>○</sup>ケ、ブシ<sup>○</sup>ケ「しつけ」  
(c. f. ㊦<sup>○</sup>ツケ「しつけ」)

c. ニ<sup>○</sup>キ<sup>#</sup>ヘビ、ニ<sup>○</sup>キ<sup>#</sup>ヘビ「錦蛇」、イ<sup>○</sup>キ<sup>#</sup>カイカク「意識改革」

(50)～(53)の例には、一つの語に 2 種類のアクセントを示しているものがあるが、これは標準アクセントが 2 種類あって、よりふさわしいものを先に挙げてある。『アクセント辞典』 p. 8)

(50)～(53)の a の例は、低ピッチである語頭の音節が無声化している。これは二つの無声子音間の高母音が低ピッチである場合に無声化する一般的な現象である。(50)の語は、例外なく(50a)では低ピッチの無声音節が語頭にあり、(50b)では無声音節が後にある。興味深いのは、城生が指摘している(50c)の高母音「カ」の無声化である。『アクセント辞典』では無声化していない。個人差があるためか、辞典の編集部が見落とししたのか明らかでない。

(51b)は語頭の低ピッチ音節が無声化しない。(52)の語で語頭の無声化が起っているのは、(52a)の「フ」のみである。(52b)では、語頭の低ピッチ音節が無声化していない。摩擦音の連続では後ろの方が無声化しやすい。

(52c)は「スス」と同じ音節が続く語であるが、前の「ス」が無声化しないのは、同じ摩擦音が連続しているためであり、後の「ス」が無声化しないのは、高ピッチの語末の位置にあるためである。語境界[#]を挟んでは無声化が起らない。(53c)の「ニシキヘビ」は、「シキ」が高ピッチであるため、「キ」が無声音になるはずであるが、「ニシキ」の後に語境

界があるので、「キ」の無声化は起らない。

摩擦子音の音節が無声化するのは、それが2番目にある場合であり、(53a,b)の例のように摩擦子音の音節が前にあり、閉鎖子音の音節が後ろにある場合には、(50)の例と同様、(53a)は語頭の音節が無声化し、(53b)では後ろの音節が無声化している。

次に(40d)の条件「アクセント核が付与される母音は無声化しない」について見てみよう。(54a)ではアクセント核のある音節は無声化していない。(54b)と(54c)にはアクセント核の音節に有声と無声の両方がある。

#### (54) アクセント核の非無声化と無声化

- a. カクス「隠す」、㊦フー、㊦フー、キフー「気風」、㊦フキン、キ㊦キン、(㊦フキン)「寄付金」、ダイシホン「大資本」、ショーヒシャ「消費者」、ショーヒスイジュン「消費水準」、タダ㊦サ、タダシサ「正しさ」、タノ㊦サ、タノシサ「楽しさ」、㊦チ「父」、㊦チ、チチ「遅々(として)」、㊦シヒシ、ヒシ㊦シ「ひしひし」
- b. ㊦シャ、㊦シャ「記者」、㊦ト、㊦ト「使途」、㊦ユクン、㊦ユクン「主君」、㊦カ、㊦カ「地下」、㊦グ、㊦ク「地区」
- c. ㊦キ、㊦キ「危機」、㊦シャ、㊦シャ「貴社」、㊦チ、㊦チ「機知」、㊦ク、㊦ク「九九」、㊦ユト、㊦ユト「首都」、㊦キ、㊦キ「知己」

(54a)は(40d)の条件に従って、アクセント核の母音を無声化していない。(54b)と(54c)は2音節語であるが、本来の頭高アクセント型の語が、尾高アクセント型に変わったものである。一つの語に二つのアクセント型を示している場合、前の方がよりふさわしいアクセントであると前に述べたが、(54b)のよりふさわしいタイプは、アクセントシフトを行なった尾高型である。一方(54c)では、音節が無声化していても、従来の頭高アクセント型を変えないのをよりふさわしい型としている。アクセント核を後ろの音節へシフトすることへの抵抗がみられる。



(54e)の語にはアクセント核の移動が起っていない。無声音節にアクセント核があり、(40c)の条件に反するものである。アクセント核を移動せずに、複合語のアクセントの高低を保持しようという意図が表れている。

次の(55a)は元来後ろから3番目のモーラにアクセント核のあるべき語であり、(55b)は元来後ろから4番目のモーラにアクセント核のあるべき語であるが、それぞれ左の音節へアクセント核が移動している。

(55) 外来語の左方アクセントシフト

- a. アー④スト→アー④スト 'artist'、ア④ション→ア④ション 'action'、ア④セス→ア④セス 'access'、ア④セル→ア④セル 'accélération'、ア④ティブ→ア④ティブ 'active'、エキ④トラ→エキ④トラ 'extra'、オー④ション→オー④ション 'auktion'、オーケ④トラ→オーケ④トラ 'orchestra'、カ④テル→カ④テル 'cocktail'、カ④タム→カ④タム 'custom'、キャ④タル→キャ④タル 'capital'、キャ④ション→キャ④ション 'caption'、クラ④ション→クラ④ション 'klaxon'、クリ④タル→クリ④タル 'crystal'、クリ④チャン→クリ④チャン 'Christian'、コレ④ション→コレ④ション 'collection'、セレ④ション→セレ④ション 'sélection'、タング④テン→タング④テン 'tungsten'、トロ④カル→トロ④カル 'tropical'、ハイビ④カス→ハイビ④カス 'hibiscus'、フィ④ション→フィ④ション 'fiction'、プロダ④ション→プロダ④ション 'production'
- b. ア④セント→ア④セント 'accent'、アシ④タント→アシ④タント 'assistant'、イン④タント→イン④タント 'instant'、ボ④シング→ボ④シング 'boxing'

日本語のアクセント核シフトは右へであり、外来語では左へである。日本語ではなぜアクセント核が右へ移動するのかは筆者には明らかでないが、外来語の場合は、借用される言語（英語）のアクセントに近くす

るために、アクセント核を左に移動しているのであろう。(16)の例で、英語のアクセントの位置と同じでないのは、「エキストラ」、「オーケストラ」、「タンゴステン」と短縮形の「アクセル」ぐらいである。

外来語では、無声モーラのアクセントを左に移動しているが、日本語のように右へ移動する場合もある。次のように3モーラ語では、語頭の無声モーラのアクセント核を左へ移動することができないので、右へ移動している。

#### (56) 外来語の右方アクセントシフト

㊦キン、㊦トア、㊦ペア、㊦ペル、㊦ピン、㊦カル

外来語にもアクセント核の移動しないものもある。次の(57a)は促音の音節にアクセント核が付与されたものであり、(57b)は英語のアクセントの影響で随意的にアクセントの移動するものである。(57c)は複合語のアクセント規則によってアクセント核の付与されたものである。

#### (57) アクセント核の非移動

- a. アウト㊦ット、エロ㊦ック、オリン㊦ック、ゴール㊦ック、  
ドラマ㊦ック、ドルフィン㊦ック、ロマン㊦ック
- b. クラ㊦ック、クラ㊦ック 'clássic'、ゴ㊦ック、ゴ㊦ック 'Góthic'、  
ゴ㊦ップ、ゴ㊦ップ 'góssip'、デモクラ㊦ック、デモクラ㊦ック  
'démocrátic'、ト㊦ック、ト㊦ック 'tópic'
- c. ダイニング㊦チン 'dining kitchen'、バック㊦キン 'buckskin'

アクセント核を引きつける度合いの強いのは、長母音・二重母音が最も強く、次に促音だと述べた。(57a)の促音の音節に付加したアクセント核が移動しないのは、前の音節が長母音・二重母音でないからである。(57c)は複合語であるが、アクセント核は後部要素の最初の音節に付く。複合語のアクセント核が移動していない。複合語のアクセントについては、

次節で詳しく述べる。

### 2.6.5 複合語のアクセント

外来語の複合語アクセントを論ずる前に、日本語の複合語アクセントを調べ、外来語との共通点について述べる。日本語の複合語のアクセント型は大きく分けて、後部要素の最初の音節にアクセント核の付与、つまり第1モーラが高ピッチになる型（A型とする）と、前部要素の最後の音節にアクセント核を付与する型（B型とする）がある。平板型もあるのであるが、ここでは問題としない。次の(58a)はA型であり、(58b)はB型である。A型の [#] は語境界であり、B型の [+] は形態素境界である。次の例は、『アクセント辞典』の「付4. 複合名詞の発音とアクセント」(170-202) に掲載されているA型、B型の表からのものである。

#### (58) 日本語の複合語アクセント

##### a. A型アクセント

アイテ#シダイ「相手次第」、ケンカ#アイテ「喧嘩相手」、  
サンギョー#カクメイ「産業革命」、ショクギョー#フジン「職業婦人」、  
セイカツ#フジョ「生活扶助」、ハカタ#オビ「博多帯」

##### b. B型アクセント

シューチャク+エキ「終着駅」、タツキュー+ブ「卓球部」、  
テンサイ+ジ「天才児」、マンゾク+カン「満足感」、  
ミンシュ+コク「民主国」

A型とB型を語境界と形態素境界で区別しているが、二つの語の結合の強さを表わすものである。A型アクセントでは後部要素は他の語に結合することなく用いられる自由形態素である。一方、B型アクセントでは後部要素は前部要素に結合して語を形成する拘束形態素である。A型の後部要素は一人前にアクセント核が付与されているが、B型の後部要素にはアクセント核は付与されていない。A型は二つの語の添加とみな

されるが、B型は二つの形態素で一つの語とみなされている。A型とB型の違いは、後部要素のモーラ数によっても大方見当がつく。3モーラ以上であればA型であり、2モーラ以下では通常B型である。後部要素が2モーラでも「セイカツ#フジョ」や「ハカタ#オビ」のようにA型アクセントを取るものがあるが、その数は少ない。

複合語のアクセント核が無声音のモーラに付与されている場合、アクセント移動が行なわれる。次の語はA型複合語のアクセントの右移動であるが、(59a)では右移動の型をふさわしいアクセントとしているが、(59b)では無声音を高ピッチで発音する方をよりふさわしい型としている。(59c)は無声音の高ピッチを唯一のアクセントとするものである。

#### (59) A型のアクセントシフト

- a. コーツー#㊦カン、コーツー#㊦カン「交通機関」、  
     シャカイ#㊦クシ、シャカイ#㊦クシ「社会福祉」、  
     シュージョー#㊦ソク、シュージョー#㊦ソク「就業規則」、  
     ニューガク#㊦ケン、ニューガク#㊦ケン「入学試験」、  
     ユーコー#㊦カン、ユーコー#㊦カン「有効機関」、
- b. イッパン#㊦ツモン、イッパン#㊦ツモン「一般質問」、  
     コーギョー#㊦ク、コーギョー#㊦ク「工業地区」、  
     セイジ#㊦キン、セイジ#㊦キン「政治資金」、  
     タイクー#㊦コー、タイクー#㊦コー「滞空飛行」、
- c. コーツー#㊦セイ「交通規制」、シャカイ#㊦ツキ「社会復帰」

A型複合語では、無声音のアクセント核を右に移動するのを見てきた。次のB型の複合語では、無声音のアクセント核は左の音節に移動している。(60a)は移動した型をふさわしいとするものであり、(60b)は無声音の高ピッチをふさわしいアクセントとするものである。(60c)は無声アクセント核の移動しないものである。

(60) B型のアクセントシフト

- a. コード+⑦シャ、コード⑦+シャ「購読者」、  
     タイシャ⑦+テン、タイシャ⑦+テン「帝釈天」
- b. セイカ⑦+キュー、セイカ⑦+キュー「生活給」、  
     セイサ⑦+ヒ、セイサ⑦+ヒ「制作費」
- c. ガラ②+キ「ガラス器」、ガラ②+キリ「ガラス切り」、  
     ショ④+チョー「書記長」

B型複合語のアクセント核が右へ移動しないのは、A型と同じように後部要素にアクセント核を持たせないためである。A型は右肩が高く、B型は左肩が高いという特徴を保っているのである。

外来語の複合語アクセントは単純である。後部要素の最初のモーラが高ピッチに発音される、いわゆるA型アクセントである。外来語と英語を並べてみると、二つの語が結合していることが良く分る。英語では、複合語の強勢は一般的に前部要素に付くのであるが、外来語のアクセントは日本語の規則を適用したものである。

(61) 外来語の複合語のアクセント

カットイン 'cut in'、カットアウト 'cut out'、キックオフ 'kickoff'、  
     キャッツアイ 'cat's-eye'、ジュニアカレッジ 'junior college'、  
     ショットガン 'shotgun'、スタンドイン 'stand-in'、スナックバー  
     'snack bar'、タイムリミット 'time limit'、ダンプカー 'dump car'、  
     チューインガム (チューインガムもあり) 'chewing gum'、  
     トスバッテイング 'toss batting'、ドリブルバス 'dribble pass'、  
     トリプルプレー 'triple play'、トレーニングシャツ 'training  
     shirt'、トレーラーバス 'trailer bus'、ファッションショー  
     (ファッションショーもあり) 'fashion show'、フェルトペン  
     'felt pen'、フォークロア 'folklore'、プラトニックラブ 'Platonic  
     love'、ヘアトニック (ヘアトニックもあり) 'hair tonic'、

ホールインワン<sup>1</sup> ‘hole in one’、マジックアイ<sup>1</sup> ‘magic eye’、  
 ロマンスグレー<sup>1</sup> ‘romance grey’ (和製英語)、ワンマンカー<sup>1</sup>  
 ‘one-man car’

(61)の「チューインガム」<sup>1</sup>、「ファッショ<sup>1</sup>ンショー」、「ヘアトニ<sup>1</sup>ック」のアクセントは、後ろから三つ目のモーラを含む音節にアクセント核を付与したものである。別の辞典を見て、アクセントの記述が異なっているのは良く目にすることであるが、『新明解日本語アクセント辞典』(2001)には、「フェルト<sup>1</sup>ペン」、「ワンマン<sup>1</sup>カー」というアクセントが載っている。これらのアクセントは、複合語アクセント規則を適用したものではなく、1語と見なして後ろから三つ目のモーラを含む音節にアクセント核を付与している。‘triple play’が「トリプル<sup>1</sup>プレー」、‘romance grey’「ロマンス<sup>1</sup>グレー」と発音されないのは、前にも述べたが、‘play’が「プ<sup>1</sup>レー」、‘gray’が「グ<sup>1</sup>レー」と発音されないからである。

#### 2.6.6 英語と同一のアクセント

外来語には、そのアクセント核の位置が、英語の強勢の位置と同じものが多くある。これまで述べてきたアクセント規則では説明できないものである。それらの語は、ほとんどが語頭の音節にアクセント核が付与されている。

英語と同じアクセントを取る外来語には、接尾辞の付加によるものがある。

#### (62) 接尾辞の付加

##### a. -al の付加

インターナ<sup>1</sup>ショナル ‘internátional’、カーニ<sup>1</sup>バル (カーニ<sup>1</sup>バルもあり) ‘cárnival’、コミ<sup>1</sup>カル ‘cómicall’、クリスタ<sup>1</sup>ル ‘crystal’、シグナ<sup>1</sup>ル ‘sígnaal’、センセー<sup>1</sup>ショナル ‘sensátional’、ティピ<sup>1</sup>カル ‘typical’、パーソ<sup>1</sup>ナル ‘pérsonaal’、フェス<sup>1</sup>ティバル ‘féstival’、

プロフェッショナル 'proféssional'、ラジカル 'radical'、リベラル 'liberal'、ロジカル 'logical'、オリジナル 'original'

b. -ing の付加

オープニング 'ópening'、キルティング 'qúilting'、クッキング 'cóoking'、ショッピング 'shópping'、ダンピング 'dúmping'、ドレッシング 'dréssing'、パーキング 'parking'、ハプニング 'happening'、フェンシング 'féncing'、ランキング 'rankíng'

c. -ment の付加

エレメント 'élement'、ⓧステートメント 'statement'、トーナメント(トーナメントもあり) 'tóurnament'、ドキュメント(ドキュメントもあり) 'dócument'、フィラメント 'filament'、ムーブメント 'móvement'、モニュメント 'mónument'

(62)は、接尾辞の付加した語が外来語のアクセントに影響を及ぼしているのか、それとも接尾辞に関係なく英語のアクセントに従っているのかは明らかではないが、ある英語の接尾辞が外来語に一定のアクセントパターンをもたらしているのは確かである。「トーナメント」と

「ドキュメント」は後ろから三つ目のモーラが高ピッチである。-ing の例外として「マーケティング」 'marketing' がある。'market' には「マーケット」 ('markett) もあり) という発音があるのだから、「マーケティング」というアクセントがあってしかるべきであるが、『新明解日本語アクセント辞典』には新しいアクセントとして「マーケティング」の平板型が載っている。

英語の強勢の位置をそのまま外来語のアクセントの位置にしたと思われる語は多く、次のようなものである。

(63) 英語と同一位置のアクセント

アクトレス 'áctress'、インパクト 'ímpact'、ウエイトレス 'wáitress'、エチケット (エチケツトもあり) 'étiquette'、エピソード

(エピソードもあり) 'épisode'、エレガント 'élegant'、エンジョイ  
 'enjoy'、オーロラ 'auróra'、オキシダント (オキシダントもあり)  
 'óxidant'、カーペット (カーペットもあり) 'cárpet'、ガイドンス  
 'gúidance'、カバレッジ 'cóverage'、カラフル 'cólorful'、カレッジ  
 'cóllege'、コンサート 'cóncert'、サミット 'súmmit'、シノニム  
 'synonym'、スプレー 'spráy'、ソーセージ (ソーセージもあり)  
 'sáusage'、ソネット 'sónnet'、チューリップ (チューリップもあり)  
 'túlip'、テレビジョン 'télévision'、トイレット (トイレットもあり)  
 'tóilet'、トニック 'tónic'、ドロップ (ドロップもあり) 'dróp'、  
 パラダイス 'páradise'、ハズバンド 'húsband'、パニック (パニッ  
 クもあり) 'pánic'、パラレル 'párallel'、ビジネス 'búsiness'、フェ  
 スティバル 'festival'、フェニックス 'phóenics'、プロペラ  
 (プロペラもあり) 'propéller'、ミレニアム 'millénnum'、メッセー  
 ジ 'mésage'、レトリック (レトリックもあり) 'rhétoric'

上の括弧内の代替アクセントは、「プロペラ」の平板型を除いて、すべ  
 て後ろから三つ目のモーラが高ピッチになっている。このパターンが外  
 来語のアクセントとして最も基本的であることを表わしている。(63)の  
 「スプレー」のアクセント核付与は、語末音節が長母音だからではなく、  
 英語の長母音の位置に倣っていると考ええる。「ストロー」 'straw'、  
 「スクリュー」 'screw' は語末の長母音にアクセントが付いていない。

(63)の語のアクセントに関しては、本書では英語のアクセントの位置  
 をそのまま外来語のアクセントに適用したと考えているが。だからと言  
 って、英語の強勢規則が外来語に適用されているということにはならな  
 い。英語と外来語は音節構造が異なっているからである。(62)と(63)の  
 語は、アクセント位置が語頭にあることから、外来語のアクセントパタ  
 ーンは強弱型であるとも考えられようが、筆者には明言できない。確か  
 に2音節語は、英語の名詞と同じく、強弱型が基本形になっている。



### 2.6.7 短縮語のアクセント

音節の構造やモーラ数だけでは外来語のアクセント位置が決められない語も多くある。その最たるものは平板型のアクセントを持つ語である。

#### (64) 平板型アクセント語

アメリカ、アリバイ、アルカリ、アルコール、イタリア、イベント、  
エナメル、オルガン、カシミア、ガソリン、カタログ、カトレア、  
キャラメル、ギロチン、サッカリン、サドル、ジュラルミン、  
ジョギング、スタジオ、スライド、スライディング、ネーミング、  
バイパス、ピアノ、ブレンド、ヘディング、ボーリング、ボール、  
ミーティング、ミニチュア、ランニング

英語を短縮した形の外来語のアクセントを見てみよう。モーラ数が多いと平板型になり、モーラ数が少ないと起伏型（頭高型）になる傾向がある。4モーラ短縮語から見てみよう。4モーラ語は次のように平板型が多い。

#### (65) 4モーラ短縮語

イラスト 'illustration'、インテリ 'intelligent'、イントロ  
'introduction'、インフレ 'inflation'、エフエム 'FM, frequency  
modulation'、エンスト 'engine stop'、オフレコ 'off-the-record'、  
コンクリ 'concrete'、シーエム 'CM, commercial message'、  
ノンプロ 'non-professional'、ノンポリ 'non-political'、ジーパン  
'jeans pants'、パソコン 'personal computer'、バーテン 'bartender'、  
ハンカチ (ハンカチもあり) 'handkerchief'、ミスプリ 'misprint'、  
モノクロ 'monochrome'、リハビリ 'rehabilitation'、リモコン  
'remote control'

4 モーラ短縮語でも起伏型を取るものに、「ア<sup>↑</sup>パ<sup>↑</sup>ート」‘apartment’、  
「ア<sup>↑</sup>レ<sup>↑</sup>ンジ」‘arrangement’ などがある。英語の強勢の位置と同じ所に  
アクセントがある。

4 モーラ短縮語は平板型が多いのであるが、3 モーラ語になると平板  
型より起伏型が多くなり、2 モーラ語になると起伏型になる。

(66) 3 モーラ短縮語

- a. 平板型：アニメ ‘animation’、アルミ ‘aluminum’、ダイヤ  
(<sup>↑</sup>ダイヤもあり) ‘diamond’、デフレ ‘deflation’、パンク ‘puncture’
- b. 起伏型：<sup>↑</sup>コンビ ‘combination’、<sup>↑</sup>コンパ ‘company’、<sup>↑</sup>コンペ  
‘competition’、<sup>↑</sup>センチ ‘centimeter’、<sup>↑</sup>テレビ ‘television’、<sup>↑</sup>トイレ  
‘toilet’、<sup>↑</sup>パーマ ‘permanent’、<sup>↑</sup>ポリス ‘policeman’、<sup>↑</sup>マイク  
‘microphone’、<sup>↑</sup>コース ‘roast’

(67) 2 モーラ短縮語

<sup>↑</sup>アジ ‘agitation’、<sup>↑</sup>アマ ‘amateur’、<sup>↑</sup>エゴ ‘egoism’、<sup>↑</sup>エロ ‘erotic’、  
<sup>↑</sup>コネ ‘connection’、<sup>↑</sup>スト (ストもあり) ‘strike’、<sup>↑</sup>ゼミ (seminar)、  
<sup>↑</sup>デマ ‘demagogy’、<sup>↑</sup>デモ ‘demonstration’、<sup>↑</sup>テロ ‘terrorism’、<sup>↑</sup>ドル  
‘dollar’、<sup>↑</sup>ネガ ‘negative’、<sup>↑</sup>ビル ‘building’、<sup>↑</sup>プロ ‘professional’、  
<sup>↑</sup>ミリ ‘millimeter’、<sup>↑</sup>メモ ‘memorandum’、<sup>↑</sup>ラボ ‘laboratory’、  
<sup>↑</sup>レジ ‘cash register’、<sup>↑</sup>ロケ ‘location’

窪蘭のアクセント規則は、語末から3番目のモーラを含む音節にアクセント核を付与するものであるが、それは筆者が述べている語末から2番目の重音節に付与されるか、語末から2番目の音節が軽音節ならば、その前の音節に付与するものと同じである。英語の名詞の強勢については、小林(1996:77)が述べているように、語末の音節が短母音である場合、語末から2番目の音節が重音節であればそこに強勢が付き(aróma, aréna, coróna, horíson, Minnesóta)、語末から2番目の音節が軽音節で

あれば、その前の語末から3番目の音節に強勢が付く (América, aspáragus, ásterisk, ínterest, metrópolis)が、これは外来語のアクセント規則と似ている。窪菌と筆者との違いは、音節を数えるかモーラを数えるかにある。

## 2.7 おわりに

外来語は、日本語と英語の両面を兼ね備えた中間言語のようなものである。外来語と言っても日本語なのだから、日本語の音韻規則に従っているかと思うとそうでもない。外来語の発音には、正に外来語独自の音韻規則が働いているのである。

我々の外来語の発音は、時にはあいまいである。我々の生活に日毎、膨大な量の外来語が入り込んでいることもあろうが、我々自身、定まった規則を持っていないからである。

外来語の発音は常に変化している。英語らしさへの変化が、今後更に進むとしても、外来語は日本語である。英語の音体系に淘汰されることはない。外来語が、英語らしさを見せながらも、基本的には日本語の音体系に順じた独自の道を進むのは、今後も変わらないだろう。

## 第3章『研究社新英和大辞典』にある日本語の発音

### 3.1 はじめに

本章と次章は、英語辞典の中の日本語が、どのように発音されているのかを述べるものである。日本語の語彙が多く載っている辞書は『研究社新英和大辞典』第5版、第6版(2000、2002)(以下『研究社』)、『ジーニアス英和大辞典』(2001)(以下『ジーニアス』)、*Webster's Third New International Dictionary*(1993)(以下 *Webster*)、*The Oxford English Dictionary, Second Edition*, CD, ver 3 (2002)(以下 *OED*)、*Longman Pronunciation Dictionary*(2000)(以下 *LPD*)、*The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*(2001)(以下 *ODP*) などがあるのであるが、本章では『研究社』に載っている語のみ取り上げることにする。『研究社』は本国で発行された英和辞典であるので、次章の第4章では外国で発行された英英辞典に載っている日本語の発音を調べ、両辞典の違いについて述べてみたい。

本章の目的は、日本語の語彙が英語の辞書の中ではどのように発音されているのかを調べることにあるが、外国語である日本語の発音が、英語の発音規則に従ったものであるのか、外国語独自の発音規則によるものなのか、発音に日本語の特徴が見られるのか、アメリカ英語とイギリス英語の発音の違いが日本語にどのように表れているのかを見てみたい。

『研究社』第5版の初版が1980年だったから、2002年3月に刊行された第6版は22年振りということになる。本章ではまず第5版について述べて、次に第5版と第6版の違いについて述べることにする。

両版に載せてある日本語とその発音を本章末に一括して記載した。米音を左に、英音を右に書いたが、『研究社』で米音と英音を区別して記述していないものは、米音と英音が同じ発音であるとみなし、米音と英音

の中間にその発音記号を書いている。第5版では発音記号を [ ] で囲み、第6版では / / で囲んであるので、本章も両版を区別するために二つの記号を用いている。通常、単音(phone)は [ ] で表わし、音素(phoneme)は / / で表わすのであるが、一部の語を除いて、両版の発音には単音、音素の違いは見られない。音声記号の使用について、第5版では、「現在の言語学では個々の音は [ ] で囲み、音素は / / で囲んで示すのが慣行となっている」(p.XVI, 2. 音素)と [ ] を使用した理由について述べている。一方、第6版では、「ある言語において同じ音とされる「音素」を基にして発音を示す方式は「簡易表記」と呼ばれ、現在の言語学・音声学では / / で囲んで示すのが慣例である」(p. X iii, 1. 米音と英音)と音素表記の趣旨について述べている。しかし、『研究社』第6版に載っている /dʒúːdɔʊ/「柔道」、/kəɾáːtʲi/「空手」の弾音 /d, t/ や、/iŋgúːrɔʊ/「イシグロ・カズオ」、/tɛmpúːrə/「てんぷら」の二重母音 /u/ などは簡略記号ではなく精密記号である。両版を比べてみても、第5版での [ ] 記号を第6版で / / 記号に変えた趣旨がはっきりしない。

## 3.2 音節区分

『研究社』第6版は、第5版全体から見れば、若干の修正が加えられたにすぎないものである。従って、まず第5版について述べ、その後で第5版と第6版との違いについて述べることにする。

### 3.2.1 第5版の音節区分

音節の区切りについて『研究社』第5版には、「外国語の場合は必ずしも英語の形によらず、その原語での切り方で示したものがある：Pi・noc・chio [pɪnókɪəʊ; It. pinókɕjo] n.」(p. x 凡例 1.2)と書かれてある。これは chio を [kiou] と2音節に発音する英語では、Pi・noc・chi・o のように区切るべきであるが、イタリア語の発音 [kjo] に従って chio を

1 音節にするというものである。同じようなことが英語辞書の中の日本語にも見られる。Ryukyu [ri(j)ú:kju:] Islands 「琉球諸島」はその発音からは Ry・u・kyu と区切るべきであるが、Ryu・kyu と日本語の音節に区切られている。同様に tokyoite 「東京都民」は、[tóukiouàit] (米音)、[tókjəuàit] (英音) と発音されるので、to・ky・o・ite と4音節に区分されるはずであるが、『研究社』では to・kyo・ite と3音節になっている。ちなみに Webster も tokyo/tokio [tóuki:òu] は to・kyo/to・kio と2音節に区分されている。また、『研究社』には Ryu・kyu [rjú:kju:] と2音節区分の発音も記載されているが、to・kyo・ite の米音としての [tókjəuàit] という発音は記載されていない。英音として [tókjəuàit] が載っているのだから、米音としての拗音の発音[kjəu]が辞典に載っても良いはずである。

日本語の音節区分と発音を次の語で見てみよう。なお、(1c) の語の samurai は *Longman Dictionary of Contemporary English*(1993) (以下 LDCE) に載っているものである。

- (1) a. ha・ra-ki・ri [hàrəkíri] 「腹切り」
- b. sa・mu・rai [sú:muràɪ, sém(j)uràɪ] 「侍」、Se・to [séitou, sétou] 「瀬戸焼」、su・ki・ya・ki [sù:kijú:ki, sùkijæki] 「すきやき」
- c. sam・i・sen [séməsèn] 「三味線」  
(LDCEに sam・u・rai [sémuràɪ] 「侍」あり)
- d. dai・my・o [dáimiðu/dáimjəu] 「大名」

英語には、強勢のある音節は重音節(CVV, CVC)であり、強勢のない音節は軽音節(CV)であるという一般的な音節区分の原則がある。上記の(1)の語が音節区分の原則に従っているかどうか見てみよう。(1a) は発音から見ると har・a-kir・i と区分されるべきであるが、日本語の仮名区分に従ったものである。(1b) はその発音から二通りの音節区分が考えられるが、日本語の仮名区分を重視したものである。例えば、英語辞書

では [sú:mUràɪ] の発音であれば sa・mu・rai と区分し、[sæm(j)Uràɪ] であれば sam・u・rai と区分するのが普通である。同様に se・to と su・ki・ya・ki もその右に書いてある発音記号からは、set・o と suk・i・yak・i に区分することも可能なのであるが、日本語の CV 音節に従っている。一方、(1c) の語は、原語よりもむしろ英語としての音節区分をしたものであり、このような例は少ない。なお、*LDCE* の samurai には、(1c) の発音記号しか書かれていない。また、rai には強勢が付いていない。(1d) の dai・my・o は英語の発音による音節区分であり、Ryu・kyu, to・kyo・ite のような原語による音節区分と矛盾する。更に「大名」には [dámjou] という発音もあることから、dai・myo と綴る方が、他の語との一貫性が見られる。

日本語をヘボン式ローマ字で表わす場合に、tsu「ツ」は二つの子音が連なるが、これら子音群は二つで一つの音素なので、通常 t と s が分離されることはない。

(2) ne・tsu・ke [néts(u)ki] 「根付け」、zai・ba・tsu [záɪbɑːtsù] 「財閥」

netsuke は ne に強勢があることから、英語の音節区分に従うと net・su・ke でも良いのであるが、日本語にならい tsu を一つの音節としている。ところが、tsu の音節区分に関しては、『研究社』が一貫性に欠けることが次の例から分かる。

(3) kat・su・ra [ká:tsərə] 「カツラ[植物]」、sat・su・ma [sætsú:mə] 「薩摩焼き」

(2) は日本語から見た音節区分であり、(3) は発音よりもスペリングを見て区分しており、英語から見た音節区分である。「カツラ」は強勢のある母音が長母音であるため、ka・tsu・ra と区分するのが妥当のように思われる。発音と音節区分が一致していないのが英語辞典にある日本語

の現象でもある。

日本語に対する音節区分について結論付けると、原則的に原語（日本語）の音節区分に従うものであり、(1d)の *dai•my•o* や(1c)の *sam•i•sen*、あるいは *ts* の子音群を分離する(3)の *kat•su•ra* のように英語の規則に従うものは例外的である。

### 3.2.2 第5版と第6版の音節区分

外国語である日本語の音節区分は、原則的に原語、つまり日本語の音節区分に従っている。日本語の撥音、拗音、促音を一つのモーラとして区分するのではなく、母音を含む単位を一つの音節として区分している。同様に二重母音も一つの音節境界として区分している。

#### (4) 音節区分

- a. 撥音: *bon•sai* 「盆栽」、*Shin•gon* 「真言宗」
- b. 二重母音: *gei•sha* 「芸者」、*hai•ku* 「俳句」
- c. 拗音: *hon•cho* 「班長」、*Ryu•kyu* 「琉球」
- d. 促音: *Is•sei* 「一世」、*kak•ke* 「脚気」

一方、英語辞典に載っている日本語には、日本語のかな文字区分ではなく、英語の音節区分に従っているものも多い。次の発音記号の [ ] は第5版、 / / は第6版の発音であるが、両版とも同じ発音のものは第6版の発音記号を用いて表わしている。

#### (5) 英語辞典の音節区分

##### a. 拗音

*dai•my•o*, *dai•mi•o*: [dámɪdʊ], [dámjɔʊ] (第5版) 「大名」  
/dámjɔʊ/, /dámjəʊ/ (第6版)

*ry•u*: /riú:/ 「流」(武道の流派)



b. <tsu> の音節区分

ju•jit•su: /dʒu:dʒitsu:/ 「柔術」, kat•su•ra tree: /kát:tsərə trì:/,

Sat•su•ma: /sætsú:mə/, /sætsumə/

cf. ne•tsu•ke, tsu•tsu•ga•mu•shi 「つつが虫」,

zai•ba•tsu, shi•a•tsu 「指圧」

c. その他

sam•i•sen: [sáməsèn] (第5版)、/sáməsèn/ (第6版)

Ya•yoi /ja:jó:/ 「弥生式の」

cf. 仮名文字: ko•i 「鯉」

ha•bu•tai, ha•bu•tae /há:bətà:/ 「羽二重」

(5a)は日本語の拗音を英語の発音から2音節に区分したものである。しかし、「大名」の発音が第6版では /dámjɔ:/ の拗音だけが記載されており、第5版にあった [dámjɔ:] という発音は削除されている。第6版にはその発音とは違って dai•my•o と音節区分されているが、発音からは dai•myo が正しい音節区分になる。dai•myo がないのは、第5版から問題であった。一方、Ryu•kyu 「琉球」は、第5版では [ri(j)ú:kju:] と [rjú:kju:] のように ryu を1音節にする発音と2音節にする発音があるが、第6版では /ri(j)ú:kju:/ だけであり、拗音を1音節に発音する [rjú:kju:] は記載されていない。第6版の /ri(j)ú:kju:/ の発音からは、その音節区分が Ry•u•kyu となるべきなのであるが、原語の区分に従って Ryu•kyu のままである。これは /tókjɔ:/ が to•kyo と音節区分されているのと同様である。また、第6版に新しく加えられた ry•u /riú:/ 「流」は2音節語である。このことから、/dámjɔ:/ の発音は例外的であり、第6版では拗音が消えつつあることを暗示しているように思われる。

(5b)は、英語では子音群を二つの音節に分けることから、tsu を t と su に区分している例である。ne•tsu•ke 「根付け」、tsu•tsu•ga•mu•shi 「つつが虫」、zai•ba•tsu 「財閥」や第6版で新しく加えられた

shi・a・tsu「指圧」のように、t と su を分けない語もあり、第5版と同じく、第6版でも一貫性が見られない。

(5c) の sam・i・sen の音節区分は英語の発音に従ったものであり、他に例が見られない。sa・mu・rai /sæm(j)uràɪ/「侍」のように「三味線」を日本語の仮名単位に区切れないのは、第6版でも従来の古い音節区分を変えられないためであろう。(5c) の Ya・yoi のように yoi を1音節にするのは、英語の発音に従ったものである。日本語では ko・i のように o と i は別々の音節(拍)とみなされる。しかし、ko・i は英語辞典では /kɔɪ/ と1音節に発音される。ya・yoi と ko・i は音節の分け方が異なっているにもかかわらず、両語共 oi は /ɔɪ/ と発音されている。2音節であれば /ko・i/ の発音は /kɔui/ となるはずである。(5c) の「羽二重」を原語では habutae と読み、tae は2音節である。ところが英語辞典では tae を /taɪ/ と1音節に発音している。これはその発音からのスペリングが ha・bu・tai に変わり、1音節になったものである。原語通り ha・bu・ta・e と4音節に区切ると /hà:bətá:i/ と発音されるはずである。他の辞典で「羽二重」のスペリングを見てみると、*Webster* は habutae と habutai の二つが記載されているが、*OED* は habutai が主要語であり、代替スペリングとして habutaye, habutae が載っている。*ODP* のように、発音どおりに habutai しか記載されていないものもある。同じ現象として、第5版の ukiyo-e [u:kì:jo(u)(j)ér]「浮世絵」と第6版の ukiyo-ye /ù:kiou(j)ér/ がある。[ér] の発音から -e のスペリングが -ye に変わったものである。

### 3.3 アクセント付与

「広島」のアクセントは hìroshíma と hiróshima の両方あるが、「長崎」は nàgasáki であって、nagásaki というアクセントはない。原語の発音では「ナガサキ」と「ガ」にアクセントがあるので、日本語へのアクセント付与は、原語のアクセントに従っているとは言えない。どの

ようなアクセント付与規則は働いているのか見てみよう。

### 3.3.1 第5版のアクセント付与

英語話者にとって外国語である日本語のアクセントが、英語の強勢規則に順じているか見てみよう。日本語へのアクセント付与を論ずる前に、まず英語の強勢規則について簡単に述べ、日本語がその規則に順じているか見てみる。英語名詞に主強勢規則を適用したものが、(6)の語である。なお、 $C_0$  は子音がゼロ個以上あることを意味し、 $C_0^1$  は子音がゼロ個か1個あることを意味し、 $C_2$  は子音が2個以上あることを意味する。

#### (6) 英語の強勢

- a.  $\acute{V}C_0VC_0^1VC_0\#$ : A•mér•i•ca [əmérikə], as•pár•a•gus,  
ás•te•risk, cín•e•ma
- b.  $\acute{V}VC_0VC_0\#$ : a•ré•na [ərí:nə], co•ró•na, ho•rí•zon,  
Min•ne•só•ta
- c.  $\acute{V}C_2VC_0\#$ : a•gén•da [ədʒéndə], ap•pén•dix, con•sén•sus,  
sy•nóp•sis
- d.  $\acute{V}VC_0\#$ : bar•ri•cáde [bærəkéd], ba•záar, ma•chíne,  
mag•a•zíne

(6)の強勢付与規則は Chomsky-Halle(1968:70)(以下 *SPE*) の主強勢規則(Main Stress Rule) を名詞適用規則に書きなおしたものであるが、*SPE* で強勢が付けられる音節もやはり重音節である。(6d) の barricade と magazine は次の交替強勢規則(Alternating Stress Rule)によって語頭の音節に第1強勢が付与されるので、語末の強勢は第2強勢となる。barricade と magazine には交替強勢規則が随意的に適用されるが、次の(7)の語には必然的に適用される。

#### (7) 交替強勢規則 (*SPE*:78)

V → [1 stress] / \_\_\_\_ C<sub>0</sub>VC<sub>0</sub>VC<sub>0</sub>

(8) bárricàde ~ bàrricáde, mágazìne ~ màgazíne

(9) áneecdòte, húrricàne, mátadòr, níghtingàle, pédigrèe

日本語へのアクセント規則も英語の規則に順じたものであるか見てみよう。まず、日本語で(8)と(9)の強勢規則が適用されていると思われる例を次に挙げてみる。

(10) 日本語の強勢

a.  $\acute{V}C_0VC_0^{\prime}VC_0\#$ : á·ke·bi [á:kə/ɪbɪ] 「あけび」、

sát·su·ma [sætsʊmə]

b.  $\acute{V}VC_0VC_0\#$ : ka·rá·te [kərá:tɪ] 「空手」、Yò·ko·há·ma

[jòukəhá:mə] 「横浜」

c.  $\acute{V}C_2VC_0\#$ : rén·ga [réŋgə] 「連歌」、Shín·gon [ʃɪŋɡən]

d.  $\acute{V}VC_0\#$ : ha·bu·tái [hɑ:butái],

hi·ba·ku·shá [hɪbɑ:kʊʃá:] 「被爆者」

(11) 交替強勢規則

ha·bu·tái → há·bu·tài, hi·ba·ku·shá → hi·bá·ku·shà

(10)と(11)のアクセントを見ると、日本語にも英語と同じ強勢規則が適用されていると思われる。しかし、日本語に適用される強勢規則は英語と同じものではなく、外国語に適用されるものである。(10d)で強勢が付与され、(9)で第1強勢が2音節前に移動する規則は、日本語には適用されていないと考える。英語話者は日本語のスペリングを見て、英語とは異なるアクセント規則を適用しているのであるが、同時に、重音節に強勢を付与し、後ろから2番目の音節が強勢を取れない音節であれ

ば、その前の音節に強勢を付与するという英語の原則は日本語に対しても適用している。

本章では日本語へのアクセントは、そのスペリングから予想される音声に付与していると考え。従って、わずらわしい発音記号を省略して日本語のスペリング、つまりヘボン式ローマ字にアクセントを付与することにする。日本語では <a> と <o> は短母音であるが、アクセントが付く場合には [a:] と [ou] に発音されるので、重音節と見なされている。日本語への強勢規則は、例外も多いが大まかに次のようになる。なお、< > はスペリング、つまり書記素を表わしている。

#### (12) 日本語への主強勢規則

- a. <VV> と <VN> の音節に強勢を付与する。
- b. 後ろから 2 番目の音節に強勢を付与する。
- c. 後ろから 2 番目の音節の母音が <a> か <o> でないなら、その前の音節に強勢を付与する。

(12a)の規則は、スペリングの上での重音節に強勢を付与するというものである。一方、(12b)によって、語末に第 1 強勢を取る語が少なくなる。(12b)によって後ろから 2 番目の音節にアクセントのある語が多くなると同時に、これは 2 音節語の強勢を強弱パターンにするものでもある。(12a) と(12b)の規則の間には矛盾する面があるが、そのことについては後で触れる。(12c)は後ろから 2 番目の音節が <i>, <u>, <e> であれば、その前の音節が強勢と取るというものである。英語話者はこれらの母音を強勢の付かない母音と考え、América [əmérikə] や cínema [sinəmə] のように後ろから 3 番目の音節に強勢を付与している。

(12) の規則は (6) の英語の強勢規則に相当するものであるが、更に第 1 強勢を付与する (11) の交替強勢規則が日本語に必要であろうか。筆者は ha·bu·tái を há·bu·tài に、hi·ba·ku·shá を hi·bá·ku·shà に変える規則は日本語には適用されていないと考える。つまり、第 1 強

勢は、2 音節前に移動する交替強勢規則によって派生されるのではなく、(12) の強勢規則で付与されるとする。英語は強勢と弱勢を繰り返しリズムとする言語なので、第 1 強勢の 2 音節前あるいは後ろへ第 2 強勢を付与することによって、強弱強リズムを形成しているのである。第 2 強勢を付与する規則は次のようになる。

(13) 第 2 強勢付与規則

$$V \rightarrow [2 \text{ stress}] / \left\{ \begin{array}{l} \text{—— CV [1 stress]} \\ [1 \text{ stress}] \text{ CV ——} \end{array} \right\}$$

(12) と (13) の規則が適用される語を見てみよう。(14)の[→] は第 2 強勢付与規則の適用を表わし、[S] は音節、[#] は語境界を意味する。また、強勢に直接関係のない頭子音は、次の強勢規則では省いてある。

(14) 強勢規則の適用

- a. <VV>: ki·béi「帰米二世」、Ni·séi「二世」、San·séi「三世」、Ya·yói,  
zái·ba·tsu → zái·ba·tsù
- <VN>: ki·rín「麒麟」、pa·chín·ko「パチンコ」
- b. <V>·S#: Bun·rá·ku「文楽」、ga·gá·ku「雅楽」、hi·bá·chi「火鉢」、ka·rá·te、ki·mó·no「着物」、kó·an「(禅宗の)公案」、mi·ká·do「帝」、nun·chá·ku「[沖縄方言]ヌンチャク」、sa·tó·ri「悟り」、Shín·gon、shó·gun「将軍」、ta·tá·mi「畳」、tsu·ná·mi「津波」、i·ke·bá·na → ì·ke·bá·na「生け花」、ka·ke·mó·no → kà·ke·mó·no「掛け物」、ka·mi·ká·ze → kà·mi·ká·ze「神風」、sha·ku·há·chi → shà·ku·há·chi「尺八」、su·ki·yá·ki → sù·ki·yá·ki、to·ko·nó·ma → tò·ko·nó·ma「床の間」、Yo·ko·há·ma bean → Yò·ko·há·ma bean「[植物]ハッショ

ウマメ」

- c. V·<V>·S#: á·ke·bi、Bú·shi·do 「武士道」、ká·tsu·ra tree、  
né·tsu·ke、sá·shi·mi 「刺身」、  
dái·my·o → dái·my·ò、há·ni·wa → há·ni·wà 「埴輪」、  
hi·bá·ku·sha → hi·bá·ku·shà、  
Ku·ró·shi·o → Ku·ró·shi·ò 「黒潮」、  
sá·mi·sen → sá·mi·sèn、tó·ri·i → tó·ri·ì 「鳥居」

(14a)は重音節に強勢が付与される例である。(14b)は後ろから2番目の音節に強勢が付与される例である。(14c)は後ろから2番目の母音が <i>, <e>, <u> であれば、その前の音節に強勢が付与される例である。1音節語(bón「盆」、gó「碁」、tái「鯛」など)と最後の音節が <CV> である2音節語(dó·jo「道場」、géi·sha「芸者」、há·bu「ハブ」、sá·ke「酒」、sú·mo「相撲」など)は、強勢の位置に議論の余地がないので、(14)には載せていない。

(14a) の Sanséi のように CVC と CVV の音節が連なる2音節語では、CVV に優先的に強勢が付与されている。Sansei の発音は [sa:nséi] なので、その発音からは超重音節の CVVN に強勢が付くはずである。このことから(12)の主強勢規則がスプリングに適用される規則であることが分かる。(14a)の záibatsu は規則(12b)よりも(12a)を優先したものであり、pachínko は、chin が <CVN> であるので規則(12a)を(12c)に優先した強勢である。(14b)の kóan、shíngon、shógun は語末が CVN の重音節であるが、強勢は前の音節に付いている。これは2音節語は、語末が CVV でない限り強弱パターンを取ることを示している。なお、(14a)の kirín が弱強パターンなのは、<ki> の <i> が第1強勢の付与され難い母音だからであろう。この発音が [kaírin] であれば、アクセントは káirin となる。

Oxford に [ku:roʃi:wo] 「黒潮」という発音が載っているが、『研究社』では例外であり、『研究社』では[kuróʊjiðu] 「黒潮」である。『研究社』

に載っている(14c)の語は、後ろから2番目の母音は英音の [bú:ʃi:dəu] 「武士道」の [i:] 以外はすべて短母音である。このことから、(12b)を「後ろから2番目の重音節に強勢を付与する」とする方が、英語の強勢規則と共通性があるといえる。しかし、『研究社』にはないが、*Webster* や *Oxford* ではうしろから2番目の強勢を取らない <i> と <u> が長母音に発音される語がある。

- (15) nétsuke 「根付け」: 研究社 [néts(u)ki], Oxford [nétsu:keɪ]  
 dáimyo 「大名」: 研究社 [dáimjòu], Webster [dáimi:òu]  
 tórii 「鳥居」: 研究社 [tó:ri:], Webster [tóuri:]

(15)の例は、開音節 (CV) が重音節に発音されるという英語の一般的な原則に適ったものである。特に顕著に表れるのが語末の開音節である。

二つの強勢パターンを取る語も次のように多い。

(16) 二つの強勢パターンのある語

a. (12a)と(12b)の適用

bonsái~bónsai, Nip·pán~Níp·pon 「日本」

b. (12a)と(12c)の適用

sa·mu·rái → sà·mu·rái~sá·mu·rai → sá·mu·ràì

c. (12b)と(12c)の適用

ka·bú·ki~ká·bu·kì 「歌舞伎」、sát·su·ma~sàt·sú·ma、  
 sep·pú·ku~sé·pu·kù 「切腹」、tem·pú·ra~tém·pu·ra  
 [témpərə] → tém·pu·rà [témpərà:] 「てんぷら」、  
 tsù·tsu·ga·mú·shi~tsù·tsu·gá·mu·shi

(16a)の bónsai と Nípon の強勢は、語末の音節が重音節であっても、2音節名詞では英語の *record* や *project* のように強弱パターンになる傾向があることを示している。(16b)の sámurai は、語末が CVV 音節であ



るので、本来ならば語末に第1強勢があるはずである。語末の脚韻 (ai) を強勢の対象からはずすのは、英語の韻律外性 (extrametricality) の考え方に似ているが、これは(12a)の規則よりも(12c)の規則を優先しているためである。sámurai や hábutai のような3音節語にこの傾向が見られる。(12)の三つの規則の適用優先順位は、一般的には(a), (b), (c)であるが、語によっては優先順位が変わることがあるということが(16)の例から分かるであろう。

(16c)の語は、後ろから2番目の母音が <u> のものである。このことから(12c)の「...<a> か <o> でなければ、...」を「...後母音でなければ、...」と <u> を含む規則に変えた方が良いとする考えもあるであろう。しかし、後ろから2番目の母音 <u> に全く強勢の付与されない語も nétsuke, hábutai, hibákusha, sámurai のようにある。従って、<u> については、強勢が付くこともあるということになる。以上のことから強勢付与の優先順位を示すと、概して次のようになるであろう。

#### (17) 強勢付与の優先順位

VV > VN > a, o > u > i, e

(17)の母音の優先順位は、<e>を除けば音の聞こえ度と一致する。英語の feed [fi:d] と food [fu:d] を比べてみると、[i:] よりも [u:] の方が聞こえ度が高い。<e> は <u> よりも聞こえ度が高いにもかかわらず強勢が付かず、ákebi[á:kəbi:] のようにあいまい母音に発音されている。『研究社』には例が少ないので Webster の発音を見てみると、ákeki [á:kəki:], Sásebo [sú:səbou] 「佐世保」のように3音節語ではあいまい母音になっている。子音間の後ろから2番目の<e>は、英語話者には /ɛ/ ではなくて、/ɪ/ あるいは /ə/ と認識されているのであろう。このことから <e> は一番強勢の付きにくいスプリングとなっている。なお、聞こえ度の概念は、Ladefoged (1975:220)による。

ここで多少話がそれるが、(17)の強勢付与の優先順位が、日本語の母音の聞こえ度と必ずしも一致していないことを述べよう。弘前方言をみながら、音節や母音とアクセントの関係を見ていく。次の(18)は、2音節語のアクセント移動を表わしている。母音に付いている [\*] はアクセント核を表わす。

(18) 弘前方言の2音節語のアクセント

- a. VV#:  $\bar{b}aree \rightarrow bar\bar{e}e$  「バレー」、 $\bar{h}awai \rightarrow haw\bar{a}i$  「ハワイ」、 $\bar{k}arei \rightarrow kar\bar{e}i$  「鰈」、
- b. VN#:  $\bar{m}ikan \rightarrow mik\bar{a}n$  「みかん」、 $\bar{n}ishin \rightarrow nish\bar{i}n$  「鯿」、 $\bar{s}eken \rightarrow sek\bar{e}n$  「世間」
- c. <a>#:  $\bar{a}sa \rightarrow as\bar{a}$  「朝」、 $\bar{i}ma \rightarrow im\bar{a}$  「今」、 $\bar{k}ama \rightarrow kam\bar{a}$  「鎌」
- d. <o>#:  $\bar{k}umo \rightarrow kum\bar{o}$  「雲」、 $\bar{n}eko \rightarrow nek\bar{o}$  「猫」
- e. <e>#:  $\bar{a}me \rightarrow am\bar{e}$  「雨」、 $\bar{a}se \rightarrow as\bar{e}$  「汗」、 $\bar{k}ame \rightarrow kam\bar{e}$  「亀」
- f. <i/u>#:  $\bar{a}yu$  「鮎」、 $\bar{h}ashi$  「箸」、 $\bar{h}ebi$  「蛇」、 $\bar{s}aru$  「猿」、 $\bar{s}eki$  「堰」、 $\bar{s}usu$  「煤」

(18a,b)は、重音節にアクセントが付与されている例であり、(12a)の規則と似ている。(18c,d,e)では <a,o,e> のように開口母音にアクセントが付与され、(18f)では <i,u> のような閉口母音にはアクセントが付与されないことを示している。母音の開口度と聴覚認知レベルについて、城生(1998:79)は、母音の聴覚情報処理には次のような階層差が存在していると述べている。

(19) ア>オ>エ>イ>ウ

(19)の階層は、聞こえ度とほぼ一致するものである。城生(1998:78)によると、「ウ」が聴覚印象レベルで最も「暗い、または鈍い音」であり、「小さい音」である。そのことから、aisukuriimu ‘icecream’ 「アイスクリ

ーム」のような外来語の挿入母音として、<u> が一番多く選ばれていると言えよう。低ピッチの高母音は、[k<sub>o</sub>suri]「薬」、[k<sub>o</sub>isen]「汽船」のように、無声子音の間では無声化するが、『研究社』には [nétski]「根付け」、[skijá:ki]「すきやき」のように [u] を発音しない音声表記もある。英語話者にとっては、無声音の [u] は削除した方が発音しやすいし、無いように聞こえるのであろう。(17)と(19)の階層を比べてみると、英語辞典の中の日本語の発音は、基本的には英語の発音規則によると言える。

弘前方言の 3 音節語のアクセントを見てみよう。次の S は語末の音節を表わす。

(20) 弘前方言の 3 音節語のアクセント

- a. VV#: ok<sup>\*</sup>ugai → oku<sup>\*</sup>gāi「屋外」、ok<sup>\*</sup>ūnai → okunāi「屋内」、tatē<sup>\*</sup>mae → tatemāe「建て前」、terā<sup>\*</sup>nai → teranāi「手習い」
- b. VN#: kage<sup>\*</sup>zen → kagezē<sup>\*</sup>n「陰膳」、kake<sup>\*</sup>zan → kakezā<sup>\*</sup>n「掛け算」、suzū<sup>\*</sup>ran → suzurā<sup>\*</sup>n「すずらん」、takū<sup>\*</sup>an → takuā<sup>\*</sup>n「たくあん」
- c. <a,o>S#: ā<sup>\*</sup>sahi → asā<sup>\*</sup>hi「朝日」、hā<sup>\*</sup>tachi → hatā<sup>\*</sup>chi「二十歳」、inō<sup>\*</sup>chi → inō<sup>\*</sup>chi「命」、iraku → irā<sup>\*</sup>ku「イラク」、jikoku → jikō<sup>\*</sup>ku「時刻」、kā<sup>\*</sup>rasu → karā<sup>\*</sup>su「烏」、sā<sup>\*</sup>zae → sazā<sup>\*</sup>e「サザエ」、tsū<sup>\*</sup>baki → tsubā<sup>\*</sup>ki「椿」
- d. <i,u>S: ā<sup>\*</sup>jia「アジア」、ā<sup>\*</sup>uto「アウト」、kā<sup>\*</sup>iko「蚕」、kā<sup>\*</sup>buto「兜」、sū<sup>\*</sup>mika「住处」、zā<sup>\*</sup>kuro「ざくろ」、
- e. <V>S#: mō<sup>\*</sup>miji → momi<sup>\*</sup>ji「紅葉」、tā<sup>\*</sup>nuki → tanū<sup>\*</sup>ki「狸」

(20a~d)を見る限りでは、3 音節語も 2 音節語と同じく、開口母音にアクセントが移動しているのであるが、(20e)の語では <i,u> の閉口母音にアクセントが付いている。これは弘前方言には、3 音節以上の語に対して、(12b)のように後から 2 番目の音節にアクセントを付与するという規

則が働いていると考えられる。もしそうであれば、弘前方言のアクセント付与には、(12)に挙げた日本語への主強勢規則と同様の規則が適用されていることになる。

話を英語辞典の中の日本語の発音に戻そう。規則(12)が適用されず、例外と思われる語に次のようなものがある。

- (21) a. cha·no·yú → chà·no·yú「茶の湯」、u·ki·yo·é → u·kì·yo·é  
「浮世絵」  
b. Ya·má·to·e → Ya·má·to·è「大和絵」  
c. chó·ro·gi → chó·ro·gì [tʃ̥:ro(u)gì:]「[植物]チョロギ」、  
ró·ma·ji「ローマ字」、wá·sa·bi「[植物]ワサビ」  
d. ítai·ítai「イタイイタイ病」、súkiyáki [sú:kijæki](英音)  
e. há·bu·tai → há·bu·tài

(21a)の chànoyú は「茶の」と「湯」に分けたのであろう。ちなみに *Webster* には chánoyù と chànoyú の二つのパターンがある。ukiyo·é も「絵」の前にあるハイフンの境界から、二つに分けたと考えられる。そうすると、今度は(21b)の Yamáto·èの説明が難しくなる。一貫性はないが、Yamáto·è「大和絵」の方は Yamáto「大和」という既存の固有名詞があり、それに -e「絵」が付加して新しい語が形成されたと考える。(21c)の rómaji は英語 Rome への類推であろう。chórogì と wásabi は、原語のアクセント「チョロギ」、「ワサビ」に従ったものであろう。(21d)の ítai·ítai と súkiyáki は、強弱パターンを取ったものである。ちなみに、第6版には sùkiyáki のアクセントしか載っていない。(21e)の há·bu·tai は前にも述べたが、語末の重音節に第1強勢を付与してある。

日本語への音節区分は、原則的に仮名文字に従っていると述べたが、強勢付与も原語のスペリングに対して行なっている。スペリングと言っても、英語話者が文字から認識するのは英語の音声であるので、スペリングと音声とのつながりが問題となる。英語話者が入力とするのは原語

のスペリングであるので、出力となる音声は、発音の原則に適う限り正しいものと認識される。次に『研究社』の ikebana「生け花」と sukiyaki「すき焼き」の発音記号を挙げてみる。

- (22) a. ikebana [iːkeɪbá:nə], [i:keɪbá:nə], [iːkəbá:nə], [iːkɪbá:nə]  
 b. sukiyaki [skijá:ki], [sùkɪjæki], [sùkijá:ki], [sù:kɪjæki],  
 [sù:kijá:ki], [sùkɪjá:ki]

上に挙げた発音の他に、[i:kəbá:nə], [i:kɪbá:nə] や [skɪjæki], [sù:kɪjæki] のように、その他いろいろな発音が英語話者によって発せられるであろう。それらが英語の規則に適った発音であれば、すべて正しいことになる。以上のことから、日本語への強勢付与と発音は、原語のスペリングを入力としていると言える。

### 3.3.2 第5版と第6版のアクセント付与

前節、3.3.1 で、日本語のアクセント付与には、「日本語への主強勢規則」と「第2強勢付与規則」が適用されることを述べた。ここに再度挙げてみる。

(23) = (12) 日本語への主強勢規則

- <VV> と <VN> の音節に強勢を付与する。
- 後ろから2番目の音節に強勢を付与する。
- 後ろから2番目の音節の母音が <a> か <o> でないなら、その前の音節に強勢を付与する。

(24) = (13) 第2強勢付与規則

$$V \rightarrow [2 \text{ stress}] / \left\{ \begin{array}{l} \text{—— CV [1 stress]} \\ [1 \text{ stress}] \text{ CV ——} \end{array} \right\}$$

上の二つの規則は、(14) にも挙げてあるが次のように適用される。

(25) 強勢規則の適用

a. <V̇V> : Ki·béi 「帰米二世」、Ya·yói,

zái·ba·tsu → zái·ba·tsù

<V̇N> : ki·rín、pa·chín·ko

b. <V̇>·S# : ga·gá·ku、ki·mó·no、

sha·ku·há·chi → shà·ku·há·chi

c. <V̇>·<V>·S# : á·ke·bi、né·tsu·ke

hi·bá·ku·sha → hi·bá·ku·shà

(23) ～ (25) はすでに述べた第 5 版のものであるが、アクセントの付与が第 5 版と第 6 版で変わった点について述べてみよう。主強勢規則 (23b) は後から 2 番目の音節にアクセントを付与するものであり、(23c) は後から 1 番目の音節が高母音の場合は、その前の音節に強勢を付与するものである。(23c) の規則が適用される強勢パターンと適用されない強勢パターンの二つのパターンを持っている語も多い。次の語は、語末第 2 音節が高母音のものである。

(26) 語末第 2 音節高母音のアクセント

a. ai·kí·do 「合気道」(第 6 版)

b. Bú·shi·do (第 5 版)

Bú·shi·dò (第 6 版米音)、Bu·shí·do (第 6 版英音)

c. hi·bá·ku·shà (第 5 版)

hì·ba·kú·sha (第 6 版米音)、hi·bá·ku·sha (第 6 版英音)

d. sá·shi·mi (第 5 版)

sa·shí·mi (第 6 版)

e. sép·pu·ku～se·pú·ku (第 5 版)

se·pú·ku (第 6 版)

f. A•kí•ta 「秋田犬」、ì•shi•gú•ro 「イシグロ・カズオ」、No•gú•chi  
「ノグチ・イサム」、Su•zú•ki method 「鈴木バイオリン教育法」  
(以上第6版)

g. Ni•séi、San•séi (第5版)

Ní•sei (第6版米音)、Sán•sei (第6版)

(26a)~(26d) の語は、第6版で第1強勢が語末第2音節に付与されるものであり、(26f) は第6版に新しく載っている語である。第5版の語で、語末第2音節に強勢があるのは *sepúku* のみである。(26f) は固有名詞ではあるが、強勢は語末第2音節にのみ付いている。このことから、第5版では (23c) の規則が (23b) の規則に優先していたが、第6版では (23b) が (23c) に優先していると言える。(26g) は2音節語であるが、第6版では (23a) に優先して、英語の2音節名詞強勢パターンを適用している (*fémail*, *páttern*, *réport* など)。

以上のように第6版では語末第2音節にアクセントを付与する語が増えているのであるが、他の英語辞典のアクセントを見てみよう。

(27) a. *OED*: búshido

*Webster*: búshido

*ODP*: búshidò (米音)、bushído (英音)

*LPD*: Búshidò (米音)、Bushído (英音)

b. *OED*: sáshimi

*Webster*: sáshimi

*ODP*: sashími (米音)、sáshimi (英音)

*LPD*: sashími

(27)の例から、*OED* と *Webster* は第5版のように語末第3音節に強勢を付し、*ODP* と *LPD* は第6版のように語末第2と第3音節に強勢を付している。*ODP* (First published 2001) と *LPD* (First published

1990) が、*OED* と *Webster* に比べれば新しい辞典であるということから、語末第2音節強勢の傾向は、第6版に見られるように増大していると言える。

語末音節に第1強勢の付与される語が、第6版に三つ見られる。他の辞典と比べてみよう。

(28) 語末音節のアクセント

a. Bú·shi·dò (第5版)、Bù·shi·dó (第6版英音)

Bù·shi·dó *ODP* (英音)、*LDP* (英音)、『ジーニアス』(英音)

Bú·shi·dó 『ジーニアス』(米音)

b. Ya·má·to·è (第5版)、

Yà·ma·to·é (第6版米音)、Ya·má·to·è (第6版英音)「大和絵」

c. zái·ba·tsù (第5版)、zài·ba·tsú (第6版)、

zai·bá·tsu *OED, ODP*

zái·ba·tsú 『ジーニアス』

(28a) の Bùshidó のように語末の音節に第1強勢を置く発音は英音であるが、英音でも Bushído の方が主な発音である。*LPD* では、主要な発音(main pronunciation)と代替発音(alternative pronunciation)を明記しているので参考になる。他の辞典でも、二つの発音記号が載っている場合には、一般的に最初の方が主な発音であるから、Bushído が主なアクセントであり、Bùshidó は2番目に聞かれる発音ということになる。一方、『ジーニアス』は、záibatsú も含めて、語末に第1強勢を置く発音だけを記載している。この傾向は第6版にも言える。*OED* と *ODP* は zai·bá·tsu が一般的なのか、第6版の zàibatsú が多く聞かれるのか筆者には確かなデータがないので分らないが、zài·ba·tsú のように語末の音節に第1強勢のある語は例外的である。

(28b) の Yà·ma·to·é のアクセントは、第6版米音の代替発音である。語末の <e>「絵」に主強勢を付与するのは、「大和」の「絵」という意



味だからであって、ù·ki·yo·yé「浮世絵」、chà·no·yú「茶の湯」と同じ強勢パターンになる。同様に、Bùshidó も「武士の道」の意味で「道」が主要形態素だと考えられる。

Ya·má·to は *OED* と *Webster* では <ma> に強勢が付いているが、Yà·ma·to·é のように <e> が付加すると、強勢が <ya> に移動している。第5版と第6版の強勢位置の違いを見てみよう。(29d,e)の強勢は『研究社』からのものではない。

#### (29) リズムの変化

- a. u·ki·yo·é (第5版) → ù·ki·yo·é (第6版)
- b. Ya·má·to·è (第5版) → Ya·mà·to·é → Yà·ma·to·é (第6版)
- c. Yò·ko·há·ma béan (第5版) → Yó·ko·hà·ma béan (第6版)
- d. Salvàtion Ármý → Sàlvation Ármý,  
transistor rádio → trànsistor rádio
- e. Mississíppi Ríver → Míssissìppi Ríver

(29a,b) の例は、弱強弱強のパターン(第5版)から、強弱弱強パターン(第6版)へのリズム変化を表わしている。強弱弱強パターンは全体から見ると強弱強パターンである。このパターンの変化はより良いリズムへの変化であり、(29c) の英語の例のように、リズム規則(Rhythm Rule)(Liberman & Prince 1977, Kiparsky 1979, Hayes 1984, etc.)の適用されたものである。外来語である日本語に、英語の規則を適用するようになった例であるが、ゆっくり話す場合のが第5版で、速く話す場合のが第6版のリズムである。普通のスピードで話す際には、ukiyóé の <yo> や Yamàtoé の <to> がアクセントのある音節の谷間になる強弱強リズムよりも、ùkiyoé や Yàmatoé のように二つの音節が弱になり、語全体として強弱強パターンになる方が好リズムなのである。

余談になるが、2002年のサッカーのワールドカップが日本と韓国で開催されたが、その際、両国名を英語で表わすのは Korea-Japan と

Japan-Korea のどちらが韻律上良いのであろうか。Koréa-Japán /kəri:ədʒəpæn/ はアクセントのある音節の間に二つの軽音節があり好いリズムになっている。一方、Japán-Koréa /dʒəpænkəri:ə/ はアクセントのある音節の間に一つの軽音節しかなく、句全体としては強弱がはげしい。Jápan-Koréa /dʒæpænkəri:ə/ も好リズムであるが、Japán /dʒəpæn/ とはアクセントも発音も変わってしまう。Koréa-Japán は ùkiyoé や Yàmatoé とリズムが似ている。(29c)の語のアクセントは、『研究社』では *Salvátion Ármý, transístor rádio* であり、リズム規則が適用されていない。全体を名詞句と捉えるよりも、二つの語の連続と見なしている。また、Yókohàma béan のリズムは *Mississippi Ríver* と同じである。

### 3.4 発音

英語辞典の中の日本語の発音は、その母音にアクセントがあるかどうかによって決まってしまう。大方という意味は、日本語の音節が、CVの開音節であるため、強勢のない母音でありながら長母音になることがあるからである。また、米音と英音の発音にも若干の違いが見られる。まずどのような発音規則が日本語に適用されているかを調べ、続いて米音と英音の発音の違いから両言語の特徴について述べていく。

#### 3.4.1 アクセントと発音

アクセントのある母音が、長母音あるいは二重母音に発音され、アクセントのない母音が短母音に発音され、更にアクセントのある母音でも子音群の前の母音が短母音に発音されるのは、英語の一般的な規則である。(SPE78) 日本語に英語の強勢規則が適用されているのか見てみよう。まず最初に、重音節に強勢の付与されている語を挙げよう。例はすべて第6版からのものである。特に米音、英音の明記のない発音は、米音、英音の両音に共通のものである。

(30) 重音節への強勢

a. 開音節

Bú·shi·do /bú:ʃidòu/ (米音)、Bu·shí·do /buʃi:dəu/ (英音)、  
ka·bú·ki /kəbú:ki/、ká·bu·kì /ká:bukì:/ (米音)  
Sat·sú·ma /sætsú:mə/ 「ウンシュウミカン」、  
tem·pú·ra /təmpú<sup>̌</sup>rə/ (米音)、/təmpúə<sup>̌</sup>rə/ (英音)

b. 閉音節

hón·cho /há(:)ntʃou/ (米音)、/hóntʃəu/ (英音)、  
ín·rou /ínrou/ (米音)、/ínrəu/ (英音) 「印籠」、  
rén·ga /réngə/、Sát·su·ma /sætsumə/、tém·pu·rà /témpurà:/

上の例では、強勢のある母音が長母音に発音され、強勢のない母音は短母音に発音されている。第6版でこの傾向の見られる語が、次のようにいくつかある。

(31) 非強勢短母音

- a. Búshidò [bú:ʃi:dəu] (第5版英音) → /bú:ʃidòu/ (第6版米音)、  
Bu·shí·do /buʃi:dəu/ (第6版英音)  
b. fúji [f(j)ú:dʒi:] (第5版) → /fú:dʒi/ (第6版) 「富士絹」  
c. nuncháku [nu:ntʃá:ku:] (第5版) → /nántʃá:ku:/ (第6版)

(31) の例を見る限りでは、第6版では長母音に強勢が付き、短母音には強勢が付かないように修正されたように思われるが、そのような語は少なく、ほとんどの語は第6版でも母音の性質は変わっていない。それとは逆に、非強勢母音であるにもかかわらず、第6版で長母音に発音されるようになった語も次のようにある。

(32) 非強勢長母音

- a. shíngon [ʃíngan] (第5版米音) → /ʃíngə(:)n/ (第6版米音)

- b. shógun [ʃóʊgən] (第5版米音) → /ʃóʊgu:n/ (第6版米音)  
     [ʃóʊgən] (第5版英音) → /ʃóʊgu:n/ (第6版英音)  
 c. tsunámi [tsuná:mi] (第5版英音) → /(t)su:ná:mi/ (第6版米音、  
     英音)

(32) のように第6版で長母音に修正された語もあり、第6版で母音の長さについて大幅な修正があったとはいいきれない。外来語に対して、ある面では強勢のない母音を短母音に発音するという英語の音韻規則を適用しながら、他の面では母音をはっきりと発音して原語の音韻的特徴をも表わしている。

第5版と第6版で異なる母音の発音の一つに語末の <i> がある。語末の <i> は、第5版では一般的に米音は [ɪ]、英音は [i] と区別されていたが、第6版では米音、英音共 /i/ になっている。第6版で英音を /i/ に変えたのは、語末では緊張母音になる英語の規則を適用したためと、[ɪ] よりも /i/ の発音の方が日本語に近いためであろう。<i> の発音を『研究社』と他の辞典で見てみよう。

### (33) 語末 <i> の発音

- a. akebi [á:kəbi] (第5版米音)、[á:kɪbɪ] (第5版英音)  
     /á:kəbi/ (第6版米音、英音)  
     obi [óubi] (第5版米音)、[óubɪ] (第5版英音)  
     /óubi/ (第6版米音)、/óubi/ (第6版英音)「帯」  
 b. obi /óubi/ *OED*, /óubi/ ~ /óubɪ/ *Webster*, /óubi/ *ODP*, /óubi/ *LPD*

(33)の例から、強勢のない語末の <i> は、最近の辞典では [ɪ] と表記されていると言えよう。語末の母音の発音をアクセントのある場合とない場合で見てみよう。次の語で特に英音の明記のないのは米音である。

(34) 語末強勢母音

- a. <i># → /i:/: chórègi /tʃɔ:rougì:/、tórii /tɔ:rii:/
- b. <u># → /u:/: chànoyú /tʃã:noujú:/、ryu /riú:/
- c. <e># → /eɪ/: nétsukè /nétsukèi/、ùkiyo-yé /ù:kiou(j)éi/
- d. <o># → /ou/(米音): Búshidò /bú:ʃɪdòu/, shàkudó /ʃã:ku:dó/ 「赤銅」  
→ /əu/(英音): Bùshido /bù:ʃɪdəu/, shákudo /ʃækudəu/
- e. <a># → /ɑ:/: hániwà /há:nɪwà:/、témpurà /témpurà:/
- f. <ai># → /aɪ/: bonsái /bounsái/、sámurai /sæm(j)urài/
- g. <ei># → /eɪ/: Ísséi /í:séi/、Kibéi /kì:béi/
- h. <oi># → /ɔɪ/: Yayôi /ja:jói/

(35) 語末非強勢母音

- a. <i># → /i/: kámi /ká:mi/ 「神」、hàrakíri /hà:rækíri/
- b. <u># → /u/: bunráku /bunrá:ku:/、shiátsu /ʃiá:tsu:/
- c. <e># → /i/ ~ /eɪ/: kákke /káeki/ ~ /ká:keɪ/  
sáke /sá:ki/ ~ /sá:keɪ/ (英音) 「酒」
- d. <o># → /ou/(米音): dójo /dóudʒou/ 「道場」、ínro /ínrou/  
→ /əu/(英音): dójo /dóudʒəu/, ínro /ínrəu/  
→ /ə/(米音): kimóno /kəmóunə/ (米音に /kəmóunou/もあり)
- e. <a># → /ə/: géisha /géiʃə/、íkebána /íkeibá:nə/
- f. <ai># → /aɪ/: bónsai /bóunsai/, ítaiítai /í:taí:taɪ/
- g. <ei># → /eɪ/: Íssei /í:seɪ/, Níseɪ /ní:seɪ/

(34)と(35)のスペリングと発音の関係をしてみると、(35)の kake /káeki/, sake /sá:ki/, kimóno /kəmóunə/ の代替発音を除いて、アクセントによって母音の発音が全く異なるのは、<i> と <a> だけである。この二つの書記素の発音は、長母音には強勢が付与されるという英語の強勢規則に順じているが、他の書記素に関しては、長母音や二重母音と強

勢の関係が明確ではない。これらの長母音や二重母音は、英語の語彙ならば当然強勢の付与されるものである。(35b)の [u:] は英語の発音に從ったものであり、語末では(34b)と同じく緊張母音になる。語末の非強勢母音 <u> は [ʊ] や [u] に発音されることはないので、日本語に対しては [u:] に発音している。英語では語末の [u:] には必然的に強勢が付与されるのに対して、(35b)の bunráku, shiátsu には強勢が付与されていない。このことから日本語の発音については、一概に、英語強勢規則が適用されたものだとは言えない。実際次のように、強勢のない <i> と <a> も語末以外では長母音に発音されている。

(36) <i> と <a> の非強勢長母音

- a. kóan /kóua:n/ (米音)、Sanséi /sa:nséi/, sashími /sa:jí:mi/ (米音)、  
Yayó*i* /ja:jó*i*/
- b. Isséi /i:séi/, Niséi /ni:séi/

日本語の場合、語のスペリング、つまり書記素に強勢が付与され、その強勢によって発音が決められているが、母音の長い短い(36)の語のように随意的であるものもある。一方、英語の強勢は、音節構造によって決められるので、スペリングに従って強勢を付与する日本語とは逆である。日本語への強勢と発音はそのスペリングから予想され、英語の強勢はその発音から予想されるのである。

### 3.4.2 米音と英音

米音と英音の違いを第5版と第6版を比べて見てみよう。<a> が米音で /ɑ:/ に発音され、英音で /æ/ に発音される語は第5版にもいくつかあるが、第6版では次の(37a)に見られるように、両音の違いが一層顕著になっている。しかし、一方では、両音に違いのない語も多く、(37b)～(37d) は第5版と第6版の両方に見られる発音である。

(37) <a> の発音

a. 米音 /ɑ:/、英音 /æ/

- 1) 第5版に米音、英音共 [ɑ:]と記載されている語  
kamikaze /kɑ:məká:zi/ (米音)、/kæmíká:zi/ (英音)  
koan /kóuɑ:n/ (米音)、/kéuæn/ (英音)  
sashimi /sɑ:ʃi:mi/ (米音)、/sæʃi:mi/  
shakudo /ʃɑ:ku:dóu/ (米音)、/ʃæku:dəu/ (英音) (第6版新出語)  
shiatsu /ʃiá:tsu:/ (米音)、/ʃiætsu:/ (英音) (第6版新出語)  
Yamato-e /jɑ:ma:touéi/ (米音)、/jæmætəuèi/ (英音)
- 2) 第5版に米音、英音共 [æ] と記載されている語  
harakiri /hɑ:rəkíri/ (米音)、/hærəkíri/ (英音)
- 3) 第5版も米音 [ɑ:]、英音 [æ] と記載されている語  
kakemono /kɑ:kəmóunou/ (米音)、/kækíméunəu/ (米音)

b. 米音、英音共 /ɑ:/の語

akebi /á:kəbi/, Bunraku /bunrá:ku:/, chanoyu /tʃɑ:noujú:/,  
habu /há:bu:/ 「ハブ」、habutae /há:bətài/, haniwa /há:nɪwà:/,  
hibachi /hibá:tʃi/, ikebana /kerbá:nə/, kaki /ká:ki/ 「柿」、  
katsura /ká:tsərə trì:/, Kawasaki disease /kɑ:wəsá:ki dizi:z/  
「川崎病」、mikado /məká:dou/, origami /ɔ(:)rigá:mi/ 「折り紙」、  
raku /rá:ku:/ 「楽焼き」、sake /sá:ki/, shakuhachi /ʃɑ:kuhá:tʃi/,  
wasabi /wá:səbi/, Yayoi /ja:jói/

c. 米音、英音共 /ɑ:/ と /æ/ の語

kakke /ká:ki/ ~ /kéke/, tatami /ta:tá:mi/ ~ /tætá:mi/,  
yagi /já:gi/ ~ /jægi/ 「八木アンテナ」

d. 米音、英音共 /æ/ の語

karaoke /kærióuki/ 「カラオケ」 (第6版新出語)、  
samisen /séməsèn/, samurai /sém(j)urài/, Satsuma /sétsumə/

e. 米音 /ɑ:/、英音 /ɑ:/ と /æ/ の語

sukiyaki /sù:kijá:ki/ (米音)、/sù:kijá:ki/ ~ /sùkijæki/ (英音)、

tanka /tá:ŋkə/ (米音)、/tá:ŋkə/ ~ /tæŋkə/ (英音、

第5版に /tæŋkə/ なし) 「短歌」

f. 米音 /æ/ と /ɑ:/、英音 /æ/ の語

yakitori /jæ:kitóri/ ~ /jɑ:kitóri/ (米音)、/jækitóri/ (英音)

「焼き鳥」(第6版新出語)

(37a) の例を見ると、米音は /ɑ:/ に、英音は /æ/ にと区別の方向に向かっているように思えるが、他の例に見られるように、米音、英音で区別されない語も多い。<a> の発音に /ɑ:/ が断然多いのは、外国語としての日本語に近い発音とみなしているからである。

<o> の語末の発音は (34d) に (35d) 挙げたので、語末以外の位置での米音と英音の違いを見てみよう。次の発音例はすべて第6版からのものであるが、特に明記している以外は第5版と同じである。

(38) <o> の発音

a. 米音 /ou/、英音 /əu/ の語

dojo /dóudʒou/ (米音)、/dəudʒəu/ (英音)

kakemono /kà:kə móunou/ (米音)、/kækə móunəu/ (英音)

karaoke /kərióuki/ (米音)、/kəriəuki/ (英音)

kimono /kimóunə/ (米音)、/kiməunəu/ (英音)

kōan /kóua:n/ (米音)、/kəuæn/ (英音)

koto /kóutou/ (米音)、/kəutəu/ (英音) 「琴」

Noguchi /nougú:tʃi/ (米音)、/nəugú:tʃi/ (英音)

obi /óubi/ (米音)、/əubi/ (英音)

romaji /róumədʒi/ (米音)、/rəumədʒi/ (英音)

Shogun /ʃougun/ (米音)、/ʃəugu:n/ (英音)

shoji /ʃóudʒi/ (米音)、/ʃəudʒi/ (英音) 「障子」

tofu /tóufu:/ (米音)、/təufu:/ (英音) 「豆腐」

tokonoma /tòukənóumə/ (米音)、/təukənəumə/ (英音)



ukiyo-ye /ù:kiou(j)ér/ (米音)、/ù:kiəu(j)ér/ (英音)

Yamatō-e /jà:mɑ:touér/ (米音)、/jæmætəuèr/ (英音)

Yokohama bean /jóukəhà:mə bí:n/ (米音)、/jóukə(u)hà:mə bí:n/ (英音)

b. 米音 /ou/ ~ /ɑ(:)/、英音 /əu/ ~ /ɔ(:)/ の語

bonsai /bóunsai/ ~ /bá(:)nsai/ (米音)、/bónsai/ ~ /béunsai/ (英音)

c. 米音 /ɑ(:)/ ~ /ɔ(:)/、英音 /ɔ(:)/ の語

Bon /bó(:)n/ ~ /bá(:)n/ (米音、第5版に /bá(:)n/ なし)、/bó(:)n/ (英音)「盆」

hokku /hó(:)ku:/ ~ /há(:)ku:/ (米音)、/hóku:/ (英音)「発句」

origami /ɔ(:)rigá:mi/ ~ /à(:)rigá:mi/ (米音)、/ɔ(:)rigá:mi/ (英音)

d. 米音 /ɑ(:)/、英音 /ɔ/ の語

honcho /há(:)ntʃou/ (米音)、/hóntʃəu/ (英音)

Nippon /nɪpá(:)n/ (米音)、/nípɒn/ (英音)

Shingon /ʃíŋgɑ(:)n/ (米音)、/ʃíŋgɒn/ (英音)

e. 米音、英音共 /ɔ:/ の語

chorogi /tʃɔ:rougì:/, Fujimori /fù:dʒimó:ri/「フジモリ(ペルー大統領)」(第6版新出語)、satori /setó:ri/、torii /tó:rii:/,

yakitori /jæ:kitó:ri/ (第6版新出語)、zori /zó:ri/「草履」

(38a) の語のように、<o> は /ou/ と /əu/ に発音される場合が多い。

(38b) の bonsai の <o> も /ou/ と /əu/ に発音されているが、閉音節の母音 <o> が /ou/ と /əu/ に発音されるのは、英語では稀である。/ou/ と /əu/ の発音は、英語の音節構造を無視した日本語のスペリング <o> に対する発音である。英語では bone /boun/, bony /bouni/, bonus /bounəs/ のようにスペリングが <onV> の語は <o> を /ou/ と発音するが、bond /bɑ(:)nd/ (米音)、/bɒnd/ (英音)、bonfire /bá(:)nfàɪə/ (米音)、/bónfàɪə/ (英音)、bonnet /bá(:)nɪt/ (米音)、/bónɪt/ (英音) のように、スペリングが <onC> の語は <o> を /ou/ や /əu/ には発音しない。

(38b)～(38d) では、米音と英音の違いが /ɑ(:)/ と /ɒ/ にあるが、これは英語に対する米音と英音の違いでもある。(38e)は <or> の発音であるが、米音と英音が同じである。<or> の発音として /ɔ:r/ のみを載せているのは第6版になってからである。第5版では、英音は [ɔ:] のみであるが、米音には次の(39)のように [ɔ:] と [o:] の二つの発音が記載されていた。[o:] の発音を第6版から削除したのは、(39b) の英語の発音にも同様に見られる。

(39) 第5版と第6版の <or> の発音

a. 日本語

chorogi [tʃɔ:ro(u)gi:] ~ [tʃɒ:ro(u)gi:] (第5版米音)

/tʃɔ:ro(u)gi:/ (第6版)

satori [sətɔ:ri] ~ [sətɒ:ri] (第5版米音)、/sətɔ:ri/ (第6版)

torii [tɔ:ri:] ~ [tɒ:ri:] (第5版米音)、/tɔ:ri:/ (第6版)

zori [zɔ:ri] ~ [zɒ:ri] (第5版米音)、/zɔ:ri/ (第6版)

b. 英語

door [dɔə] ~ [dɒə] (第5版米音)、/dɔə/ (第6版米音)

more [mɔə] ~ [mɒə] (第5版米音)、/mɔə/ (第6版米音)

store [stɔə] ~ [stɒə] (第5版米音)、/stɔə/ (第6版米音)

アメリカ英語には [oə] の発音は現に存在しているのであるが、それを方言あるいは非標準的発音とみなし、第6版から削除したのであろう。それと同じ理由で日本語の [o:] の発音も削除したと思われるが、第1の理由は [o] の長母音 [o:] の発音は英語話者にとって難しいことにある。door を [dɔə] と発音する人でも [do:ə] の発音は難しく、二重母音の [douə] なら発音できる。

第5版では、無声歯茎破裂音にのみ弾音の発音記号 [t̚] を用いていたが、第6版では無声音と有声音の両方の弾音 /t̚/, /d̚/ が載っている。『研究社』ではたたき音と呼んでいるが、日本語は弾音が一般的であるので、

本章では弾音と呼ぶ。『研究社』では /t/ と /d/ の二つの音声記号を用いているが両音には発音上違いはないので、二つの発音記号は日本語の音素の違いを表わすためである。弾音は米音のみであるが、次のように非強勢母音の前に起こっている。

(40) 弾音

- a. Akita /əkí:tə/, karate /kərá:tí/, koto /kóutou/, Seto (ware) /séitou (wəə)/、Shinto /ʃintou/ 「神道」、Yamato-e /jà:ma:touéí/
- b. aikido /aí:kí:dou/, judo /dʒú:dou/ 「柔道」、mikado /míká:dou/, udo /ú:dou/ 「ウド」

弾音化しない /t/ に itai-itai /i:taí:taí/ 「イタイイタイ病」があるが、[i:tʰaí:tʰaí] と帯気音に発音されるのであろう。

次に <y> の発音を見てみよう。

(41) <y> の発音

- a. 頭子音の /j/
  - sho•yu /ʃóuju:/ (米音) 「醤油」、Ya•yoi /ja:jóí/, yen /jén/ 「円」
- b. 拗音 1 音節発音
  - Ryu•kyu /riú:kju:/, To•kyo•ite /tóukiouàit/
- c. <y> の両音節化
  - Ryu•kyu /rijú:kju:/, sho•yu /ʃíju:/ (英音)
- d. <y> の再音節化
  - sho•yu /ʃru:/ (英音)
- e. <y> 削除
  - u•ki•yo•ye /ù:kiou(j)éí/

(41a)の <y> は音節頭子音(onset)であり、/j/ に発音される。(41b)は 拗音を含む音節 <CyV> が /Ci•V/ と、2 音節に発音されるものである。

(41c)の Ryukyu と shoyu の発音は、<y> を二つの音節に結びつけたものである。<y> は頭子音では /j/ に発音され、核音(nucleus)では /i/ に発音される。

英語は /u/ の前に /j/ を挿入する発音があるが、日本語にも適用されている。

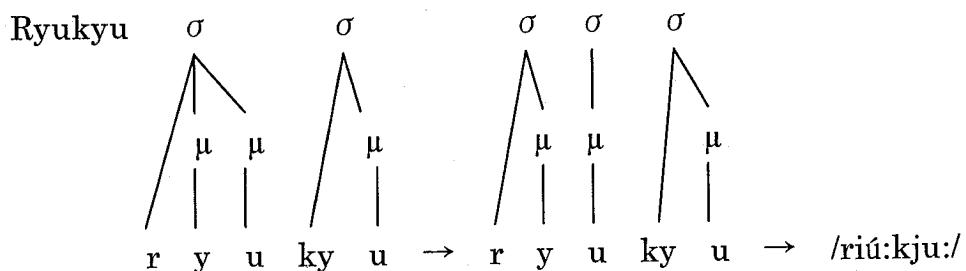
(42) /j/ 挿入

fu・ji [fjú:dʒi:] (第5版)、/ fú:dʒi/ (第6版)、sa・mu・rai /sém(j)urài/、  
fu・ton /fjú:ta(:)n/ 「布団」(第6版新出語)

(42)の語は /j/ が /u/ の前で随意的に挿入されているが、fuji は第6版では /j/ が挿入されない。/j/ の挿入は、例えば英語の fuze /fju:z/ や Samuel /sémjuəl/ のような語への類推であろう。

Hayes(1989) のモーラ音韻論(moraic phonology)に従い、/i/ に発音される <y> をモーラとし、日本語のモーラ単位から英語の音節単位を形成する過程を表わしてみよう。(41b) の Ryukyu の <ryu> は次のように 2 音節化(bisyllabification)される。次の [σ] は音節、[μ] はモーラを表わす。

(43) <yu> の 2 音節化



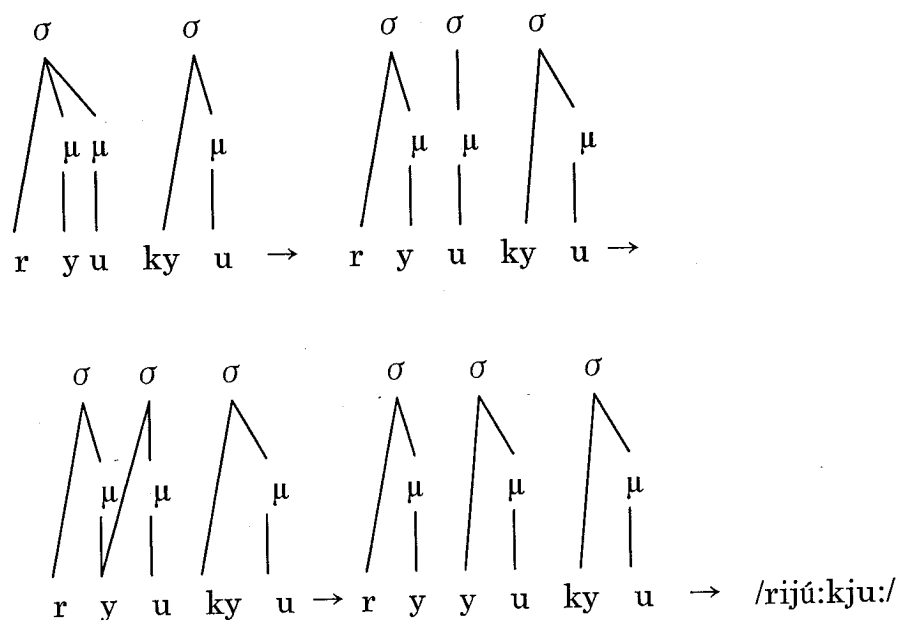
Ryu の <y> は基底形ではモーラであり、kyu の <y> は頭子音でありモーラではない。Ryu も kyu も日本語では同じ拗音でありながら、kyu が 2 音節にならないのは、原語の発音を保持しているのであろう。

第5版には2音節共拗音の [rjú:kju:] が載っている。/riú:kju:/ の発音から見ると、強勢のある /u:/ は単独の音節とみなされる。

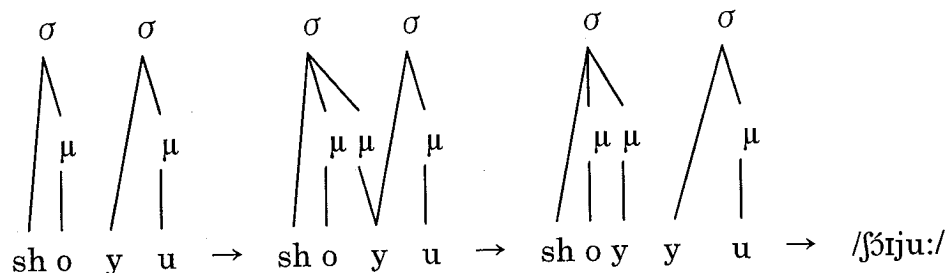
(41c) の Ryukyu と shoyu の <y> が二つの音節に結びつく両音節化(ambisyllabification)は Kahn(1976)によって提案されたものであるが、本稿ではモーラ音節論で表示する。

#### (44) <y> の両音節化

##### a. Ryukyu



##### b. shoyu



(44a)は <y> の2音節化の後に <y> の両音節化が行なわれたものである。Ryukyu の <y> は後ろの音節の頭子音となっているが、(44b)

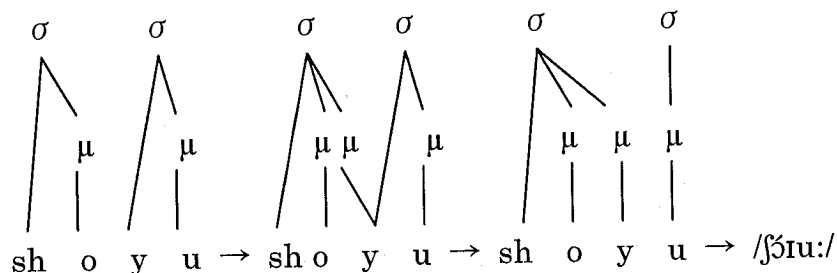
の shoyu の <y> は前の音節とも結びついている。<y> が頭子音になるか核音になるかは、母音の前にあるか後ろにあるかによる。

(42) の samurai /sæm(j)urài/ は <u> の前に /j/ を挿入しているので、同様に(41c)の Ryu・kyu /rijú:kju:/ も /j/ 挿入と考えられよう。しかし、この場合の /j/ は書記素 <y> に対応する発音とし、両音節化と考えるのが妥当であろう。

(41d)の shoyu は、/ʃru:/ と発音されているので、shoy・u と2音節に分けられる。sho・yu の <y> を左の音節に移動する再音節化(resyllabification)は、Selkirk(1982)によって示されたものであるが、それをモーラ音節論で表わすと次のようになる。

#### (45) 再音節化

shoyu



Selkirk の再音節化は、強勢のない音節の頭子音、例えば /ju/ の /j/ を左の音節に移すのであるが、移動先では音節の尾子音(coda)音になる。(45)のように核音(nucleus) <o> と結びついて二重母音になる例は Selkirk にはないが、<y> は尾子音になることはないので、前の母音と二重母音を形成する以外にない。

#### 3.4.3 アクセントのある母音の発音

本章の最後として、これまでのデータと重複するのであるが、まとめとして『研究社』に載っている日本語の母音の発音を、アクセントがあるもの(3.4.3 節)とアクセントのないもの(3.4.4 節)に分けて、外国

語である日本語に対する音節と発音の一般的特徴について見てみよう。

まずアクセントのある母音の発音から見ていく。アクセントは母音にだけ付与されるのではなく、実際には音節全体が他の音節より卓立して発音されるのだが、そのピークになるのが核音である母音であるので、本章ではアクセントのある母音を第1強勢あるいは第2強勢を取る母音とする。発音記号で、特に英音、米音の記述のないものは、どちらの言語にも同じ表記の母音である。以下に用いる発音記号は第6版からのものであるが、第5版になかったものはその旨明記している。

(46) アクセントのある母音 <a> の発音

- a. /ɑ:/: ákebi /á:kəbi/, chànoyú /tʃɑ:noujú:/, gagáku [gɑ:gú:ku:](第6版になし), hábu /há:bu:/, háníwa /há:nɪwà:/, hibáchi /hɪbá:tʃi/, hibákushà /hɪbá:kuʃɑ:/(英音), ikebána ikebána /i:kəbá:nə/, káki /ká:ki/, kámi /ká:mi/, kàmikáze /kà:məká:zi/(英音は/kəməká:zi/), karáte /kərá:ti/, sáke /sá:ki/, shàkuháchi /ʃɑ:kuhá:tʃi/, tánga /tá:ŋkə/, tatámi /tətá:mi/, tsunámi /tu:ná:mi/, wásabi /wá:səbi/
- b. /æ/: hàrakíri /hærəkiri/(英音、第5版は米音にもあり), sámisèn /sæməsèn/, sámurài /sæm(j)urài/(第5版には /sá:murài/ もあり), sátsuma /sætsumə/
- c. /ɑ:/ ~ /æ/: kákke /kæki~ká:kei/

(46)の例から、強勢のある <a> は、ほとんど /ɑ:/ に発音されると言っても良い。(46b)の /æ/ の発音は、sam·i·sen, sat·su·ma のように、強勢音節を CVC と捉えているからである。(46c)の kakke と(46b)の samurai (第5版) には /æ/ と /ɑ:/ の二通りの発音があるが、これは英語話者が音節をどのように捉えているかによる。kak·ke の <a> は、スプリングからは短母音の /æ/ にしか発音されないのであるが、

/ka:kei/ という発音がある。子音群を無視して ka・kei と考えたのである。『研究社』には、hock・ey [há(:)ki], bot・tem [ba(:)təm] の表記があることから、/a/ は長母音に発音されると考えるべきであろう。ちなみに ODP には [háki] (米音)、[hɒki] (英音) と [bádəm] (米音)、[batəm] (英音) の短母音しか記載されていない。

(47) アクセントのある母音 <i> の発音

- a. /i:/ ítaiítai /í:taí:taí/, kábukì /ká:bukì:/ (米音), tórii /tɔ́(:)rii:/,  
ukìyo-é /u:kì:jo(u)(j)éi/
- b. /ɪ/: níppon /nípan/, Shínto /ʃíntou/, kirín /ki:rín/, ínro [ínrou]
- c. /i:/~ /ɪ/: ìkebána /ì:keibá:na/~ /ìkeibá:na/,  
shíngon /ʃi:ngan/~ /ʃíngan]

(47)の語で、後から2番目の音節に強勢が付与されているのは2音節語である。これは、<i> は強勢の付与され難い母音であることを意味する。(47)の発音から、強勢のある <i> が開音節であれば /i:/ と発音され、Nip・pon, Shin・to のように <i> が閉音節であれば /ɪ/ に発音されると言える。ところが Shingon には /ʃi:ngan/ の発音もある。<in> が /i:n/ に発音されているのは、kakke 同様、閉音節を無視して強勢のある母音を長母音に発音していると考えられるべきであろう。そうすると、強勢のある母音は、閉音節であっても長母音に発音するという規則が、外国語である日本語に働いていると言える。大したことではないが、(47c)の Shingon の <n> が軟口蓋音 /ŋ/ になっていない。Tanka /tá:ŋkə/, renga /réŋgə/, pachinko /pətʃíŋkou/ の <n> が /ŋ/ に表記されているので、/ʃíŋgan/ となるべきである。

(48) アクセントのある母音 <u> の発音

- a. /u:/: hìbakúsha /hì:bəkú:ʃə/ (第6版米音のみ), júdo /dʒú:dou/,  
Ryúkyu /ri(j)ú:kju:/, satsúma /sætsú:mə/, súmo /sú:mou/,



súshi /sú:ʃi/ 「寿司」, tsùtsugamúshi disease

/(t)sù:tsugə́mú:ʃi/, údo /ú:dou/, zàibatsú [zàiba:tsú:]

b. /u/: tempúra /tempúra/

c. /u:/ ~ /u/: Búshidò /búʃidòu/ ~ /bú:ʃidòu/ (第6版の英音は/u/),  
kabúki /kəbú:ki/ (第5版に [kəbúki] あり)

(48)の /u:/ と /u/ の発音も、語の音節の区分にある。(48a)の satsuma と(48c) kabuki には、<u> に強勢が付かない /sætsumə/ と /ká:buki/ という発音もある。強勢のある <u> は通常 /u:/ と発音されるのであるが、(48b)の tempúra には /tempúra/ という発音はない。これは英語では、<u> が cúre /kjʊə/, cú·ri·ous /kjúəriəs/, púre /pjʊə/, pú·ri·ty /pjúəri·ty/ のように、/r/ の前では弛緩母音に発音されるためである。Búshidò /búʃidòu/ の /u/ の発音は、英語の búsh·el /búʃəl/ のように CVC 音節とみなした発音である。

(49) アクセントのある母音 <e> の発音

- a. /ɛ/: nétsuke /nétsuki/, rénga /réngə/, sámisèn /səməsèn/,  
sén /sén/ 「銭」, séppuku [sépu·ku:] (第6版になし), témpura  
/tém·pura/, yén /jén/, Zén /zén/ 「禅」
- b. /eɪ/: nétsukè /nétsukèi/
- c. /eɪ/ ~ /ɛ/: Séto /sé·təu/ ~ /sétou/ 「瀬戸焼」

(49)の例から、強勢のある <e> は、CVC の閉音節では /ɛ/ と発音されることが分かる。nétsukèの語末の <e> が /eɪ/ に発音されるのは、開音節だからである。一方、Seto の <e> に二通りの発音があるのは、開音節とみなすか閉音節とみなすかによる。

短母音の /ɛ/ は、第5版では [e] と表記されていた。/e/ と /ɛ/ は共に中前舌母音 (mid front vowel) であるが、別々の音素である。両音は前舌部の高さ、つまり口の開きが異なる音なので、筆者は別の音声記号

を用いることに賛成である。まだ両音を区別して表記していない辞書が多いのであるが、これは両音には、二重母音と短母音という違いがあるので、同じ音声記号でも問題がないということであろう。/eɪ/ は無声破裂音の前では短音化して /e/ と発音されることがある。例えば *carmake* /kɑ̃:mèrk/ 「自動車製造」、*roommate* /rú:mèt/ 「ルームメイト」は普通のスピードで話すと /kɑ̃:mèrk/, /rú:mèt/ となる。そうすると *carmech* /kɑ̃:mèrk/ 「自動車修理工」、*mech=mechanic*、*roomette* /ru:mét/ 「小部屋」と区別する必要性がでてくる。

日本語の五つ目の母音 <o> の発音を見ていこう。(50a)の米音と英音の違いについては前に述べている。

(50) アクセントのある母音 <o> の発音

- a. /ou/(米音) ~ /əu/(英音): *dáimyo* [dái.mi.ðu] ~ [dái.mi.əu] (第6版は *myo* にアクセントなし), *dójo* /dó.udʒou/ ~ /dó.udʒəu/, *go* /góu/ ~ /gəu/,  
*kàkemómo* /kà:kimó.unou/ ~ /kækimó.unəu/, *kimóno* /kimó.unou/ ~ /kimó.unəu/, *kóan* /kó.uan/ ~ /kéu.æn/,  
*kuróshiò* /kuró.ʃiðu/ ~ /kuró.ʃi.əu/, *rómaji* /ró.umədʒi/ ~ /ré.umədʒi/, *shóji* /ʃó.udʒi/ ~ /ʃə.udʒi/, *tófu* /tó.ufu:/ ~ /té.ufu:/,  
*tòkonóma* /tò.ukənó.uma/ ~ /tə.ukənə.uma/
- b. /ɔ(:)/: *bón* /bó(:).n/
- c. /ɑ/: *nippón* /nɪ.pán/ (第5版、6版米音)
- d. /ou/ ~ /ɑ/: *bónsai* /bó.unsaɪ/ ~ /bá.unsaɪ/ (第5版、6版米音)
- e. /ɔ:/ ~ /o:/: *chórogì* /tʃó.ro/ə(u)gì:/ ~ [tʃó.ro(u)gì:], *satóri* /sətó.ri/ ~ [sətó.ri], *tóri* /tó.ri:/ ~ [tó.ri:], *zóri* [zó.ri] ~ [zó.ri]  
 (以上 第5版米音。第6版には [o:] なし)
- f. /ɔ(:)/ ~ /ɑ/: *hókku* /hó(:).ku:/ ~ /há.ku:/ (第5版、6版共米音)

(50)の例に見られるように、<o> は /ou, əu, /ɔ(:)/, /ɑ/, /o:/ の4種類に発

音されている。一般的に、開音節の <o> は米音では /oʊ/, 英音では /əʊ/ であり、閉音節の <o> は米音では /ɑ/, 英音では /ɔ:/ である。(50d)の bonsai のように、強勢のある <o> は音節構造に関係なく、[oʊ]と発音されるものもある。(50e)の chorogi, satori などの <o> は、第5版では /ɔ(:)/ と /o:/ の二通りの発音がある。しかし、第6版では <or> は /ɔ:r/ と表記されている。

#### (51) アクセントのある二重母音の発音

- a. <ai> /aɪ/: bonsái /bəusáɪ/, dáimyò /dáɪmiðəʊ/, hábutài /há:bətàɪ/,  
háíku /háɪku:/, tái /táɪ/, zàibatsú /zàɪba:tsú:/
- b. <ei> /eɪ/: kíbéi /kì:bér/, níséi /ni:sér/, sanséi /sɑ:nsér/  
/eɪ/ ~ /i:/: géisha /géɪʃə/ ~ /gí:ʃə/(第5版、6版共米音)
- c. <oi> /ɔɪ/: Yayói /jɑ:jóɪ/

二重母音では、<ei> が /eɪ/ と /i:/ の両方に発音されているが、語末では /i:/ に発音される例は見当たらない。(49) の <e> も nétsukè /nétsukèɪ/, séto /sétoʊ/ のように /eɪ/ と発音されることがあり、発音からはそのスペリングが分からないことがある。ここでの二重母音は、スペリングからのものであり、発音上の二重母音ではない。

(46) ~ (50)の例から、強勢のある CV 音節の母音が長母音、あるいは二重母音に発音されているのが分かる。更に、閉音節の母音を長母音に発音する例もいくつか見られ、日本語の文字をモーラの開音節と捉えている感がある。

#### 3.4.4 アクセントのない母音の発音

アクセントのない母音の発音を見てみよう。英語との大きな違いは、日本語は強勢がないにもかかわらず、長母音、二重母音に発音されていることである。

(52) アクセントのない母音 <a> の発音

- a. /ɑ:/ gagáku [gɑ:gá:ku:](第6版になし), kóan /kóua:n/(第6版英音は /kóuæn/), sanséi /sa:nséi/,  
Yamáto-è /ja:má:touèi/(第6版米音は /jà:ma:touéi/), Yayói /ja:jói/, Yukáwa /ju:ká:wa:/「湯川」, zàibatsú /zàiba:tsú:/
- b. /æ/: satsúma /sætsúmæ/
- c. /ə/: géisha /géɪʃə/, ikebána /i:keibá:nə/, kabúki /kəbú:ki/,  
rénga /réŋgə/, rómaji /róumədʒi/, satóri /sətó:ri/,  
témputa /témputə/, tòkonóma /tòukənóumə/,  
wásabi /wá:səbi/, Yòkoháma [jòukəhá:mə](第5版)
- d. /ə/ ~ /ɪ/: hàra-kíri /hàrəkiri/(第5版の米音には[hàrikiri]もあり)
- e. /ə/ ~ /æ/: karáte /kərá:ti/(第5版、6版共米音) ~ /kærá:ti/(第5版、6版共英音)
- f. /ɑ:/ ~ /æ/ ~ /ə/: tatámi /tɑ:tá:mi/ ~ /tætá:mi/ ~ /tətámi/

(52a)の gagáku, sanséi, Yamáto-è, Yayói の語頭の長母音 /ɑ:/ は、実際には第2強勢で発音されていると思われるが、英語辞典には記されていない。kóan, Yukáwa, záibatsu の <a> は、第1強勢の直後でありながら /ɑ:/ と長母音に発音されているが、一般的に英語には見られない外来語への発音である。hàra-kíri を /hàrikiri/ と発音するのは、hurricane とか「張り切り」への類推であろうなどと耳にするが、興味のあるところである。Oxford には、1856年のスペリングとして hara-kiri を音位転換した hari-kari が載っている。これは hurry-curry とも綴られたそうである。

(52)の <a> の発音を見ると、強勢のない母音をあいまい母音 /ə/ に発音する英語の規則と、外来語の母音をはっきりと /ɑ:/ に発音する規則が混じっているのが分かる。

(53) アクセントのない母音 <i> の発音

- a. /i:/: *kirín* /ki:rɪn/, *nǐsé* /ni:séɪ/ (cf. *kibéɪ* /ki:béɪ/)
- b. /ɪ/: *hibákusha* /hɪbá:kʊʃə/ (第6版米音になし), *hibachi* /hɪbá:tʃɪ/,  
*Nippón* /nɪpʌn/ (第5版、6版共米音)
- c. /i/ ~ /ɪ/: *ákebi* /á:kəbi/ ~ /ákɪbi/, *hibáchi* /hɪbá:tʃɪ/ ~ /hɪbá:tʃɪ/,  
*kabúki* /kəbú:ki/ ~ /kəbú:ki/, *káki* [kú:ki] ~ [kæki], *kámi*  
[iká:mi] ~ [ká:mi], *kuróshið* [kʊróʊʃidʊ] ~ [kʊréʊʃidʊ], *óbi*  
[óubi] ~ [óubi], *tóri* [tó:rɪ:] ~ [tó:rɪ:] (第5版米音 /i/,  
英音 /ɪ/. 第6版は英音・米音共 /i/)
- d. /ɪ/ ~ [i:]: *Búshiðð* /bʊʃidðʊ/ (第5版英音に [bú:ʃi:dəʊ] あり)
- e. /ə/ ~ /ɪ/: *háníwà* /há:nəwà:/ ~ /há:nɪwà:/ (第5版、6版とも米音),  
*kàmi káze* /kà:məká:zi/ (第5版の英音になし) ~ /kà:mɪká:zi/,  
*kimóno* /kəmóʊnə/ (第5版の英音になし) ~ /kɪmóʊnəʊ/,  
*mikádo* /məká:dou/ (第5版の英音になし) ~ /mɪká:dəʊ/ (第5  
版の米音になし), *sáshimi* [sá:ʃəmi] (第5版の米音) ~ [sá:ʃɪmi]  
(第5版の英音), *sámisèn* /sæməsèn/ (第5版、6版とも米音)  
~ /sæmɪsèn/ (第5版、6版とも英音)

(53a)のような2音節語では、語頭の CV 音節が長母音に発音されることが多い。長母音の発音であるから、実際には第2強勢があるのだが、アクセント記号は付与されないのが普通である。*kibéɪ* /ki:béɪ/ のように <ki> に強勢が付いているのは、英語の規則に基づくものであるので、他の語に合わせると /ki:béɪ/ と強勢を付与しない表記になる。

(53c)のような米音 /i/、英音 /ɪ/ の違いは、特に語末や第1強勢の後に起る現象であるが、第6版では両音の違いがなくなっている。(53d)の第5版英音は、*Bu•shi•do* の CV 音節をていねいに発音したものである。(53e)にならうと /bú:ʃidəʊ/ となる。(53e)の語に、強勢のない母音をあいまい母音に発音する米音の特徴が見られる。一方、(53b)の語の <i> は /ɪ/ に発音され、あいまい母音に発音されていない。(53e)の語との違い

は見出せないが、あえて述べると、英語の *recórd* /rɪkɔ:rd/, *betráy* /bɪtréi/ のように、語頭の /ɪ/ は /ə/ に発音され難いということであろう。

(54) アクセントのない母音 <u> の発音

- a. /u:/: *Bunráku* /bunrú:ku:/, *gagáku* [gɑ:gú:ku:] (第5版), *hábu* /há:bu:/, *háiku* /háiku:/, *hókkú* /hóku:/, *nuncháku* [nu:ntʃú:ku:] (第5版), *Ryúkyu* /ri(j)ú:kju:/, *séppuku* [sépu:ku:] (第5版), *tófu* [tóufu:], *tsunámi* /(t)su:nó:mi/ ~ /(t)suná:mi/ (第5版英音は [u]), *ukìyo-é* [u:kì:jou(j)éi] (第5版)
- b. /ʊ/: *Bunráku* /bunrú:ku:/, *hábutài* [há:butài] (第5版), *hibákushà* /hɪbá:kuʃɑ:/ (第6版米音は /ú:/), *kuróshiò* /kuróʃiòʊ/, *séppuku* [sépu:ku:] (第5版), *shàkuháchi* /ʃàkuhá:tʃi/
- c. /ə/: *hábutài* /hábətài/ (第6版), *kátsura trèe* /ká:tsərətɹi:/, *témpura* /témperə/ (第6版米音は /ʊ/)
- d. /ɸ/ ~ /ʊ/: *nétsuke* /nétski/ ~ /nétsukèi/
- e. /ɸ/: *sukiyáki* /skijá:ki/ (第5版、6版共米音)
- f. /ʌ/ ~ /ə/: *shógun* /ʃóugʌn/ ~ /ʃóugən/ (第6版米音は /ʊ/)
- g. /ʌ/: *nuncháku* /nantʃú:ku:/ (第6版)

(54a)の長母音は、ほとんど語末の場合である。語末以外は /ʊ/ あるいは /ə/ に発音されるのが普通であるが、語頭の母音をていねいに発音したのが *nuncháku* /nu:ntʃú:ku:/, *ukìyo-é* /u:kì:jou(j)éi/ の /u:/ である。語頭の非強勢母音を /u:/ に発音するのは随意的であるので、/nuntʃú:ku:/, /ukì:jou(j)éi/ という発音があっても良い。そうすると、これらの語は実際には(54a)の *tsunámi* のように /u:CV.../ と /ʊCV.../ の両方の発音があることになる。

3音節語の2音節目の <u> は、(54c)のようにあいまい母音に発音さ

れている。これは強勢のある音節の後での非強勢化を表わしている。語頭の /ts/ は発音が難しいので、(54a)の tsunami の /t/ が米音では発音されないことがある。しかし、語頭でない /ts/ は、(54d)の netsuke のように /ts/ に発音されている。

(54f)の shogun や(54g)の nunchaku の <u> が /ʌ/ に表記されている。まず shogun について他の辞典を調べてみる。Webster の音声表記は /ʃóugən/ であり、OED のは /ʃóugʌn/ であり、LDCE には /ʃóugʌn/ と /ʃóugən/ の発音記号が載っている。さらに、ODP には英音として /ʃóugən/ と /ʃóug(ə)n/ が、米音として /ʃóugən/ が載っており、LPD にも /ʃóugən/ と /ʃóugən/ が記載されている。英語の *minimum* /míniməm/ や *minus* /máInəs/ の <u> は常に /ə/ に発音されているにもかかわらず、日本語の発音を /ʌ/ や /u/ で表記しているのは、外国語の母音をはっきりと発音するねらいがある。

nunchaku については、<nun> が語頭にあるので /nʌn/ と発音するのが英語らしい。英語の umbrella が /ʌmbrélə/ と発音されるのと同じである。しかし、ODP には /nəntʃáku/ (米音)と /nʌntʃáku:/ (英音) が載っている。ODP の発音については次章で述べるが、米音に /ʌ/ の記号は用いられていない。

#### (55) アクセントのない母音の <e> の発音

- a. /eɪ/ ~ /i/: nétsuke /nétsʊkeɪ/ ~ /néts(u)ki/
- b. /i/ ~ [ɪ]: karáte /kərá:ti/ ~ [kærá:ti] (第5版英音)
- c. /i/ ~ [ɪ] ~ /eɪ/: kákke /káeki/ ~ [káeki] (第5版英音) ~ /kú:keɪ/,  
sáke /sá:ki/ ~ [sá:ki] (第5版英音) ~ /sá:keɪ/ (第6版英音)
- d. /ɪ/ ~ /ə/: ákebi /ákɪbi/ (英音) ~ /á:kəbi/, kàkemóno /kækɪmóunəu/  
~ /kà:kəmóunou/ (第6版米音)
- e. /eɪ/ ~ /ɪ/ ~ [ə]: íkebána /i:keɪbá:nə/ ~ /i:kɪbá:nə/ ~ [i:kəbá:nə] (第5版)

(55)の例から、一般的に語末の <e> は /eɪ/, /i/, /ɪ/ (第5版英音) に発音され、語中の <e> は /ɪ/ か /ə/ に発音されると言える。例外が(55e)の /i:keɪbá:nə/ であるが、これは <ke> をていねいに発音したものである。ちなみに *Oxford* の発音記号は、/i:ki:bá:nə/ と /i:/ になっている。

(55a)の *netsuke* に /nétsukeɪ/ のように語末の /eɪ/ に第2強勢の付与されないのが英音である。米音は /nétsukèɪ/ のように第2強勢が付いている。第5版には [nétskeɪ] と [nétsukèɪ] があるが、[eɪ] に第2強勢が付いていない前者は、[u] 削除により2音節になったためである。第6版では、2音節語は /nétski/ しか記載されていない。

#### (56) アクセントのない母音の <o> の発音

- a. /ou/ (米音) ~ /əʊ/ (英音): chànojú /tʃɑ:noujú:/ ~ /tʃɑ:nəʊjú:/,  
           chórɔgì /tʃɔ:ro(ʊ)gì:/ ~ /tʃɔ:rə(ʊ)gì:/,  
           dáimyo /dáɪmiou/ ~ /dáɪmrəʊ/, dójo /dóʊdʒou/ ~ /dóʊdʒəʊ/,  
           ínro /ínrou/ ~ /ínrəʊ/, júdo /dʒú:dou/ ~ /dʒú:dəʊ/,  
           kàkemónɔ /kà:kəməʊnou/ ~ /kækɪməʊnəʊ/,  
           kimónɔ /kɪməʊnou/ ~ /kɪməʊnəʊ/, kótɔ /kóʊtəʊ/ ~ /kéʊtəʊ/,  
           mikádɔ /mɪká:dou/ ~ /mɪká:dəʊ/
- b. /ou/ ~ /ɑ/: bɔnsái /bəʊnsái/ ~ /bansái/ (米音)
- c. /ɑ/ (米音) ~ /ɔ/ (英音): Níppɔn /nípan/ ~ /nípɔn/,  
           Shíngɔn /ʃíngan/ ~ /ʃíngɔn/
- d. /ə/: tòkɔnóma /tòʊkənóumə/

<o> は語末ではほとんど二重母音に発音されている。英語の *hot, ton* のような /CoC/ の音節は、通常米音では /ɑ/ に、英音では /ɔ/ に発音されるが、(56c)の語がそのような発音になっている。語末や強勢音節間の非強勢母音が /kɪməʊnə/ 「着物」や(56d)の /tòʊkənóumə/ のように /ə/ に発音されるのは英語の特徴であるが、<o> を /ə/ に発音する例は少ない。これは英語話者は、<o> を /ou/ と認識しているためである。(56a)



の *dáimyo* の *myo* に第2強勢が付与されないのは、2音節語だからである。3音節に区分されると */dái.mi.òu/* と第2強勢が付与される。

### 3.5 おわりに

本章での日本語の発音研究は、『研究社新英和大辞典』第5版と第6版に掲載されている語彙に基づいているが、掲載語彙の発音は、長い歴史のある *Webster* や *OED* などの辞典を参考にしたものであろう。というのは、どの語彙が外来語として扱われているかは、英語国の英英辞典に載っているかどうかによるからである。*Webster* と *OED* の発音の違いを調べるのも、アメリカ発音とイギリス発音の違いが分ると同時に、どちらが日本語の発音に忠実であるかが分り、意義がある。両辞典を比べて見よう。どちらかというと *OED* の方が原語の発音に忠実であるように思われる。

(57)	<i>Webster</i>	<i>OED</i>	
a. haori	<i>/háUri:/</i>	<i>/há:ori/</i>	「羽織」
b. harakiri	<i>/hæri:kíri:/</i>	<i>/hà:rəkí:ri:/</i>	「腹切り」
c. kakemono	<i>/kàkə móUnou/</i>	<i>/kəkemó:no/</i>	「掛け物」
d. kuruma	<i>/kúrəmə/</i>	<i>/kurú:mə/</i>	「車」
e. romaji	<i>/róumədʒi:/</i>	<i>/ró:madʒi:/</i>	「ローマ字」

辞典には複数の発音記号が載っているのであるが、(57)の表記は最初に記載されているものである。

一つの語に複数の発音がある場合、最初に記載されているのが最も頻繁に使用されるものであるが、どの発音が年代的に古いのかは、辞典からは知る由もない。しかし、例えば *ki·mo·no* 「着物」を初めて外来語として記載する際には、母音をていねいに発音する */ki:móunou/* という発音が紹介され、やがて外来語が英語の言葉として扱われるようになる

につれて、強勢のない母音をあいまい母音に発音する /kəmóʊnə/ が紹介されるようになったと考えられる。スペリングの変化は、発音の変化も予想できる。例えば *OED* は、inkyō /ɪŋkjəʊ/ 「隠居」は 1911 年以降のスペリングであり、それ以前の 1871 年に inkiyo が書物に記載されていることを述べている。inkyō は /ɪŋkijəʊ/ と発音されていたと考えられる。

『研究社新英和大辞典』の第 5 版と第 6 版を比較しながら、日本語の発音を見てきた。基本的には両版に大幅な違いは見られないのであるが、一貫性に欠けていた発音を整理しようという試みは感じられた。しかし、長い間記載されてきた発音を、現実合わないからといって削除、修正するのは容易なことではないのだろう。第 6 版では、samurai 「侍」や tsutsugamusi 「つつが虫」のように、複数の発音例が極端に少なくなっている語があるが、それはアクセントの違いがなくなったためである。逆に tempura 「てんぷら」のように、第 6 版で発音例の多くなっているものもある。二重母音の発音を加えたためである。しかし、このような例は稀であり、第 5 版の発音の多様性は第 6 版でも変わってはいない。

辞典は、再版によって語数が減るよりも増えるのが常である。『研究社』も第 6 版に多くの日本語が加えられ、削除されたのは gagaku 「雅楽」だけである。しかし、もっと新語を加えても良かったのではないだろうか。「ふぐ」、「下駄」、「仮名」、「漢字」、「ラーメン」など良く使われる語が加えられていない。『研究社』には都市、人名といった固有名詞が少ない。これは日本で出版されている辞典だからであって、*ODP* や *LPD* のように最近外国で出版された辞典には固有名詞が多くなっている。

『研究社新英和大辞典』に載っている日本語の発音記号一覧表

第5版の発音は [ ] で表記し、第6版の発音は / / で表記している。  
太字は第6版に新出の語である。米音と英音の中間の発音は、両音に共通の発音である。

	米音	米/英音	英音	日本語
ai・ki・do	[aikidóu] /aikí:dou/		[aikidáu] /aikí:dəu/	合気道
Ai・nu		[áinu:] /áinu:/		アイヌ族
A・ki・ta	/əkí:tə/		/əkí:tə/	秋田犬
a・ke・bi	[á:kəbi] /á:kəbi/		[á:kɪbɪ] /á:kɪbi/ /á:kəbi/	あけび
Bon	[bó(:)n] /bó(:)n/ /bá(:)n/		[bón] /bó(:)n/	盆
bon・sai	[bounsái] [bansái] [bóunsai] [bánsai] /bounsái/ /ba(:)nsái/ /bóunsai/ /bá(:)nsai/		[bónsai] [béunsai] /bónsai/ /béunsai/	盆栽
Bun・ra・ku, bun・ra・ku		[bunrá:ku:] /bunrá:ku:/		文楽
Bu・shi・do	[búʃidòu]		[bú:ʃi:dəu]	武士道

	[bú:ʃɪdòu]		
	/bú:ʃɪdòu/	/buʃi:dəu/	
	/bú:ʃɪdòu/	/bù:ʃɪdəu/	
cha•no•yu	[tʃā:noujú:]	[tʃā:nəujú:]	茶の湯
	/tʃā:noujú:/	/tʃā:nəujú:/	
cho•ro•gi	[tʃō:ro(u)gì:]	[tʃō:rə(u)gì:]	[植物]チョロギ
	[tʃō:ro(u)gì:]		
	/tʃō:rougì:/	/tʃō:rə(u)gì:/	
dai•my•o,	[dáimiðu]	[dáimɪrəu]	大名
dai•mi•o	[dáimjəu]	[dáimjəu]	
	/dáimjəu/	/dáimjəu/	
do•jo	[dóudʒou]	[dóudʒəu]	道場
	/dóudʒou/	/dóudʒəu/	
fu•ji		[f(j)ú:dʒi:]	富士絹
		/fú:dʒi/	
Fu•ji•mo•ri	/fù:dʒimó:ri/	/fù:dʒimó:ri/	フジモリ前ベ
	/fù:dʒəmó:ri/		ルー大統領
fu•ton	/fú:ta(:)n/	/fú:tən/	布団
	/fjú:ta(:)n/	/fjú:tən/	
ga•ga•ku, Ga•ga•ku		[ga:gá:ku:]	雅楽
第6版になし			
gei•sha	[géɪʃə]	[géɪʃə]	芸者
	[gí:ʃə]		
	/géɪʃə/	/géɪʃə/	
	/gí:ʃə/		
go, Go	[góu]	[góu]	碁
	/góu/	/góu/	
go•bang	[gəubáɛŋ]	[gəubáɛŋ]	五目ならべ
	/gəubáɛŋ/	/gəubáɛŋ/	

ha • bu	[há:bu:]	[há:bu:]	[植物]ハブ
	/há:bu:/		
ha • bu • tai, ha • bu • tae	[há:butàɪ]		羽二重
	/há:bətàɪ/		
hai • ku	[háiku:]		俳句
	/háiku:/		
ha • ni • wa	[há:nɪwà:]	[há:nɪwà:]	埴輪
	[há:nəwà:]		
	/há:nɪwà:/	/há:nɪwà:/	
	/há:nəwà:/		
ha • ra • ki • ri	[hàerəkíri]	[hàerəkíri]	腹切り
	[hàeríkíri]		
	/hà:rəkíri/	/hàerəkíri/	
	/hèrəkíri/	/hàerəkíri/	
hi • ba • chi	[hɪbá:tʃɪ]	[hɪbá:tʃɪ]	火鉢
	/hɪbá:tʃɪ/		
hi • ba • ku • sha	[hɪbá:kuʃã:]		被爆者
	/hì:bəkú:ʃə/	/hɪbá:kuʃə/	
hok • ku	[hók(:)ku:]	[hókku:]	発句
	[háku:]		
	/hók(:)ku:/	/hókku:/	
	/há(:)ku:/		
hon • cho	[hántʃou]	[hóntʃəʊ]	班長
	/há(:)ntʃou/	/hóntʃəʊ/	
i • ke • ba • na	[i̯keɪbá:nə]		生花
	[i̯:keɪbá:nə]		
	[i̯:kəbá:nə]		
	[i̯:krɪbá:nə]		
	/i̯keɪbá:nə/		

		/i:kerbá:nə/	
		/i:kɪbá:nə/	
in•ro	[ínrou]	[ínrəu]	印籠
	/ínrou/	/ínrəu/	
I•shi•gu•ro	/iʃigúrou/	/iʃigúərəu/	イシグロ・加戸
I•shi•ha•ra test		[iʃihá:rətèst]	石原式色盲検査法
		/iʃi:há:rətèst/	
Is•sei		[i:séi]	一世
is•sei		[í:sei]	
		/i:séi/	
		/í:sei/	
i•tai-i•tai		[í:taí:taɪ]	イタイイタイ病
		/í:taí:taɪ/	
ju•do	[dʒú:dou]	[dʒú:dəu]	柔道
	/dʒú:ðou/	/dʒú:dəu/	
ju•do•ist	[dʒú:douɪst]	[dʒú:dəuɪst]	柔道家
	[dʒú:douəst]		
	/dʒú:douɪst/	/dʒú:dəuɪst/	
	/dʒú:ðouəst/		
ju•jit•su		[dʒu:dʒítsu:]	柔術
		/dʒu:dʒítsu:/	
ju•jut•su		[dʒu:dʒútsu:]	柔術
		/dʒu:dʒútsu:/	
ka•bu•ki	[kəbú:ki]	[kəbú:ki]	歌舞伎
Ka•bu•ki	[kəbúki]		
	[ká:bukì:]		
	/kəbú:ki/	/kəbú:ki/	
	/ka:bú:ki/		
	/ká:bukì:/		

ka • ke • mo • no	[kà:kimóunou] /kà:kəmóunou/	[kækimóunəu] /kækimóunəu/	掛け物
ka • ki	[ká:ki] /ká:ki/	[ká:kɪ]	柿
kak • ke	[kæki] [ká:keɪ] /kæki/ /ká:keɪ/	[kæki] [ká:keɪ]	脚気
ka • mi	[ká:mi] /ká:mi/	[ká:mɪ]	「神道の」神
ka • mi • ka • ze	[kà:mɪká:zi] [kà:məká:zi] /kà:məká:zi/	[kà:mɪká:zi] /kæmɪká:zi/ /kæməká:zi/	神風
ka • ra • o • ke	/kærióuki/ /kèrióuki/ /kærréóuki/	/kærióuki/	カラオケ
ka • ra • te	[kərá:ti] /kərá:ti/	[kərá:ti] [kærá:ti] /kərá:ti/ /kærá:ti/	空手
ka • ra • te • ist	[kərá:tiɪst] [kərá:tiəst] /kərá:tiɪst/	[kərá:tiɪst] [kærá:tiɪst] /kərá:tiɪst/ /kærá:tiɪst/	空手家
kat • su • ra tree		[ká:tsərə tri:] /ká:tsərə tri:/	[植物]カツラ
Ka • wa • sa • ki disease		/kà:wəsá:ki dɪzì:z/	川崎病
Ki • bei, ki • bei		[ki:béɪ]	歸米二世

		/kì:bér/	
ki•mo•no	[kimóunə] [kəməóunə] [kimóunou] /kimóunə/ /kəməóunə/ /kimóunou/ /kəməóunou/	[kiméunəu]   /kiméunəu/ /kəməéunəu/	着物
ki•rin		[ki:rín] /ki:rín/	麒麟
ko•an	[kóua:n] /kóua:n/	[kéua:n] /kéuæn/	(禪宗の)公案
ko•i		[kói] /kói/	[魚類]コイ
ko•jic acid	[kóudzikæsid] /kóudzikæsid/	[kóudzikæsid] /kóudzikæsid/	こうじ酸
ko•to	[kóutou] /kóutou/	[kóutəu] /kóutəu/	琴
Ku•ro•shi•o	[kuróuʃidəu] /kuróuʃidəu/	[kuréuʃidəu] /kuréuʃidəu/	黒潮
mi•ka•do	[məká:dou] /míká:ðou/ /məká:ðou/	[míká:dəu] /míká:dəu/ /məká:dəu/	帝
ne•tsu•ke		[néts(u)ki] [nétskeɪ] [nétsukèɪ]  /nétski/ /nétsukèɪ/	根付け
		/nétskeɪ/ /nétski/ /nétsuki/	



		/nétsuker/	
nin•ja		/níndʒə/	忍者
Nip•pon	[nɪpán] [nípən] /nɪpá(:)n/ /nípə(:)n/	[nɪpɔn]  /nípɔn/	日本
Nip•pon•ese	[nɪpəní:z] [nɪpəní:s] /nɪpəní:z/ /nɪpəní:s/	[nɪpəní:z]  /nɪpəní:z/	日本人(の)  日本人(の)
Nip•po•ni•an	[nɪpóunɪən]	[nɪpóunjən] [nɪpóunɪən]	日本人(の)
Ni•sei, ni•sei		[ni:séɪ]  /ni:séɪ/ /ní:sei/	二世
No•gu•chi	/nougú:tʃi/	/nəugú:tʃi/	ノグチ・イサム
No, no	[nóʊ] /nóʊ/	[néʊ] /néʊ/	能
nun•cha•ku		[nu:ntʃá:ku:] /nʌntʃá:ku:/	ヌンチャク
obi	[óubi] /óubi/	[éubi] /éubi/	帯
o•ri•ga•mi	[ɔ(:)rəgá:mi] [àrəgá:mi] /ɔ(:)rɪgá:mi/ /ɔ(:)rəgá:mi/ /à(:)rɪgá:mi/ /à(:)rəgá:mi/	[ɔrɪgá:mi]  /ɔ(:)rɪgá:mi/ /ɔ(:)rəgá:mi/	折り紙

pa • chin • ko	[pətʃɪŋkou] /pətʃɪŋkou/	[pətʃɪŋkəu] /pətʃɪŋkəu/	パチンコ
ra • ku ware		[rá:ku: wèə]	楽焼き
ra • ku		/rá:ku:/	楽焼き
ren • ga		[réŋgə] /réŋgə/	連歌
ro • ma • ji	[róumədʒi] /róumədʒi/	[róumədʒi] /róumədʒi/	ローマ字
ry • u		/riú:/	流 (武道の流派)
Ryu • kyu	[ri(j)ú:kju:]	[ri(j)ú:kju:]	琉球諸島
Islands	[rjú:kju:] /ri(j)ú:kju:/	[rjú:kju:]	
sa • ke	[sá:ki] /sá:ki/	[sá:ki] /sá:ki/ /sá:keɪ/	酒
sam • i • sen	[sæməsèn] /sæməsèn/	[sæmɪsèn] /sæmɪsèn/	三味線
sa • mu • rai	[sæm(j)uràɪ] [sá:muɾàɪ] [sæm(j)urái] [sà:muɾái] /sæm(j)uràɪ/	[sæm(j)uràɪ]	侍
San • sei, san • sei		[sa:nséɪ] /sa:nséɪ/ /sá:nseɪ/	三世
sa • shi • mi	[sá:ʃəmi] /sə:ʃi:mi/	[sá:ʃɪmi] /sæʃi:mi/ /səʃi:mi/	刺身
sa • to • ri	[sətó:ri]	[sətó:ri]	悟り

	[sətó:ri]		
	/sətó:ri/		
sat•su•ma	[sətsú:mə]		薩摩焼き
	[sætsumə]		(第1の意味)
Sat•su•ma	/sətsú:mə/		ウンシュウミカン
	/sætsumə/		
sen	[sén]		銭
	/sén/		
sep•pu•ku	[sepú:ku:]		切腹
	[sépu:kù:]		
	/sepú:ku:/		
Se•to (ware)	[séitəu (wèə)]	[séitəu (wèə)]	瀬戸焼
	[séitəu-]	[séitəu-]	
	/séitəu (wèə)/	/séitəu (wèə)/	
	/séitəu-/	/séitəu-/	
sha•ku•do	/ʃa:ku:dóu/	/ʃæku:dəu/	赤銅
sha•ku•ha•chi	[ʃa:kuhá:tʃi]	[ʃa:kuhá:tʃi]	尺八
	/ʃa:kuhá:tʃi/		
shi•a•tsu	/ʃiá:tsu:/	/ʃiætsu:/	指圧
Shin•gon	[ʃíngan]	[ʃíngən]	真言宗
	[ʃi:ngan]	[ʃi:ngən]	
	/ʃínga(:)n/	/ʃíngən/	
	/ʃi:nga(:)n/	/ʃi:ngən/	
Shin•to	[ʃíntəu]	[ʃíntəu]	神道
	/ʃíntəu/	/ʃíntəu/	
sho•gun,	[ʃóugan]	[ʃóugan]	將軍
Sho•gun	[ʃóugən]	[ʃóugən]	
	/ʃóugan/	/ʃóugan/	
	/ʃóugun/	/ʃóugu:n/	

	/ʃoʊgu:n/	/ʃoʊgən/	
sho•ji	[ʃoʊdʒi]	[ʃoʊdʒɪ]	障子
	/ʃoʊdʒi/	/ʃoʊdʒi/	
sho•yu	/ʃoʊju:/	/ʃɔɪju:/	醤油
		/ʃɔɪu:/	
su•ki•ya•ki	[skijá:ki]	[sùkɪjæki]	すき焼き
	[sùkijá:ki]	[sú:kɪjæki]	
	[sù:kijá:ki]	[sùkɪjá:ki]	
	/sù:kijá:ki/	/sù:kijá:ki/	
	/sùkijá:ki/	/sùkijá:ki/	
	/skijá:ki/	/sùkɪjæki/	
su•mo	[sú:mou]	[sú:məʊ]	相撲
	/sú:mou/	/sú:məʊ/	
su•shi	[sú:ʃɪ]	[sú:ʃɪ]	寿司
		/sú:ʃɪ/	
Su•zu•ki		/səzú:ki mɛθəd/	鈴木バイオリン
Method			教育法
tai		[táɪ]	鯛
		/táɪ/	
tan•ka		[tá:ŋkə]	短歌
	/tá:ŋkə/	/tá:ŋkə/	
		/tæŋkə/	
ta•ta•mi	[ta:tá:mi]	[ta:tá:mɪ]	畳
	[tætá:mi]	[tætá:mɪ]	
	[tətá:mi]	[tətá:mɪ]	
		/ta:tá:mi/	
		/tætá:mi/	
		/tətá:mi/	
tem•pu•ra		[témpərə]	てんぷら

		[témpərà:]	
		[tempúre]	
	/témpurə/	/témpərə/	
	/témpurà:/	/tempúerə/	
	/tempú <sup>ɾ</sup> rə/		
to • fu	[tóufu:]	[təúfu:]	豆腐
	/tóufu:/	/təúfu:/	
to • ko • no • ma	[tòukənóumə]	[təukənəúmə]	床の間
	/tòukənóumə/	/təukənəúmə/	
to • kyo • ite	[tóukiouàrt]	[təukjəuàrt]	東京都民
		[təukɪəuàrt]	
	/tóukiouàrt/	/təukɪəuàrt/	
to • ri • i	[tó:ri:]	[tə:ri:]	鳥居
	[tó:ri:]		
		/tə:ri:/	
tsu • na • mi	[(t)suná:mi]	[tsuná:mi]	津波
	[(t)su:ná:mi]		
		/(t)su:ná:mi/	
		/(t)su:næmi/	
tsu • tsu • ga • mu • shi	[(t)sù:tsugə mú:ʃi]	[tsù:tsugə mú:ʃi]	つつが
disease	[tù:tsugə mú:ʃi]	[tsù:tsugá:muʃi]	虫病
	[tù:tsugá:muʃi]		
		/(t)sù:tsugə mú:ʃi/	
u • do	[údou]	[údəu]	[植物]ウド
	/ú:dou/	/ú:dəu/	
u • ki • yo • e	[u:kì:jo(u)(j)ér]	[u:kì:jə(u)(j)ér]	浮世絵
u • ki • yo • ye	/ù:kiou(j)ér/	/ù:kiəu(j)ér/	浮世絵
wa • sa • bi	[wá:səbi]	[wá:səbi]	ワサビ
		/wá:səbi/	

ya • gi	[já:gi] [jægi]	[já:gi] [jægi]	八木アンテ
	/já:gi/ /jægi/		
ya • ki • to • ri	/jæ:kitó:ri/ /jà:kitó:ri/	/jækitó:ri/	焼き鳥
Ya • ma • to • e	[ja:má:touèi] /jà:ma:touéi/	[ja:má:təuèi] /jæmǽtəuèi/	大和絵
Ya • yoi		[ja:jói] /ja:jói/	弥生式の
yen		[jén] /jén/	円
Yu • ka • wa potential		[ju:ká:wa:] /ju:ká:wa:/	湯川型 ポテンシャル
Yo • ko • ha • ma bean	[jòukəhá:mə bí:n] /jóukəhà:mə bí:n/	[jèukə(ʊ)há:mə bí:n] /jóukə(ʊ)hà:mə bí:n/	ハッシュウマメ
zai • ba • tsu		[záiba:tsù:] /zàiba:tsú:/	財閥
Zen		[zén] /zén/	禅
zo • ri	[zó:ri] [zó:ri]	[zó:ri]	草履
		/zó:ri/	

## 第4章 *The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*にある日本語の発音

### 4.1 はじめに

前章では『研究社新英和大辞典』（以下『研究社』）第5版と第6版に載っている日本語の発音について述べた。この辞典には、日本で発行されているためか、原語の発音を維持しようという面が窺われた。原語に近い発音を保持しながらも、他の面では英語の音韻体系に従っているのは *OED* (*The Oxford English Dictionary*) や *Webster* (*Webster's Third New International Dictionary*) についても同じである。『研究社』、*OED*、*Webster* のような古い辞典は、古典的だからといって、これまで記載されてきた発音を容易に変更、あるいは削除できるものではない。過去の記録として残すことにも、その価値があると思われる。

上記の3大英語辞典ほど過去の発音にとらわれずに、現在英語圏で用いられるようになってきた語彙や発音にも注目している辞典が、本章で扱う *The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English* (2001) (以下 *ODP*) である。『研究社』に比べて一つの語に対する代替発音が少ないのは、新しい辞典であるため、古い不使用の発音を削除し、現在使用されている発音のみ記載したためであろう。このことについて *ODP* は Preface で次のように述べている。

- (1) WE ARE DELIGHTED to offer our models and transcriptions for the pronunciation of British and American English, in what we believe to be a new manner for the new millennium. We have developed our British and American models, not as incremental improvements upon some prior practice but as the product of our

long research experience as students of language variation in Britain and America. ... We believe that our wide experience with variation gives us standing to create pronunciation models which avoid slavish imitation of the dialects of self-appointed arbiters of taste or style in language, in favour of patterns which reflect the actual speech of real people. (ODP:vii)

ODP は上記のように、古い発音ではなく、現在実際に話されているモデルとなるべき発音を載せていると述べているが、話す頻度の少ない日本語の発音に関しては、従来から既存の辞書に記載されている発音は容易に削除できないし、それは ODP についても同じであると思われる。

ODP には地域名 (Hiroshima, Hokkaido, Kobe)、人名 (Ito, Kurosawa, Ozawa)、会社名 (Daihatsu, Honda, Yamaha) 等の固有名詞が多くなっている。これは最近の情報化時代を反映するものであり、同じく英語圏で発行された *OED* や *Webster* には見られないものである。また、最近発行の『研究社』第6版に固有名詞が少ないのは、日本で発行された辞典であり、自国の固有名詞の記載は不必要だからである。

#### 4.2 ODP の発音記号

ODP にはアメリカ英語(American English) (以下米音)とイギリス英語(British English) (以下英音) の発音が載っている。日本語の発音を述べる前に、ODP での米音と英音の違いについて述べよう。ODP で使用している発音記号は、概して音声的であり、実際に話されているものであると次のように述べている。

- (2) Transcriptions in the text are broadly phonetic. That is, the transcriptions represent actual pronunciations, often with several variant forms per headword, not abstract sound units which



include and hide potential variation. For instance, both [ru:m~rum] and [rum] are possible pronunciation for *room*, both [eks-] and [egz-] are represented for some words beginning with *ex-* + vowel. (ODP:x)

(2) で述べられている実際の発音(actual speech)の例は *room* と *ex-* の代替発音であるが、*ODP* には他の代替発音の例として、[r] の挿入 (*law* [lɔ:(r)]), /t/ の有声化 (*better* [bɛdər]), /t/ 脱落 (*twenty* [twenti] → [tweni]), 共鳴音の成節化 (*button* [batn], *bottle* [botl]) などがある。/t/ の有声化に関しては、弾音 [ɾ] の方がより精密であるが、記号の複雑さを避けたのであろう。

*ODP* には実際に話される発音が記載されているといっても発音記号には制限があるので、簡略表記(broad transcription)にならざるをえないことがある。このことについて *ODP* は次のように述べている。

(3) A limited symbol set results in broad transcriptions, and may suggest de facto phonemicization to some readers, but our intention is always to indicate actual sounds to be produced. (ODP:x)

(3) で述べられている音素化 (phonemicization) とは、例えば、r 音色の [ɹ](*doctor* [dɒktɹ]), 鼻母音の [ẽ](*pen* [pẽn]), 声門閉鎖音の [ʔ](*bottle* [bɒʔ]) のような発音記号を用いていないということである。但し、英音ではあるが、フランス語借用語の *bon vivant* [bɔ̃ vi:vɔ̃] 「美食家、食通」には鼻母音の記号が用いられている。『研究社』には米音、英音共に代替発音として鼻母音が載っている。

*ODP* の母音体系について述べよう。まず米音の発音から見ていく。

(4) 米音の母音(*ODP*:x)

	Front	Central	Back
High	i		u
		ɪ	ʊ
	e		o
Mid		ə	
	ɛ		ɔ
	æ		
Low		ɑ	

diphthongs: eɪ, aɪ, ɔɪ, aʊ, oʊ

多くの音声学の研究書は [ɑ] を非円唇低後舌母音(low back unrounded vowel)と記述してきた。ところが *ODP* では低中舌母音(low central vowel)となっている。これは最近の米音に見られる低母音の時計回り移動を反映したものであろう。(4) には二重母音[aɪ], [aʊ] の [a] の位置が書かれていないが、[ɑ] が中舌母音であるので、前舌の位置に移動したと考えられる。[ɔ] は IPA (国際音声字母) と同様、低め中後舌母音(lower-mid back vowel)であるが、高め低後舌母音(upper-low back vowel)と記述している研究書もある。

(4) の米音母音表には [ʌ] がない。[ʌ] は一般的な英語辞典では hūt [hát], móther [máðər] の強勢母音として示されている。しかし、*ODP* では中中舌母音(mid central vowel)の[ə] が用いられ、[hát], [máðər]である。一般に [ə] は強勢のない母音の発音であり、/r/ の前の強勢母音は bírd [bɜrd], cértain [sɜrtən] のように [ɜ] が用いられることがあるが、*ODP* では強勢のあるなしに係わらず、[ə] が用いられている。

*ODP* の英音は、イギリスの標準的発音である容認発音(Received Pronunciation)に基づいており、次のようである。

(5) 英音の母音(ODP:X)

	Front	Central	Back
High	i:		u:
	ɪ		ʊ
	e	ə	
Mid			
	ɛ	ʌ	ɔ:
Low	a		ɑ: ɒ
diphthongs: eɪ, ʌɪ, ɔɪ, aʊ, əʊ			

英音の母音の数が米音より一つ多いが、米音に二重母音の [a] を加えると両音共、同じ 12 種の母音になる。母音の数は同じでも米音と英音には大きな違いがある。一つには、英音には長母音が四つ (i:, u:, ɔ:, ɑ:) ある。二つには、米音にない [ʌ] と [ɒ] がある。[ɒ] は低後舌円唇母音(low back rounded vowel)であり、米音の[a]に対応する。米音 hot [hat] が英音では [hɒt] と発音される。両音の発音の最大の相違は円唇性にある。英語は後舌性が強い程円唇性が強いので、[a], [ɑ:], [ɒ] の三つの母音は、後ろの母音ほど円唇性が強いことになる。

米音と英音の違いの三つ目は、英音には [o] と [æ] がない。米音の boat [bout] は英音では [bəʊt] と発音され、米音の cat [kæt] は英音では [kat] と発音されている。米音の [æ] が [ɛ] に近くなり、英音の [æ] が [a] に近くなっていることについて、『研究社』第 6 版には次のように書かれている。

- (6) 米音では [æ] は最近かなり大きな変動が起こっている。一つは [æ] が二重母音化して /eə/ のようになること、もう一つは舌の位置が高くなって上の /e/ に接近して両者の区別が曖昧となる傾向である。このため to gather /təgəˈeəðə/ と together /təgəˈeəðə/ などがしばしば同

じ発音に聞こえる。いっぽう英音では逆に舌の位置が低くなって [a] に近づく傾向がある。

(『研究社』第6版: x iii)

『研究社』では英音も従来どおり /æ/ で示しているが、*ODP* は [a] で示している。最近の傾向をいち早く取り入れた発音記号である。

米音と英音の違いの四つ目は、[ə] と [ɑ] の位置が米音と違うことである。英音では、[ə] は高め中中舌母音(upper-mid central vowel)であり、[ɑ:] は中舌と後舌の中間の位置にある。更に、[ə] と [ʌ] は共に中舌母音であるが、高めの [ə] と 低めの [ʌ] に分けられている。一方、米音ではこれら二つの音声は区別されずに [ə] と記載されている。

英音の母音表には、[i:] は記載されているが [i] がない。しかし、funny [fʌni], very [veri] の語末の発音は [i] となっている。このことを音素表記と音声表記の面から述べよう。[fʌni], [veri] の [i] は、音声表記であり、音素表記である弛緩母音の /ɪ/ が語末で緊張母音 [i] に発音されたものである。しかし、/ɪ/ は長母音の [i:] には発音されていない。agréé [əgrí:], trustée [trastí:] の語末は長母音 [i:] に発音されるが、その音素は緊張母音の /i/ であって /ɪ/ ではない。英音の母音表は、音素表記よりはむしろ音声表記であるため /ɪ/ が書かれていない。英音で実際に話される高前舌母音(high front vowel)は、[i:], [i], [ɪ] の三つである。/ɪ/ は語中では [ɪ]、語末では [i]、/i/ は語中、語末共 [i:] と発音される。

米音と英音を比較すると次のようになる。

#### (7) 母音の発音

##### 1. 米音

- a. [i] meet[mit], sleep[sli:p]
- sleepy[sli:pi], very[veri]
- b. [ɪ] city[siti], fill[fil]
- c. [eɪ] great[greɪt], rain[reɪn]

##### 2. 英音

- a. [i:] meet[mi:t], sleep[sli:p]
- b. [i] sleepy[sli:pi], very[veri]
- c. [ɪ] 左の米音に同じ
- d. [eɪ] 左の米音に同じ

- d. [ɛ] pet[pɛt], step[stɛp]  
           bear[bɛ(ə)r], stare[stɛ(ə)r]
- e. [æ] cat[kæt], ham[hæm]  
           after[æftər],  
           sample[sæmpəl]
- f. [u] food[fud], boom[bu:m]
- g. [ʊ] foot[fʊt], cook[kʊk]
- h. [oʊ] boat[bəʊt], toe[toʊ]
- i. [ɔ] door[dɔ(ə)r], short[ʃɔ(ə)rt]
- j. [ɔ, ɑ] bought[bɔt, bɑt], saw  
           [sɔ, sɑ], dog[dɔg, dɑg],  
           song[sɔŋ, sɑŋ]
- k. [ɑ] hot[hɑt], ox[ɑks]  
           father[fɑðər], car[kɑr]
- l. [ə] bird[bərd], stir[stər]  
           hut[hət], funny[fəni]
- m. [aɪ] nice[nɑɪs], tide[tɑɪd]
- n. [ɔɪ] toy[tɔɪ], employ[ɛmplɔɪ]
- o. [aʊ] house[haʊs], out[aʊt]
- e. [ɛ] 左の米音に同じ
- f. [ɛ:] bear[bɛ:(r)], stare[stɛ:(r)]
- g. [ɑ] cat[kɑt], ham[hɑm]
- h. [ɑ, ɑ:] after[aftə(r), ɑ:ftə(r)],  
           sample[sɑmpɪ, sɑ:mpɪ]
- i. [u:] food[fu:d], boom[bu:m]
- j. [ʊ] 左の米音に同じ
- k. [əʊ] boat[bəʊt], toe[təʊ]
- l. [ɔ:] door[dɔ:(r)], short[ʃɔ:t]  
           bought[bɔ:t], saw[sɔ:(r)]
- m. [ɒ] dog[dɒg], song[sɒŋ]  
           hot[hɒt], ox[ɒks]
- n. [ɑ:] father[fɑ:ðə(r)], car[kɑ:(r)]
- o. [ə:] bird[bə:d], stir[stə:(r)]
- p. [ʌ] hut[hʌt], funny[fʌni]
- q. [aɪ] nice[nɑɪs], tide[tɑɪd]
- r. [ɔɪ] 左の米音に同じ
- s. [aʊ] 左の米音に同じ

(5) の英音の母音表には [ə] と [ɛ] の長母音がないのであるが、(7) では bear [bɛ:(r)], stir [stɛ:(r)] と長母音 [ɛ:], [ə:] が記載されている。[ɛ:], [ə:] と [ɔ:], [ɑ:] の違いは、[ɔ:], [ɑ:] は、door [dɔ:(r)], bought [bɔ:t], father [fɑ:ðə(r)], car [kɑ:(r)] のように必ずしも /r/ が後続していないが、[ɛ:] と [ə:] のうしろには必ず音素 /r/ があることである。

### 4.3 アクセント付与

ODP のアクセントマークは『研究社』のとは異なっている。例えば、

ánecdòte は 'anec,dote, màgazíne は ,maga'zine, kàmikáze は ,kami'kaze 「神風」、rámèn は 'ra,men 「ラーメン」のように第1強勢 ['] と第2強勢 [ˊ] を音節の前に示している。しかし、本章では二つのアクセント記号を用いるのはわずらわしいので、前章と同じく母音の上にマークを付けてアクセントを表わすことにする。

前章で『研究社』に載っている日本語への主強勢規則を挙げたので、本章では繰り返さない。ODP でもやはり主強勢付与がスペリング、つまり書記素と音節構造によっている。第1強勢の付与される母音と、付与されない母音の発音が次の(8)語のように同じであることから、音節構造のみで強勢が強勢が付与されていないことが明らかである。英語のように音節の重さによってのみ強勢が決められるのではなく、高母音か非高母音かも大いに関与しているのである。次の(8)では、左の語は下線部の母音が第1強勢を取るが、右の語には第1強勢が付与されていない。なお、ODP には日本語の意味は載っていないので、筆者が付けたものである。

- (8) a. <ai> : bònsái [bùnsái] 「盆栽」、séndài [séndaì] 「仙台」  
 b. <u> : tòfú [tòufú] 「豆腐」、rákù [rákù] 「楽、楽焼」  
 c. <o> : kimóno [kimóunəu] 「着物」、shíkoku [ʃi:kəuku:] 「四国」  
 bùshidó [buʃidəu] 「武士道」、mikádō [mikú:dəu] 「帝」

前章で、『研究社』第6版では後ろから2番目の高母音音節にアクセントの付与される語が第5版より増えたことを述べたが、ODP にはその傾向が更に強く現れている。後ろから2番目の音節が高母音である語のアクセントを見てみよう。

(9) 語末第2音節高母音のアクセント

- a.  $\acute{V}C_0V\#$  : aikído 「合気道」、Akíta 「秋田犬」、Aríta 「有田焼」、azúki 「あずき」、Fujítsu 「富士通」、Ìshigúro 「イシグロ」、  
 jùjítsu~jùjútsu 「柔術」、kabúki 「歌舞伎」、Kágoshíma 「鹿」

児島」、Matsúi「松井」、màtsúri「祭り」、Mitsubíshi「三菱」、mizúna「水菜」、ninjútsù「忍術」、Nogúchi「ノグチ」、Suzúki「鈴木」、Tsushíma「対馬」、yakúza「やくざ」、yòkozúna「横綱」

b.  $\acute{V}C_0VC_0V\#$ : hábutài「羽二重」、nétsuke「根付け」、sámisèn「三味線」、sámurài「侍」

c.  $\acute{V}C_0V\# \sim \acute{V}C_0VC_0V\#$ : bushído (英音) ~ búshidò (米音)、  
Hiroshíma ~ Hiróshima「広島」、  
Màtsushíta (英音) ~ Màtsúshita (米音)「松下」、  
sashími (米音) ~ sáshimi (英音)「刺身」、  
satsúma (米、英音) ~ sátsuma (米音)「薩摩焼」、  
seppúku (米、英音) ~ séppuku (米音)「切腹」

アクセントが語末第2音節に付与される語が多くなっているが、一方では (9b) に挙げた語のように、依然として古いアクセントパターンを維持しているものもある。(9c) のように二つのアクセントパターンを取る語も、いずれは一つのパターンに統一されるのであろう。しかし、現在のように、後ろから2番目の音節に強勢を付与する規則と、後ろから2番目の音節が高母音であればその前の音節に強勢を付与する規則が存在している限り、二つのパターンを持ち続けるであろう。Oxford, Webster, 『研究社』第5版に比べればかなり語末第2音節にアクセントを付与する方向に向かっており、ODP には(9b)と(9c)に挙げた語以外に語末第2音節に第1強勢を取らない語は次のように数えるしかない。

(10) a. 語末強勢語

aikidó (米音) (他に aikído (米、英音) あり)、  
bùshidó (英音) (他に búshidò (米音), bushído (英音) あり)、  
bònsái (米音) (他に bónsài (米)、bónsai 英音) あり)、  
jùdoká (米音)「柔道家」(他に júdokà (米音)、júdoka (英音) あり)、

fùtón (英音)「布団」(他に fútòn (米音)、fúton (英音) あり)、  
gàijín「外人」、niséi (米音)「二世」(英音は nísei)、tòfú、ùkiyo-é  
「浮世絵」

b. 語頭強勢語

rómaji「ローマ字」、Shíkoku (英音) (米音は Shikókù)、  
Súbaru (米、英音) (英音に Subáru もあり)

前章でも述べたが、(10a) の bòn-sái, niséi, gàijín の語末の第1強勢は、重音節 (VV, VC) だからであり、ùkiyo-é の語末の第1強勢は「浮世の絵」という意味で「絵」が主要部であるからである。語末の音節が二つの形態素の主要部としてみなされる語は他に àikidó, bùshidó, jùdóká がある。つまり、「合気の道」、「武士の道」、「柔道の達人」のように二つの形態素から成り立つ語と考えるものである。一方、júdo「柔道」、kéndo「剣道」の <o> には強勢がない。これら2音節語は二つの形態素には分けられていない。また àikidó や bùshidó のような3音節語は、強弱強の好リズムパターンである。説明の難しいのが tòfú の語末に付く第1強勢である。参考までに aikido, bushido, tofu のアクセントを他の辞典で見よう。LPD は *Longman Pronunciation Dictionary*、『ジーニアス』は『ジーニアス英和大辞典』である。

- (11) a. akido: àikído *OED*, àikidó『研究社』第5版、aikído『研究社』第6版、aikído *LPD* 米、英音、àikidó *LPD* 米音、áikido *LPD* 英音、aikído『ジーニアス』
- b. bushido: búshido *OED*, búshidò *Webster*, Búshido『研究社』第5版、6版米音、Bushído ~ Bùshidó『研究社』第6版英音、Búshido *LPD* 米音、Bushído ~ Bùshidó *LPD* 英音、Búshidó ~ Búshido『ジーニアス』米音、Bùshidó『ジーニアス』英音
- c. tofu: tófu *OED*, tófu *Webster*, tófu『研究社』, tófu *LPD*,



## tófu『ジーニアス』

他の辞典を見ても aikido, bushido のアクセントは流動的であるが、語末第1強勢は主要なパターンではない。tòfú は他の辞典にはなく、例外的なアクセントであることが分かる。ODP を見ても fúgu「ふぐ」、júku「塾」など語末の <u> にはアクセントが付いていない。

(10b) の語は後ろから2音節の母音が <a> と <o> であるにもかかわらず、3音節語の語頭に第1強勢が付いている。rómaji のアクセントについては前章でも述べたが、Rome への類推であろう。Shikoku, Subaru は OED, Webster, 『研究社』, 『ジーニアス』には載っていないが、LPD では Shíkoku, Súbaru のアクセントがついている。語頭へのアクセントは例外的であり、今後3音節の語頭にアクセントの付く語が増えていくのかは明らかでない。

ODP にある日本語の語彙数からすると、第1強勢が付与される規則の適用は、語末第2音節への付与が断然多く、以下は次のような順位になる。

### (12) 主強勢規則の適用順位

1. 後ろから2番目の音節に強勢を付与する。
2. 後ろから2番目の音節が <a> か <o> でないなら、その前の音節に強勢を付加する。
3. 語末の <VV> と <VN> の音節に強勢を付与する。  
(bònsái, gài-jín, niséi の3語)
4. 語の主要な形態素に強勢を付与する。  
(àikidó, bùshidó, ùkiyo-é の3語)
5. 3音節語の語頭に強勢を付与する。  
(rómaji, Shíkoku, Súbaru の3語)
6. 語末に強勢を付与する。(tòfú の1語)

(10a) の語を見ると、一見米音の方が語末に第1強勢を置くように思われ

るが、必ずしもそうではなく、はっきりした違いとは言えない。両音の違いは、第1強勢よりはむしろ第2強勢の付与にある。前章で述べたように、第2強勢は第1強勢の位置によって決められる。まず最初に、第1強勢の前に第2強勢の付与される語を見てみよう。

(13) 語頭への第2強勢付与

a. 第1強勢直前の母音への付与

bònsái (米音)、fùtón[fù:tón](英音)、gàigín (英音)、gòbáng[gəubán]  
(英音)「碁盤」、màtsúri[mætsúri] (米音)、Màtsúshita[mætsuʃidə],  
tòfú[tòufú]

b. 第1強勢より2音節前の母音への付与

àikidó (米音)、bùshidó (英音)、Fùjiyáma「富士山」、hàra-kíri  
「腹切り」、hiragána「ひらがな」、Hìrohíto「裕仁」、Hìroshíma,  
ìkebána「生け花」、Ìshigúro, kàkemóno「掛け物」、kàmikáze「神風」、  
kàraóke「カラオケ」、kàtakána「カタカナ」、Kàwasáki「川崎」、  
Kùmamóto「熊本」、Kùrosáwa「黒澤」、Màtsushíta, Màtsuyáma  
「松山」、Mèiji Ténno「明治天皇」、Mitsubíshi, Nàgasáki「長崎」、  
òrigámi「折り紙」、shàkuháchi「尺八」、sùkiyáki「すき焼き」、  
Sùmitómo「住友」、tèriyáki「てりやき」、Tòkugáwa「徳川」、  
Yàmamóto「山本」、Yòkoháma「横浜」、yòkozúna

c. 第1強勢より3音節前の母音への付与

ùkiyo-é

cf. ukiyo-é *OED*, ukíyo-è *Webster*, ukiyo-é『研究社』第5版、

ùkiyo-é『研究社』第6版、ukíyo-è『ジーニアス』

(13a) のように直前の音節に第2強勢が付与されるのは、その音節が重音節であるのが普通である。ところが màtsúri と Màtsúshita の <a> には、短母音 [æ] に発音されているにもかかわらず強勢が付与されている。日本語の <a> に強勢を付与するのは、はっきりと強く発音するためである。一方、英

語の *magnétic* [mægnédik], *Manhátan* [mænhætn] の [æ] には第2強勢が付与されていない。日本語の発音と違って、強勢のある音節の前の母音は *Macdonald* [mækdónəld], *machine* [məʃɪn] のように曖昧母音の [ə] に発音されることもあり、非強勢音節と認識されている。

(13b) の語のように2音節前の母音に強勢を付与するのは、強弱強のリズムを作るためである。強勢の付与される母音は、*hàra-kíri* [hàrəkíri], *hìragána* [hìrəgónə], *Kùrosáwa* [kùrəsówə] のように長母音や二重母音でなくとも良い。第1強勢の2音節前には必然的に第2強勢が付与されるのが英語である。ところが原語の発音の影響を受け、第2強勢を付与しない語がある。「すき焼き」は原語では [sukijaki] と発音され、/su/ の /u/ は無声音になる。通常無声母音にアクセントは付かないので、ODPでは [sukijáki] と表記されている。これは英音であるが、この場合英語話者は [u] を発音していないと思われる。もしそうであれば、[skijáki] と表記するのが正しい。英語話者は通常 [sùkijáki] とは発音しないし、発音がむずかしい。辞典の記載どおり [u] を発音しているのであれば、英語にはリズムがあるので [sukijáki] と強弱強リズムで発音するはずである。

無声母音にアクセントの付かない例として、良く「三越」が引用される。*[mitsukōji]* は母音が無声化するために、第2音節は低く発音されるが、*[mitsubiji]* 「三菱」は [u] が有声音であるので高く発音されるというものである。これは「すき焼き」の発音と共通している。

(13c) の *ùkiyo-é* のアクセントについては前章で述べたが、*ukiyo-é* の弱強弱強パターンよりも強弱強パターンを取ったものである。英語にも *àristocrátic* (米、英音) ~ *aristocrátic* (英音)、*Ticonderóga* (米、英音) ~ *Ticònderóga* (英音) の二つの強勢パターンがあるのと同様である。

第2強勢の付与される語を見てきたが、第1強勢の前に第1強勢の付与される語がある。

#### (14) 語頭への第1強勢付与

*Íshigúro* (米音)、*Kágoshíma* (米、英音)、*Meíji Ténno* [meíjdzi ténòu]

(米音)、shàkuháchi (米音)

(14) の4音節語は、強弱強パターンであるが、語頭の母音に第1強勢が付いている。英語の *dísaffécted* (米音) や *nóninvólvement* (米音) のように接頭辞に第1強勢の付いた語と同じパターンである。第1強勢二つで強弱強リズムを作るのは米音の特徴であり、英音では通常第2強勢と第1強勢の強弱強パターンとなる。(14)の例で *Kágoshíma* だけが英音のアクセントにもなっている。米音への類推であろう。(14)の語は英音では *Ishigúro*, *Mèiji Ténno*, *shàkuháchi* のアクセントとなる。

第2強勢が第1強勢のうしろに付加される語を見てみよう。*ODP* では米音にのみ見られるパターンであり、英音では第1強勢母音の後の母音が強勢を取ることはない。例えば、*mandatory* [mændətòri] (米音)、[mándətə(r)i] (英音) と *library* [láibrèri] (米音)、[láb(rə)ri] (英音) を見ても、英音には第2強勢が付いていない。これは日本語に対しても同じであり、次の語のように第1強勢のうしろに第2強勢が付与されるのは米音である。

(15) 語末への第2強勢付与 (米音)

a. 第1強勢直後の母音への付与

bónsài, dójò 「道場」、fútòn, gétà 「下駄」、háikù 「俳句」、Hokkáidò 「北海道」、Hónshù 「本州」、Íshigúrò, Ítò 「伊藤」、kánbàn 「看板」、kòàn 「公案」、kyótò 「京都」、Mèiji Ténno, ninjútsù 「忍術」、Níppòn 「日本」、Níssàn 「日産」、rámèn 「ラーメン」、Sákài 「境」、SéndàI, shiátsù 「指圧」、Shikókù, Tókyò 「東京」、Yáyòi 「弥生」

b. 第1強勢より2音節うしろの母音への付与

búshidò, hábutài, háppi-còat 「はっぴ」、júdokà, sámisèn, sámurài, séppukù, Súbarù 「スバル」、tóriù 「鳥居」、Yámahà 「ヤマハ」

(15a) の語で、なぜ第2強勢が語末に付くのか判断できない語がある。前章から再三述べているが、二重母音 (<ai>, <oi>) や閉音節 (<on>, <an>) のよ

うに二つのモーラから成り立っている音節には強勢が付与され易い。実際 *ODP* では *ryókan* 「旅館」以外は、すべての重音節に強勢が付いている。問題は、(15a) の語には語末の <o>, <u>, <a> に強勢が付くが、*básho* 「場所」、*fúgu*, *kána* 「かな」の語末になぜ付かないかである。一般性のある規則を見つけるのはむずかしい。

(15b) の第2強勢は強弱強リズムを保つためである。*ODP* では第1強勢の2音節前には第2強勢が必然的に付与されるが、2音節うしろの音節は必ずしも強勢を取らない。次の語がそうである。

- (16) a. *Hiróshima*, *Màtsúshita*, *sátsuma*, *témpura* 「てんぷら」  
 b. *rómaji*

(16a) の語の第1強勢の次には <無声子音+高母音> の音節が来ているが、音節自体が短く聞こえるため語末の音節が第1強勢に近く感じられるのであろう。しかし、(15b) の *búshidò*, *séppukù* には <無声子音+高母音> の次の音節に強勢があるので、決めつけることはできない。(16b) の *rómaji* は語末が <i> なので強勢の付かないのが普通である。(15b) の *tóriu* の語末に強勢が付くのは、その前の <i> と区別するためであろう。英音の [tɔ:ri:] の発音であれば、強勢の付与がなくても [i] と [i:] に区別されるが、米音では [tɔ:ri] であり同じ音声の [i] が二つ並んでいる。語末に強勢を付与してリズムを作っているのである。

## 4.4 発音

### 4.4.1 嵌入の r

『研究社』にはないが、*ODP* の英音では随意的に語末に [r] を挿入する語がある。この [r] は本来あるはずのないものであり、余剰的に添加されたものである。*ODP* ではこれを嵌入 (かんにゅう) の *r* (intrusive *r*) と呼んでいるが、剰音の *r* (excrement *r*) とも呼ばれている。嵌入の *r* について *ODP*

は次のように述べている。

- (17) Intrusive <r> is a 'linking' <r> which is unhistorical and which is therefore not supported by orthography. For example, *law* in the phrase *law and order* is in BR frequently [lɔ:r] (i.e. [lɔ:r an(d) ɔ:də]). Long condemned by teachers of pronunciations, this is nevertheless a firmly established feature of today's mainstream RP: it is indicated in transcriptions by means of a convention similar to that for linking <r>, that is by parentheses, so that *law* is transcribed [lɔ:(r)], but with [r] italicized. (ODP: x ii)

(17) に述べられているように、嵌入の r は次の母音で始まる語に結びつく連結の役割をなしているが、語源的に裏付けされていないので、綴り字には表れていない。RP では r 挿入が主流であり、*law and order* は [lɔ:r an(d) ɔ:də] と発音される。*order* の語末の <r> は次に母音で始まる語が来ていないので発音されない。ODP では *law* の嵌入の r をイタリックで [lɔ:(r)] と表わし、*order* の語末の <r> は元来綴り字にあるので [ɔ:də(r)] と普通の活字で表わして、二つを区別している。

語末で [r] が発音されるかどうかは、次のように語末音節の母音による。  
次の語は ODP の英音である。

(18) 語末の [r]

- a. [ə]: dilemma [dɪlɛmə(r)], extra [ɛkstrə(r)], idea [aɪdɪə(r)],  
India [ɪndɪə(r)], Korea [kəriə(r)]  
[ɔ:]: draw [frɔ:(r)], saw [sɔ:(r)]  
[ɑ:]: schwa [ʃwɑ:(r)], spa [spɑ:(r)]
- b. [ə]: confer [kənʔə:(r)], transfer [tránsfə:(r)]  
[ɛ:]: air [ɛ:(r)] (米音は [ɛ(ə)r]) , bare [bɛ:(r)] (米音は [bɛ(ə)r])
- c. [i:]: agree [əgrí:], pea [pí:]

[i]: ability [abɪlɪti], ginea [ɡɪni]

[ɪ]: reply [rɪplɪ], Monday [mʌndɪ]

[u]: bamboo [bàmbú:], shampoo [ʃampú:]

(18a,b)のように、語末の *r* は非高母音の後ろに来ている。従って、英音では尾子音の [r] は中母音と低母音の後ろにのみ生ずることになる。(18a) の [r] は嵌入の *r* であり、(18b) の [r] は歴史的に存在する *r* である。嵌入の *r* は語末母音 [ə], [ɔ:], [ɑ:] に添加されているが、(18b) の [ə:] と [ɛ:] も中母音なので [r] の挿入があってもおかしくない。しかし、[ə:] と [ɛ:] の発音は綴り字 <r> の前にしか生じないので、嵌入の *r* が適用されたとは考えない。RP 話者は、[spɑ: r] and health の発音からは、[spɑ:r] が spa 「温泉」なのか spar 「スパーリング」なのか分らないのである。

(18c) は語末母音が高母音であるため *r* が挿入されない例であるが、英語では高母音が核音である音節では *r* が尾子音になることはない。綴り字では souvenir や sure は高母音であるが、発音は [sù:vənɪə(r)], [ʃʊə(r)/ʃɜ:(r)] であり [r] の直前は高母音ではない。シュワー[ə]が挿入されている。このことは、RP 話者が尾子音の *r* を認識するのは、音節のスペリングよりも発音によってであると言えよう。

*r* の挿入は日本語借用語にも同様に見られる。

#### (19) 嵌入の *r*

- a. [ə]: Akita [ɑ:kí:tə(r)], geisha [ɡéɪʃə(r)] 「芸者」, hiragana [hɪrəɡú:nə(r)],  
ikebana [ɪkɪbú:nə(r)], ninja [nɪndʒə(r)] 「忍者」  
b. [ɑ:]: Yamaha [jáməhɑ:(r)]

高母音以外に語末に来る母音は、日本語では [ə] と [ɑ:] だけであり、その書記素は <a> である。日本語への *r* 挿入は語末が <a> の場合であるが、RP 話者はスペリングよりも発音に対して *r* を挿入していると考えられる。日本語に英語の発音規則を適用した例である。

#### 4.4.2 米音と英音の強勢母音

日本語の書記素に対する発音を米音と英音を比較しながら見ていこう。まずアクセントのある母音を見てみる。

##### (20) <i> の強勢母音

###### a. [i] 米音、[i:] 英音

ai·kí·do [aíkídoʊ] (米音)、[aɪ·kí:·dəʊ] (英音)、Aríta, Ito,  
Kàgoshíma, Nísei, Tsushíma

###### b. [ɪ] 米音、英音共

Fu·jít·su [fu·dʒít·su] (米音)、[fu:·dʒɪt·su:] (英音)、  
gai·jín, Ish·i·gú·ro [ɪʃ·i·gú·rəʊ] (米音)、[ɪʃ·ɪ·guə·rəʊ]  
(英音)、Ju·jít·su, nín·ja, Níp·pon, Nís·san, pa·chín·ko 「パチ  
ンコ」, Shín·to 「神道」

###### c. [i] 米音、[ɪ] 英音

Mitsubíshi [mít·sʊ·bí·ʃɪ] (米音)、[mít·sʊ·bíʃ·ɪ] (英音)

###### d. [ɪ] 米音、[i:] 英音

Hìrohíto [hìr·ou·híd·ou] (米音)、[hìr·ə·hí:·təʊ] (英音)

アクセントのある <i> は開音節にあれば(20a) の語のように緊張母音 [i(:)] に発音され、閉音節であれば(20b) の語のように弛緩母音 [ɪ] に発音される。(20c) の米音、英音の発音の違いから、<sh> は特に英音では尾子音になる性質があるのが分る。英音では *Ishigúro* も *Mitsubíshi* も <ish> は [ɪʃ] と発音されるが、米音には [ɪʃ] と [iʃ] の二つの発音が見られ、一貫性がない。(20d) の発音の違いも音節構造の違いによるものである。<t> を [d] と有声音に発音する米音は、[d] を尾子音化したと考えられる。これは <t> の発音によって *thirteen* [θər·tín] と *thirty* [θərd·ɪ] に音節区分することと同じである。この音節区分は *LPD* のものであるが、強勢のある音節にその直後の頭子音を移動して重音節にするやり方は、前章で述べた *Selkirk*



(1982)の再音節化である。

(21) <a> の強勢母音

- a. [ɑ] 米音、[ɑ:] 英音

hi·bá·chi [hə·bá·tʃi] (米音)、[hi·bá:·tʃi] (英音) 「火鉢」、  
hìragána, kà·ke·mó·no, ráku, rámen, Sákai, sáke 「酒」、  
Shá·ka 「釈迦」, shàkuháchi, shiátsu, tèriyáki, Tòkugáwa

- b. [æ] 米音、[a] 英音

háp·pi [hæp·i] (米音)、[háp·i] (英音)、kàk·e·mó·no  
[kæk·ə·móu·nou] (米音のみ)、Màt·su·shí·ta, sám·i·sen,  
sám·u·rai, Sán·yo 「三洋」、shi·át·su [ʃi·át·su:] (英音のみ)

- c. [ɑ] 米音、[a] 英音

Daihátsu [dai·hát·su] (米音)、[dai·hát·su:] (英音) 「ダイハツ」、  
nuncháku [nən·tʃák·u] (米音)、[nʌn·tʃák·u:] (英音) 「ヌンチャク」、  
shiátsu [ʃi·át·sù] (米音)、[ʃi·á:·tsu:] (英音)

(21a)の強勢音節は開音節であり、(21b)の強勢音節は閉音節である。(21b)の kakemono の [kæk] が閉音節になるのは、無声破裂音 [k] を尾子音に移動したためである。(21c)の shiatsu の <at> の音節区分は、米音の方が <t> と <s> の間に音節境界を置く傾向が強いことを示している。

(22) <u> の強勢母音

- a. [u] 米音、[u:] 英音

a·zú·ki [ə·zú·ki] (米音)、[ə·zú:·ki] (英音)、fúgu 「ふぐ」、Fúji  
「富士」、fúton, kabúki, matsúri [mætsúri] (米音)、[matsú:ri] (英  
音)、ryú 「流」

- b. [u] 米音、英音共

júk·u [dʒúk·u] (米音)、[dʒúk·u:] (英音) 「塾」、Kùr·o·sá·wa

- c. [ə] 米音、[ʌ] 英音

nin·jút·su [nɪn·dʒót·sù] (米音)、[nɪn·dʒát·su:] (英音)

d. [ʊ] 米音、[u:] 英音

sùkiyáki [sùk·i·já·ki] (米音)、[sù:·kɪ·já:·ki] (英音)

e. [u] 米音、[ʊ] 英音

bú·shi·dò [bú·ʃi·dòʊ] (米音)、bùsh·i·dó[bùʃ·ɪ·dóʊ] (英音)

(22a) の緊張母音は開音節の発音であり、(22b) の弛緩母音は閉音節の発音である。(22b) の Kurosawa の <u> が [ʊ] に発音されるのは、英語では cure [kjʊ(ə)r] と <u> の前の母音は常に弛緩母音に発音されるからである。(22a) の matsuri は英語ならば [mætsú(ə)rɪ] と発音されるであろう。(22a) の発音は日本語に近くなるようにていねいに発音したものである。(22c) の ninjutsu は、中中舌母音の米音と英音の違いを反映している。(22d,e) は、これまでも述べたように [k] や [ʃ] は尾子音になり易いことを表わしている。

(23) <o> の強勢母音

a. [ou] 米音、[əʊ] 英音

dó·jo [dóʊ·dʒòʊ] (米音)、[dóʊ·dʒəʊ] (英音)、kàkemóno, kàraóke, kimóno, Kóbe 「神戸」, kóto 「琴」, Kyóto, rónin 「浪人」, shógun 「将軍」

b. [ɑ] 米音、[p] 英音

bón·sai [bón·sàɪ] (米音)、[bón·saɪ] (英音)、hón·cho 「班長」, Hón·da 「ホンダ」, Hón·shu (cf. fú·ton)

c. [ɔ] 米音、英音共

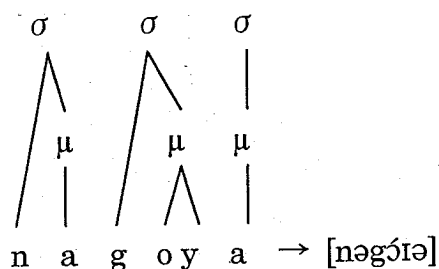
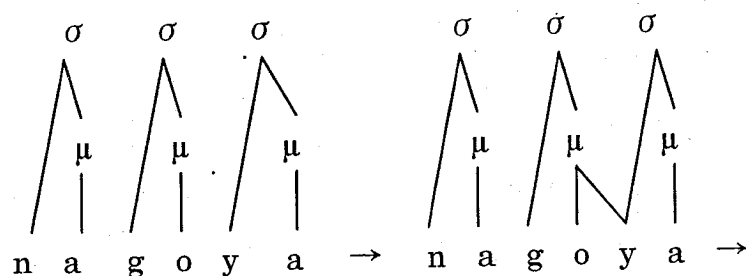
Na·góy·a [nə·góɪ·ə] (米音)、[nə·góɪ·ə(r)] (英音) 「名古屋」

<o> は米音では [ou] に、英音では [əʊ] になるのが圧倒的に多い。(23b) の [ɑ] と [p] の発音は、尾子音 <n> の前にある。この発音は cf. (confer) の fúton [f(j)útàn] (米音)、[f(j)ú:ton] (英音) のようにアクセントには関係が

ない。(23c) の <y> の前の [ɔ] は、1 音節内の <oy> を [ɔɪ] と発音している  
 のであり、前章で述べた再音節化が適用されている。

Nagoya の発音は次のように派生される。

(24) Nagoya の再音節化



書記素そのものが二重母音に発音されるのは <ai>, <ei>, <oi> の三つで  
 あり、アクセントに関係なくそれぞれ [aɪ/ʌɪ], [eɪ], [ɔɪ] と発音される。

(25) 二重母音

a. [aɪ] 米音、[ʌɪ] 英音

aikído [aɪkídou] (米音)、[ʌkí:dəu] (英音)、Ainu 「アイヌ族」、bónsai,  
gaijín,

háiku, Hokkáido, sámurai

b. [eɪ] 米音、英音共

géisha [géɪʃə] (米音)、[géɪʃə(r)] (英音)、Méiji Ténno, nísei

c. [ɔɪ] 米音、英音共

kói [kóɪ] 「鯉」、Yáyoi

(25a) の [aɪ] と [ʌɪ] の違いは、例えば英語の nice が [naɪs] (米音) と [nʌɪs] (英音) に発音されるのと同じである。

#### 4.4.3 米音と英音の非強勢母音

第3章では強勢のない音節にも長母音や二重母音がある例を多く見てきた。これは借用語の母音をはっきりと発音するためであり、英語には通常見られない発音である。ODPではどのような語に強勢のない長母音と二重母音が現れるのか見てみよう。(5)と(6)の母音表や(7)の発音例で見てきたように、長母音は英音にしか聞かれない。

#### (26) 語頭の非強勢長母音と二重母音

- a. <a>: Akíta [a:kí:tə(r)] (英音) (米音は [ɑ])  
           yakúza [jɑ:kú:zə(r)] (英音) (米音は [ɑ]) 「やくざ」  
           zazén [zɑ:zén] (英音) (米音は [ɑ]) 「座禅」
- b. <u>: Fujítsu [fu:dʒítsu:] (英音) (米音は [fu])
- c. <o>: Nogúchi [nougútʃi] (米音) (英音は [nɒ])  
           Ozáwa [ouzáwə] (米音) (英音は [ɒ]) 「小沢」  
           Osáka [ousú:kə] (米音)、[əusú:kə(r)] (英音) 「大阪」
- d. <ai>: aikído [aɪkídou] (米音)、[ʌɪkí:dəu] (英音)  
           Daihátsu [daihátsu] (米音)、[dʌihátsu:] (英音)  
           gaijín [gaɪdʒɪn] (米音)、[gʌɪdʒɪn] ~ [gʌɪdʒɪn] (英音)  
           zaibátsu [zaɪbátsu] (米音)、[zʌɪbátsu:] (英音) 「財閥」
- e. <ei>: Meiji Ténno [meɪɪdʒi ténəu] (米音) (英音は [mèɪdʒɪ ténəu])

原語(日本語)のスペリングが長母音・二重母音である場合には、借用語の発音も二重母音に発音される。Noguchi と Ozawa の <o> は原語では「オ」と発音されることから、英音では短母音の [ɒ] に発音されるが、Osaka の <o> は原語では「オオ」と発音されることから、英音でも [əu] と二重母

音に発音されている。次に語中の非強勢母音を見てみよう。

(27) 語中の非強勢長母音と二重母音

- a. <u> : shàkuháchi [ʃàku:há:tʃi] ~ [ʃàkuhá:tʃi] (英音) (米音は [ku])  
b. <o> : Hìrohíto [hìrouhídou] (米音) (英音は [rə])  
júdoka [dʒú:dəukə] (米音)、[dʒú:dəukə(r)] (英音)  
ùkiyo-é [ùkijəujér] (米音)、[ù:kijəujér] (英音)

ukiyo-e の <o> が英音でも [əu] と二重母音なのは、ukiyo を 1 語と見なしているからであろう。[ù:kijəu] という発音があっても、語末をあいまい母音に発音する [ù:kijə] は借用語には存在しない。

最後に、語末の非強勢母音を見てみよう。

(28) 語末の非強勢長母音と二重母音

- a. <u> : Daihátsu [daihátsu] (英音) (米音は [su]) ,  
Fujítsu [fu:dʒítsu] (英音) (米音は [su]) ,  
Kyúshu [kí:ʃu] (英音) (米音は [ʃu]) 「九州」  
nuncháku [nántʃáku] (英音) (米音は [ku])  
Súbaru [sú:bəru] (英音) (米音は [rù])  
b. <o> : aikído [aíkidou] (米音)、[aíki:dəu] (英音)  
kéndo [kéndou] (米音)、[kéndəu] (英音) 「剣道」  
súmo [sú:mou] (米音)、[sú:məu] (英音) 「相撲」  
dójo [dóudʒəu] (英音) (米音は [dʒòu] )  
Tókyo [tóukiəu] (英音) (米音は [òu] )  
c. <e> : Kóbe [kóubəi] ~ [kóu**i**] (英音) (米音は [bi] )  
sáke [sákei] ~ [sá:ki] (英音) (米音は [ki])  
d. <ai> : bónsai [bónsai] (英音) (米音は [sàɪ])  
hábutai [há:butai] (英音) (米音は [tài])  
sámurai [sám(j)urai] (英音) (米音は [ràɪ])

e. <ei> : nísei [ní:sei] (英音) (米音は [niséi])

(28a)の語末の <u> は英音が長母音に、米音が短母音である。同じ高母音でも、<i> については、『研究社』第6版同様、米音・英音とも緊張短母音の [i] である。語末の開音節の <o> はアクセントに関係なく、米音は [ou]、英音は [əu] であるが、ODPに唯一の例外として [báɒ] (米音)「場所」がある。(28c)の語は、米語では語末の二重母音に第2強勢が付くが、英音では第1強勢の後ろには第2強勢が付かないことを表わしている。(28e)は米音と英音でアクセントの違うものである。

原語に近い発音を記述するのが辞書の基本的考えであり、緊張母音や二重母音で記述し、借用語の母音をはっきりと発音させている。語末の開音節では特に顕著に見られるのであるが、これは英語の発音でもある。英語は基本的に、アクセントに関係なく語末の母音は緊張母音か長母音か二重母音であり、それ以外はあいまい母音の [ə] だけが可能である。次の英語の発音記号はODPからのものである。

## (29) 英語の語末の非強勢母音

### a. 緊張母音

[i:] : commíttee [kə'mídi] (米音)、[kə'míti:] (英音)

[i] : cándy [kæ'endi] (米音)、[kándi] (英音)

[u/u:] : árgue [árgju] (米音)、[á:gju:] (英音)

[ei] : bírthday [bé:θdeɪ] (英音) (米音は [bárθdèi])

[ou] : fóllo[w] [fáloʊ] (米音)、[fóləʊ] (英音)

### b. 長母音

[ɔ:] : séesaw [sí:so:(r)] (英音) (米音は [sísə])

[ɑ:] : cáviare [káviɑ:(r)] (英音) (米音は [kæviàr])

### c. 二重母音

[aɪ/ai] : álibi [áləbài] (英音) (米音は [æləbài])

[aʊ] : éyebrow [áibrau] (英音) (米音は [áibrəʊ])

[ɔɪ]: cówboy [káubɔɪ] (英音) (米音は [káubðɪ])

d. あいまい母音

[ə]: sófa [sóufə] (米音)、[sóufə(r)] (英音)

ODPの日本語の発音は、英語らしい発音と日本語らしい発音が混在しているのであるが、原則としては英語の発音規則に順じている。特にそれが見られるのが語末の開音節の母音であり、日本語の強勢のない <a> は例外なく [ə] に発音され、強勢のある <a> は例外なく [ɑ] に発音されている。

(30) 語末の <a> の発音

a. 強勢母音 [ɑ]

gétà [gétɑ] (米音) (英音は [géɪtə(r)])

júdokà [dʒúdɔukɑ] (米音) (英音は [dʒú:dəʊkə(r)])

b. 非強勢母音 [ə]

kána [kánə] (米音)、[kú:nə(r)] (英音) 「かな」

tánka [tánkə] (米音)、[tánkə(r)] (英音) 「短歌」

yóga [jóugə] (米音)、[jóugə(r)] (英音) 「ヨガ」

語末の <a> の発音に関して『研究社』とODPの違いは、『研究社』では強勢が付く語が多い。

4.4.4 <Vr> の発音

強勢高母音の <i> と <u> の次に <r> のある <Vr> の発音は、一般的に米音では [Vr] と短母音であり、英音では [Vər] と二重母音になる。これは英語の発音であるが、日本語にも同様の発音がなされる語がある。英語と日本語の発音が同じ語と異なる語を見てみよう。

(31) <ir> の発音

a. 英語: [ɪr] (米音)、[ɪər] (英音)

- déary [dírɪ] (米音)、[dʲæri] (英音)、  
 jéeringly [dʒírɪŋli] (米音)、[dʒíæriŋli] (英音)
- b. 日本語 : [ɪr] (米音)、[ɪər] (英音)  
 hira-gána [hírægúnə] (米音)、[híæragú:nə(r)] (英音)、  
 Kírin [kírɪn] (米音)、[kíæriɪn] (英音)
- c. 日本語 : [ɪr] (米音、英音共)  
 hàra-kíri [hèrəkíri] (米音)、[hàrəkíri] (英音)、hira-gána, Hirohíto,  
 Híroshíma

(31c) の語が英語であれば、英音では [ɪər] と発音されるはずである。日本語に近づけた <CV> 音節の発音となっている。

(32) <ur> の発音

- a. 英語 : [ʊr] 米音、[ʊər] 英音  
 cúrable [kjúrəbəl] (米音)、[kjúərəbl] (英音)、  
 cúrious [kjúriəs] (米音)、[kjúəriəs] (英音)
- b. 日本語 : [ʊr] 米音、[ʊər] 英音  
 tempúra [təmpúre] (米音)、[təmpúəre(r)] (英音)
- c. [ʊr] 米音、英音共  
 Kùr•o•sá•wa [kùrəsúwə] (米音)、[kùrəsú:wə(r)] (英音)
- d. [ʊr] 米音、[ʊər] 英音  
 Ì•shi•gú•ro [ìʃígúròʊ] (米音)、[ìʃígúərəʊ] (英音)
- e. [ʊr] 米音、[u:r] 英音  
 mat•sú•ri [màetsúri] (米音)、[matsú:ri] (英音)
- f. [ər] 米音、[ʊr/ər] 英音  
 sám•u•ràì [sémərài] (米音)、[sám(j)ʊrɪ] (英音)、  
 tém•pu•ra [témperə] (米音)、[tém(ə)rə(r)] (英音)

(32f) だけが <ur> の <u> にアクセントがない語である。<ur> の <u> が



弛緩母音 [u] に発音される (32c) の語では [r] は 尾子音とみなされ、緊張母音 [u/u:] や二重母音 [uə] と発音される (32d,e) の語では [r] はうしろの音節の頭子音とみなされる。日本語についてはそれで良いのであるが、英語の場合は、米音が弛緩母音であり、英音が二重母音であるので、[r] が尾子音か頭子音か決めるのは簡単ではない。実際、(32a) の curable と curious にしても、次の (33) のように音節の区切りは辞書によって異なっている。LDCE は *Longman Dictionary of Contemporary English* (1990) である。

- (33) a. cú·r·a·ble: 『研究社』, *Webster*, *LPD*, 『ジーニアス』  
 b. cú·ra·ble: *LDCE*  
 c. cú·r·i·ous: *LPD*  
 d. cú·ri·ous: 『研究社』, *Webster*, *LDCE*, 『ジーニアス』

LDCE は curable と curious の cu- が [kjuə] と二重母音に発音されるため CV- で音節区分し、LPD は 米音では cur- が [kjʊr] であり、<u> は基底形が短母音とみなされるので cur- で区分している。一方『研究社』、*Webster*、『ジーニアス』は curable を cur-, curious を cu- で音節区分している。これは curable の -able を接尾辞とみなしているからである。このように <cur> の発音が同じにもかかわらず、辞典によっては音節区分に違いがある。

非高母音の次に <r> が来る発音を見てみよう。

(34) <or> の発音

- a. 英語 : [ɔ(ə)r] (米音)、[ɔ:r] (英音)  
 tóre [tɔ(ə)r] (米音)、[tɔ:(r)] (英音)、  
 tórment [tɔrmènt] (米音)、[tɔ:ment] (英音)  
 b. 日本語 : [ɔr] (米音)、[ɔ:r] (英音)  
 satóri [sətóri] (米音)、[sətɔ:ri] (英音) 「悟り」、

- tórii [tórii] (米音)、[tɔ:ri:] (英音)、  
 zóri [zóri] (米音)、[zɔ:ri] (英音) 「草履」
- c. 英語 : [ɔr] (米音)、[ɒr] (英音)  
 órigin [órədʒən] (米音)、[ˈɒrɪdʒ(ɪ)n] (英音)、  
 sonóriti [sənórədi] (米音)、[sənˈɒrɪti] (英音)
- d. 日本語 : [ɔr] (米音)、[ɒr] (英音)  
 òrigámi [ɔrəgámi] (米音)、[ˈɒrɪgá:mi] (英音)、  
 zóri [zóri] (米音)、[zɔ:ri] (英音)

(34)の例は米音、英音間での <or> の発音の違いを表わしている。英語の発音がそのまま日本語に適用されている。(34a)の tóre [tɔ(ə)r] (米音) のシュワー挿入は <r> が語末の場合である。

(35) <ar> の発音

- a. 英語 : [ɑr] 米音、[ɑ:r] 英音  
 f̄arawáy [f̄urəwéɪ] (米音)、[f̄u:rəwéɪ] (英音)、  
 cárpet [kárpət] (米音)、[ká:rpɪt] (英音)
- b. 日本語 : [ɑr] 米音、[ɑ:r] 英音  
 Nára [ná:rə] (米音)、[ná:rə(r)] (英音) 「奈良」
- c. 英語 : [ɛr] 米音、[ɑr] 英音  
 carry [kéri] (米音)、[kári] (英音)、  
 marry [méri] (米音)、[mári] (英音)
- d. 日本語 : [ɛr] 米音、[ɑr] 英音  
 hàra-kíri [hèrəkíri] (米音)、[hàrəkíri] (英音)
- e. 英語 : [ər] 米音、英音共  
 aróund [əráund], arrést [ərést]
- f. 日本語 : [ər] 米音、英音共  
 Aríta [ərídə] (米音)、[ərí:tə(r)] (英音)、  
 karáte [kərádi] (米音)、[kərá:ti] (英音) 「空手」、

Súbaru [súbərù] (米音)、[sú:bəru:] (英音)

(35d)の hàra-kíri には他に米音として [hèrəkéri] もあるが、[ker] は [her] への母音調和であろう。<ar> も日本語のスペリングが英語のスペリングに対応し、英語と日本語の発音が同じになっている。

ODP によると、米音では marry, merry, Mary が共に [meri] と発音されるが、英音では marry は [mari], merry は [meri], Mary は [mɛ:ri] とそれぞれ発音が異なっている。Mary は仮名で「メアリー」と書くように、『研究社』の発音では /méʔri/ (米音)、/méəri/ (英音) となっている。

#### (36) <er> の発音

a. 英語 : [er] 米音、英音共

ferry [féri]

b. 日本語 : [er] 米音、英音共

tèriyáki [tèrijáki] (米音)、[tèrijá:ki] (英音)

ここで <Vr> の発音を取り上げたのは、/r/ の前での母音は、その発音が多様化しているからである。hurry [həri] (米音)、[hari] (英音) や worry [wəri] (米音)、[wari] (英音) のように、強勢母音が中中舌母音になることは日本語の発音にはない。日本語の発音は、基本的に五つであると認識されているためである。

## 4.5 おわりに

辞典の発音記号をどの程度信じればよいのか、どの辞典の発音記号が正しいのか、という疑問は、辞典に多く接すればするほど増す。辞典に書かれているものは絶対的なものであり、事実を的確に伝えているという考えは誰しも持っている。だから、二つの辞典が異なる記述、説明をしているのに出会った場合、我々は一方を捨て、他方を取るという気にはなれない。二つを比

べて見て、両者の違いについて考えてみるであろう。

第3章と第4章では、『研究社』と *ODP* を使用した。両辞典の違いは我々の想像以上のものであった。別の辞典を使うと、また別の顔が現れるであろう。辞典はそれなりに整った顔をしていて、独自の特徴を出そうとしている。辞典の色々な顔に魅せられて発音記号の研究を続けていくと、何章になるのだろうか。

*The Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English* に載っている  
日本語の発音記号一覧表

	米音	英音	日本語
aikido	[aɪkɪdou] [aɪkidou]	[aɪkɪ:dəʊ]	合気道
Ainu	[áɪnù]	[áɪnu:]	アイヌ族
Akita	[a:kídə]	[a:kɪ:tə(r)]	秋田犬
Arita	[ərídə]	[ərí:tə(r)]	有田焼
azuki	[əzúki]	[əzú:ki]	あずき
basho	[báɔ̃] [báɔ̃ʊ]	[báɔ̃ʊ]	場所 (相撲)
bonsai	[bánsàɪ] [bànsái]	[bónsaɪ]	盆栽
bushido	[búʃɪdòʊ]	[bʊʃɪ:dəʊ] [bʊʃɪdóʊ]	武士道
Daihatsu	[daɪhátsu]	[daɪhátsu:]	ダイハツ
dojo	[dóʊdʒòʊ]	[dóʊdʒəʊ]	道場
Edo	[ídou] [édou]	[édəʊ]	江戸
fugu	[f(j)úgu]	[fú:gu:]	ふぐ
Fuji	[fúdʒɪ]	[fú:dʒɪ]	富士
Fujitsu	[fudʒítsu]	[fu:dʒítsu:]	富士通
Fujiyama	[fùdʒɪjámə]	[fù:dʒɪjámə(r)]	富士山
futon	[f(j)útàn]	[f(j)ú:tɒn] [f(j)ú:tɒn]	布団
gaijin	[gaɪdʒín]	[gáɪdʒín] [gaɪdʒín]	外人
geisha	[géɪʃə]	[géɪʃə(r)]	芸者

	[gíʃə]		
geta	[gétà]	[géItə(r)]	下駄
gobang	[gouʋbáŋ]	[gəʋbáŋ]	碁盤
habutai	[háʋbətàɪ]	[há:butaɪ]	羽二重
		[há:bətaɪ]	
haiku	[háɪkù]	[háɪku:]	俳句
happi	[háɛpi]	[hápi]	はっぴ
happi-coat	[háɛpikòut]	[hápi:kəʊt]	はっぴ
hara-kiri	[hèrəkíri]	[hàrəkíri]	腹切り
	[hèrəkéri]		
hibachi	[həbátʃi]	[hiʋbá:tʃi]	火鉢
		[həbá:tʃi]	
hiragana	[hìrəgánə]	[hìrəgá:nə(r)]	ひらがな
		[hìərəgá:nə(r)]	
Hirohito	[hìroʋhídou]	[hìrəhí:təʋ]	裕仁 (昭和天皇)
	[híroʋhídou]		
Hiroshima	[hìroʋʃimə]	[hiʋróʃimə(r)]	広島
	[hiʋróʋʃəmə]	[hiʋróʃəmə(r)]	
		[hìrəʃi:mə(r)]	
Hokkaido	[həkáidəʋ]	[həkáidəʋ]	北海道
hokku	[hókù]	[hoku:]	発句
	[háku]		
honcho	[hán(t)ʃou]	[hóntʃəʋ]	班長
Honda	[hándə]	[hóndə(r)]	ホンダ
Honshu	[hánʃù]	[hónʃu:]	本州
ikebana	[ìkəbánə]	[ìkiʋbá:nə(r)]	生け花
		[ìkəbá:nə(r)]	
		[ì:keiʋbá:nə(r)]	
Ishiguro	[ìʃìgúròʋ]	[ìʃìgúəərəʋ]	イシグロ (加賀 友和)

	[íʃigúròu]		(石黒一雄)
Ito	[ídòu]	[í:təu]	伊藤 (博文)
judo	[dʒúdou]	[dʒú:dəu]	柔道
judoka	[dʒúdoukà]	[dʒú:dəukə(r)]	柔道家
	[dʒùdouká]		
jujitsu	[dʒùdʒítsu]	[dʒù:dʒítsu:]	柔術
jujutsu	[dʒùdʒítsu]	[dʒù:dʒátsu:]	柔術
juku	[dʒúku]	[dʒúku:]	塾
kabuki	[kəbúki]	[kəbú:ki]	歌舞伎
Kagoshima	[káɡəʃimə]	[káɡəʃi:mə(r)]	鹿児島
kakemono	[kàkə móunou]	[kà:kimóunəu]	掛け物
	[kækə móunou]	[kà:kə móunəu]	
kamikaze	[kàməkázi]	[kà míkú:zi]	神風
		[kàməká:zi]	
kana	[kánə]	[ká:nə(r)]	かな
kanban	[kánbàn]	[kánban]	看板
kanji	[kándʒi]	[kándʒi]	漢字
Kano	[kánou]	[ká:nəu]	狩野
karaoke	[kèrióuki]	[kàrióuki]	カラオケ
		[kàrəóuki]	
karate	[kərúdi]	[kərú:ti]	空手
katakana	[kàdəkánə]	[kàtəká:nə(r)]	カタカナ
Kawasaki	[kàwəsáki]	[kàwəsá:ki]	川崎
		[kà:wəsá:ki]	
		[kàwəsáki]	
ken	[ken]	[ken]	県
kendo	[kéndou]	[kéndəu]	剣道
kimono	[kə móunou]	[kimóunəu]	着物
	[kə móunə]	[kə móunəu]	

Kinki	[kínki]	[kínki]	近畿
Kirin	[kírín]	[kíərín]	麒麟
koan	[kóuàn]	[kéuan]	(禪宗の)公案
Kobe	[kóubi]	[kéubi]	神戸
		[kéubei]	
koi	[kɔi]	[kɔi]	鯉
koto	[kóudou]	[kéutəu]	琴
Kumamoto	[kùməmóudou]	[kù:məméutəu]	熊本
	[kúməmóudou]		
Kurosawa	[kùrəsáwə]	[kùrəsú:wə(r)]	黒澤 (明)
Kyoto	[ki(j)óudou]	[kiéutəu]	京都
	[ki(j)óutòu]		
Kyushu	[kijúfu]	[kiú:fu:]	九州
		[kjú:fu:]	
Matsui	[mætsúi]	[matsú:i]	松井 (須磨子?)
matsuri	[mætsúri]	[matsú:ri]	祭り
Matsushita	[mætsúʃidə]	[matsuʃi:tə(r)]	松下
Matsuyama	[mætsəjá:mə]	[matsujá:mə(r)]	松山
		[mætsəjá:mə(r)]	
Meiji Tenno	[meiɪdʒi ténòu]	[mèiɪdʒi ténəu]	明治天皇
	[meiɪdʒi ténòu]		
mikado	[mækádou]	[míká:dəu]	帝
		[mæká:dəu]	
Mitsubishi	[mìtsubíʃi]	[mìtsubíʃi]	三菱
		[mìtsəbíʃi]	
mizuna	[mæzúnə]	[mizú:nə(r)]	水菜
		[mæzú:nə(r)]	
Nagasaki	[nàgəsáki]	[nàgəsá:ki]	長崎
Nagoya	[nəgóɾə]	[nəgóɾə(r)]	名古屋



Nara	[ná:rə]	[ná:rə(r)]	奈良
netsuke	[néts(u)ki]	[néts(u)ki]	根付け
ninja	[níndʒə]	[níndʒə(r)]	忍者
ninjutsu	[nIndʒétsù]	[nIndʒátsu:]	忍術
Nintendo	[nInténdou]	[nInténdəu]	任天堂
Nippon	[nípàn]	[nípɒn]	日本
Nipponese	[nìpəníz]	[nìpəní:z]	日本人(の)
nisei	[niséi]	[ní:sei]	二世
Nissan	[nísàn]	[nísan]	日産
no, Noh	[nou]	[nəu]	能
Noguchi	[noUgútʃi]	[nɒgú:tʃi]	ノグチ (イサム)
		[nəgú:tʃi]	
nunchaku	[nəntʃáku]	[nʌntʃáku:]	ヌンチャク
obi	[óubi]	[éubi]	帯
origami	[ðrəgámi]	[ðrigá:mi]	折り紙
		[ðrəgá:mi]	
Osaka	[ousákə]	[əusá:kə(r)]	大阪
Ozawa	[ouzáwə]	[ɒzá:wə(r)]	小沢 (征爾)
pachinko	[pətʃínkou]	[pətʃínkəu]	パチンコ
raku	[rákù]	[rá:ku:]	楽焼
ramen	[rámèn]	[rá:men]	ラーメン
romaji	[róumədʒi]	[réumədʒi]	ローマ字
ronin	[róunən]	[réunɪn]	浪人
ryokan	[riókəŋ]	[riókəŋ]	旅館
		[riókəŋ]	
ryu	[riú]	[riú:]	(何々) 流
Sakai	[sákai]	[sá:kai]	堺
sake	[sáki]	[sá:ki]	酒
		[sákei]	

samisen	[sæməsɛn]	[sámɪsɛn]	三味線
samurai	[sæməraɪ]	[sám(j)UrAI]	侍
		[sám(j)əraɪ]	
Sanyo	[sænjou]	[sánjəʊ]	三洋
Sapporo	[səpórou]	[səpó:rəʊ]	札幌
sashimi	[sɒʃimi]	[sáʃimi]	刺身
satori	[sətóri]	[sətó:ri]	悟り
satsuma	[sætsúmə]	[satsú:mə(r)]	薩摩焼き
	[sætsəmə]		
Sendai	[séndaɪ]	[séndaɪ]	仙台
seppuku	[sépukù]	[sepú:ku:]	切腹
	[sepúkù]		
Shaka	[ʃákə]	[ʃá:kə(r)]	釈迦
	[ʃækə]		
shakuhachi	[ʃákuhátʃi]	[ʃàku:há:tʃi]	尺八
		[ʃàkuhátʃi]	
shiatsu	[ʃiátsù]	[ʃiá:tsu:]	指圧
		[ʃiátsu:]	
Shikoku	[ʃəkóʊkù]	[ʃi:kəʊku:]	四国
	[ʃəkákù]		
Shinto	[ʃín(t)ou]	[ʃíntəʊ]	神道
Shogun	[ʃóʊgən]	[ʃóʊgʌn]	將軍
		[ʃóʊg(ə)n]	
shogunate	[ʃóʊgənət]	[ʃóʊgəneɪt]	將軍職
	[ʃóʊgənèɪt]	[ʃóʊgɐneɪt]	
		[ʃóʊgənət]	
		[ʃóʊgɐnət]	
shoyu	[ʃóʊju]	[ʃóʊju:]	醤油
Soto	[sóudou]	[ʃóutəʊ]	曹洞宗

Subaru	[súbərù]	[sú:bəru:]	スバル
		[subá:ru:]	
		[səbá:ru:]	
sukiyaki	[sukijáki]	[sù:kijá:ki]	すき焼き
		[sùkijá:ki]	
		[sù:kijáki]	
		[sùkijáki]	
Sumitomo	[sùmətóUmou]	[sù:mitéUməu]	住友
sumo	[súmou]	[sú:məu]	相撲
sushi	[súʃi]	[sú:ʃi]	寿司
Suzuki	[səzúki]	[suzú:ki]	鈴木
		[səzú:ki]	
tanka	[tánkə]	[tánkə(r)]	短歌
		[tá:ŋkə(r)]	
tatami	[tətámi]	[tətá:mi]	畳
		[tatá:mi]	
		[ta:tá:mi]	
tempura	[tempúre]	[tempúərə(r)]	てんぷら
	[témpərə]	[témp(ə)rə(r)]	
tenno	[ténou]	[ténəu]	天皇
teriyaki	[tèrijáki]	[tèrijá:ki]	てりやき
		[tèrəjá:ki]	
		[tèrijáki]	
		[tèrəjáki]	
tofu	[tòufú]	[təufu:]	豆腐
Togo	[tóugou]	[təugəu]	東郷 (茂徳)
Tojo	[tóudʒòu]	[təudʒəu]	東条 (英樹)
Tokugawa	[tòukugáwə]	[təukugá:wə(r)]	徳川
Tokyo	[tóukiðu]	[təukiəu]	東京

torii	[tó:rii]	[tɔ:rii:]	鳥居
tsunami	[(t)sunámi]	[(t)suná:mi]	津波
Tsushima	[(t)suʃimə]	[(t)suʃi:mə(r)]	対馬
ukiyo-e	[ùkijoujéi]	[ù:kiɲəujéi]	浮世絵
Yagi antenna	[jági ənténə]	[jági ənténə(r)]	八木アンテナ
yakuza	[jakúzə]	[ja:kú:zə(r)]	やくざ
		[jəkú:zə(r)]	
Yamaha	[jáməhà]	[jáməha:(r)]	ヤマハ
Yamamoto	[jàməmóudou]	[jàməméutəu]	山本 (五十六)
Yayoi	[jájði]	[já:jɔi]	弥生
yen	[jɛn]	[jɛn]	円
yoga	[jóugə]	[jóugə(r)]	ヨガ
Yokohama	[jòukəhámə]	[jòukəhá:mə(r)]	横浜
yokozuna	[jòukəzúnə]	[jòukəzú:nə(r)]	横綱
zaibatsu	[zaibátsu]	[zaibátsu:]	財閥
zazen	[zazén]	[za:zén]	座禅
Zen	[zén]	[zɛn]	禅
zori	[zóri]	[zɔ:ri]	草履
		[zɔ̃ri]	

## おわりに

「はしがき」にも書いてあるが、本書の目的は日英両言語の特徴が、どのように借用語に反映しえているのか、そして借用語には言語の普遍性がどのような形で見られるのかにあった。本書を終えるに当たり、借用語の特徴と普遍性についてまとめて見よう。

まず、英語から日本語へ取り入れられた借用語を述べよう。外来語の促音には二つの作業が必要である。一つは子音挿入であり、もう一つは母音挿入である。子音挿入は英語の /CVC/ 音節を保持するためであるが、同じ /CVC/ 音節でも *might* /maɪt/ には子音を付加しないが、*mat* /mæt/ は *matto* 「マット」と重子音になる。重子音の前が短母音でなければならないのは、日本語のみならず言語に一般的に見られる現象である。更に、子音の連結をさける母音挿入についても、最も中立的な「ウ」の挿入が多いのであるが、その現象はレナケル語にも見られる。英語でも *rhythm* [rɪðəm], *cash* [kæʃ] のシュワー挿入も、それが最も舌の移動や唇の開きのない中立的な母音だからである。このように子音重複を避けるために最も自然な母音を挿入するのも言語に一般的な現象である。

日本語のアクセントは、その語に固有のものであり、その位置は予測できない。一方外来語のアクセントは予測できるものが多い。外来語の音節体系は日本語に順じたものであるが、アクセント付与については英語のように重音節か軽音節かが大いに関与している。重音節にアクセントが付与されるというのは、重い音のかたまりが感じ取れるからである。

第2章では日本語のアクセントと無声音化について多く論じた。これは複雑な日本語の発音規則に対し、いかに外来語のアクセントがいかに単純であるかを述べるためである。外来語は日本語の一部であるが、別の言語の様相を備えているのである。

第3章と第4章では、英語に入った日本語の特徴について述べた。日本語

の中の外来語の音体系が日本語に順じているのであるから、英語の中の日本語が英語の音体系に順じているのは理に適っている。OEDからの例を挙げると、[təukənəʊmə]「床の間」, [jəukəzɪ:nə]「横綱」のように、強勢のない母音をシュワの [ə] に発音している。この場合日本語の母音をはっきりしない。一方では、借用語に日本語の特徴も見られる。日本語は基本的には /CV/ の開音節であるので、アクセントに関係なく強勢母音のように発音する語がある。これもOEDからの例であるが、[bú:ʃi:dəʊ]「武士道」, [há:bu:taɪ]「羽二重」, [ka:kí:emɔ:n]「柿右衛門」は母音をはっきりと発音している。借用語の発音に一貫性が欠けているケースは良く見られるが、それだけ借用語のスペリングから発音を引き出すには多様性がある。借用語として捉えるのか、英語として捉えるのかによって発音の異なるものもある。OEDで「漆」は [urú:ʃɪ] と発音されるが、「ウルシオール」は [ərú:ʃɔɪl] である。

英語に入った日本語のアクセント規則は、重音節にアクセントを付与するという英語の規則に順じているように思えるが、そうではなく、本論文では外来語のアクセント付与には普遍的な原則があるとする。その例として弘前方言を挙げているが、驚くぐらい日本語借用語のアクセント規則に似ている。母国語話者は借用語を母語の発音規則を適用していると感じているだろう。しかし実際には、そこには借用語に独自の普遍性が潜んでいるのである。人間言語とはそのようなものである。

## 使用辞典

- 『ジーニアス英和大辞典』大修館書店 (2001)
- 『研究社新英和大辞典』第5版 (2000)
- 『研究社新英和大辞典』第6版 (2002)
- 『コンサイスカタカナ語辞典』第2版、三省堂(2002)
- Longman Dictionary of Contemporary English*(1993)
- Longman Pronunciation Dictionary, New Edition*(2000)
- 『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会(1995)
- 『新明解日本語アクセント辞典』三省堂(2001)
- Random House Webster's Unabridged Electronic Dictionary*(1996)
- Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*(2001)
- The Oxford English Dictionary , Second Edition*, CD, ver 3(2002)
- Webster's Third New International Dictionary* (1993)

## 参考文献

- Broselow, E. (1995) Skeletal Positions and Moras. *The Handbook of Phonological Theory*, ed. by J. A. Goldsmith, 175-205. Blackwell.
- Chomsky, N. and M. Halle. (1968) *The Sound Pattern of English*. Harper & Row.
- Hayes, B. (1984) The Phonology of Rhythm in English. *Linguistic Inquiry* 15, 33-74.
- Hayes, B. (1989) Compensatory Lengthening in Moraic Phonology. *Linguistic Inquiry*, 20, 2. 253-306.
- 城生伯太郎. (1998) 『日本語音声科学』株式会社バンダイ・ミュージックエンタテインメント
- 郡司利男 (1986) 『英語逆引辞典』開文社出版
- Kager, R. (1999) *Optimality Theory, Cambridge Textbooks in Linguistics*, Cambridge University Press.
- Kahn, D. (1976) *Syllable-Based Generalizations in English Phonology*. Doctoral dissertation, MIT.
- Kiparsky, P. (1979) Metrical Structure Assignment is Cyclic. *Linguistic Inquiry* 10, 421-41.
- 小林泰秀 (1996) 『英語強勢論』京都修学社.
- 小林泰秀 (2001) 「英語の音節構造は両音節性か再音節性か」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第4号、1-28.
- 小林泰秀 (2004) 「英語Rの発音と発音記号」『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第7号、1-27.
- 窪蘭晴夫 (1995) 『語形成と音韻構造』くろしお出版.
- 窪蘭晴夫 (1999) 『日本語の音声』(現代言語学入門2) 岩波書店.



- Ladefoged, P. (1975) *A Course in Phonetics*. Harcourt Brace Javanovich, Inc.
- Liberman, M. and A. Prince (1977) On Stress and Linguistic Rhythm. *Linguistic Inquiry* 8, 249-336.
- 新村出 編 (1991) 『広辞苑』第4版、岩波書店
- 大槻文彦 (1935-37) 『大言海』富山房
- Prince, S. Alan. 1984. Phonology with Tiers. In *Language Sound Structure*, ed. M. Aronoff and R. Oehrle. MIT. 234-244.  
Also in *Phonological Theory: The Essential Readings*, ed. John A. Goldsmith. Blackwell. 1999. 303-312.
- Selkirk, E. O. (1982) The Syllable. *The Structure of Phonological Representations (Part II)*, ed. by H. v. d. Hulst and N. Smith, 337-83. Foris.
- 吉沢典男・石綿敏雄 (1990) 『外来語の語源』角川書店